

彼等を目して直ちに今日の意味に於ける眞誠なる歴史的研究者と爲すを許さず。其故は彼等の研究は偏頗の謗を免れず、彼等は事實を蒐集し、歴史を尋ねるに方り、主として英國のみに限局し、廣く各國各時に涉りて比較的研究を試むることを爲さざればなり。尤もヒューム、アダム・スミス、ブーサー・ヤング等は皆モンテスキューの例に倣ひて諸國諸時代の事實を蒐めて比較し、此比較より結論を下すを試みたりと雖も、例へばアダム・スミスの「各國に於ける富有の進歩」を見其蒐むる處は断片的にして、論ずる處系統的體系を具へず。其觀察區々の末に走りて、重要な關係ある大事實を閑却し、又蒐集し得たる事實を十分に利用すると能はず、従つて此等事實より推究せる大體的結論に、著しき缺陷を殘せり。リカルド并に其學説を奉ずる學者は、議論の趣を簡便にせんとて、人間を一定不動のものと看做し、其變遷を全く度外に置いて論を立てたり。彼等の見て一般普通の人間となしたるものは、所謂「シテ・マン」(倫敦の實業家)にして、他の階級の人間の經濟上に於て爲す所、全く之れに同じと推定せり。尤も彼等と雖も、英人以外の他國民は、各其特有の點を有し、研究に値する差異あるを知らざりしにあらす、唯だ彼等謂らく、此等特別の點は、他國人にして一度英

國人の教を受け之に倣ふに到らば直ちに消滅す可きものなりと。此の點は、單に彼等學者にのみ責む可き所にあらず、元來英國人に特有なる自信強く、他を劣等視する通弊に胚胎する所なり。今日にても英語は世界語たる可しと自信する英人尠からず、我邦に於ては英人の國自慢説を如何にも眞理なるが如く尊信する論者亦あり而して此種の謬想に基きたる經濟論は、貨幣并に外國貿易に關するものに就ては、其弊害未だ甚しからざりしも、其論一度汎く人間全體に涉り、經濟的諸階級間に起る諸問題殊に勞働の問題に及ぶに到り著しき缺陷を暴露せり。

彼等は人間の心理的作用を全然度外視し、勞働を純然たる一の商品と看做し、其の價は死物なる商品の價と全く同一の需要供給原則のみによりて定めらるゝものとし、之より所謂「利潤の法則」并に「賃銀の法則」を立て、此根本の法則を以て凡ての經濟現象を論定す可しとせり。彼等の最大缺點は、産業上の制度習慣は絶えず變遷進化して已むこゝなく、經濟上の現象は此變遷に伴ひて、常に其趣を更めつゝあるを顧みざるにあり。就中彼等は只管眼を富者の上のみ注ぎ、身を貧者の地位に置き、同情と諒解を以て其問題を究むる事を爲さず、貧者の貧乏を經濟上の劣者が受く可き當然の運命なりと斷定し、其

實貧者が經濟上の劣者たり、生産力に乏しきは、其貧乏の原因たるよりも、寧ろ結果にして、貧者をして一度貧乏の苦痛より脱せしむる時は、其生産力は頓に高まり、經濟上の劣者たる地位を脱し得ることを思はず、今日の經濟學に於て、一般に最重要の研究問題とせらるる勞働階級の向上發展に甚だ冷淡にして、經濟上の弱者たり、劣者たる勞働階級の地位は之れを改良する望なき確定不易の現象と見るに止まれり。

斯くの如き偏頗にして狹隘なる見地を踞踏し、一片の理法より萬事を演繹して足れりとする學説は、實際生活の進歩すればする程、之れと隔離すること甚しく、到底實用なき迂遠の机上論たるに終り、殊に實際生活の上に於て愈々重要を加へ來れる勞働者の問題の解答に、寸毫の寄與する所なく、却て進歩改良の妨害を爲すに過ぎざるに至れり。かくて經濟學は革新改造の氣運に迫まれざる能はず。這箇の經濟學に對して先づ攻撃の矢を放ちたるものは社會主義の學説なり。社會主義の論者は、時の經濟學者に反抗して、人類改善の希望洋々たるものあるを主張し、一新旗幟を樹て、爲に間接に斯學の進歩と社會上の諸問題のより、深き觀察に貢獻したる功決して没す可からず。然れども惜哉、彼等は

嚴密精緻なる歴史的純理的研究兩ながら之れを缺き、誇張の言、矯激の論を専にしたる爲め、「ビジネスライキ」(實務的)なるを以て本領とせる當時の經濟學者に甚しく蔑視せられ、功は過に掩はれて顯はれず。彼等は口を極めて時の經濟學説を攻撃したれども、多くは耳食の論に止り、敵とする經濟學説を十分に究めて後立論すること爲さず。理論の上に於て到底、其の敵手たる能はず、輒く其の論破する所となり、反對論者をして自己の所論に傾聽せしむる力を缺けり。彼等は根本の主張に於て没す可からざる一大眞理を有するに拘らず、態度の慎重ならざる、慮りて深からざる、氣鋭の客氣に趨せて他を容るゝの雅量を有せざるが爲めに、實際に於て捨つ可からざる眞理を、學理の上に於て建設する事能はず、唯一種の感情論と看做さるゝに止まれり。然れども當時理論に弱かりし彼等は、感情の上に於ては甚だ強く、殊に當時の學者の殆んぞ捨て、顧みざりし下層階級の實情に通ずる詳密なるが爲め、此點に關する彼等の所論は、理論としては不備たるを免れざりしも、實際に於て人類の深き要求に應ずること經濟學者の學説に勝り、極端の論、蕪雜の言の中、自ら深遠剴切なる眞理を包み、經濟學者并に哲學者の細心研鑽に値するものあり、終

に斯學革新の機運を啓く導火となれり。就中佛國の大哲學者オーギュスト・コントが此の社會主義に負ふ所の大なるは、須知の事實なり。又た英國經濟學中興の祖と認めらるるジョン・スチュアート・ミルが、其妻より社會主義思想の影響を受け、晩年思想上に一大變化を來したることは、自ら明かに其自叙傳に告白する處なり。

今日の經濟學の舊式經濟論と相分つ所は甚だ多々なり。雖も其根本的差異は、一言を以て道ひ盡くすを得可し。曰く人生に對する其見解の全然異なることは是れなり。舊式の經濟學者は人間の性格と能力とを一定不動としたるに反し、今日の學者は人間の性格も能力も共に包圍の事情の結果に外ならずとす。今斯くの如き變化を喚起したる原因を尋ぬるに凡そ三あり。

- 一 最近五十年間に於て人間の性質に於ける變化が實際上甚だ急激にして、學者之を看過する能はざるに至りしこと。
- 二 社會主義の議論の影響甚だ大なりしこと。
- 三 自然科學に於ける大進歩、殊にダルウキンの進化論は、社會科學の上にも大なる影

響を及ぼし、終に人類と其社會生活とを以て、自然界に於けると均しく、一定不易のものならず、絶へざる進化發展の產物と觀察するに至れること。

今此等三原因の相共に働きて新生面を開くに至れるものを、ジョン・スチュアート・ミルの學説と爲す。續て、クリフレスリーあり、専ら歴史的研究の方面を開拓し、其他バチオット・ケルンズ、トインビー等あり、何れも皆新傾向の促進に預りて力あり。殊にジェヴォンスに至ては、ミル以後に於ける最卓越の學者にして、理論の上に於てミルを凌駕して、新局面を開拓すると多し。然れどもミル一度去つて以來、英國は從來獨占し來れる經濟學の郷國たる地位を失ひ、此特典を分つ權利を有する國他に起れり。佛國にはセー、クールノ等の學者ありて、多くの點に於て英國學者の誤謬を匡正したり。然れども佛國の經濟學上の貢獻は、此等専門經濟學者によりて爲されたるものは寧ろ少く、却て其敵たりし社會主義者に待つ所多し。即ちフリエー、サン・シモン、ブルドーン、ルイ・ブランの四人は、後世の學理的社會主義の先驅にして、其間接の感化輕視す可からず。米國に於ても近來經濟學著しく發達するが如し、雖も今日迄に生じたる最大の米國經濟學者は、ケリーにして、其

重なる事功は英國學者の自由貿易論に反對して、保護主義を唱道したるにあり。和蘭伊太利瑞典露西亞に於ても亦近時經濟學の研究盛なり。然り然り雖も、近世經濟學の發達に最大の貢獻を爲し、英國に交代して現今新學進歩の嚮導者たるものは獨逸の學者なり。蓋しリカルド派の徒らに自尊自信に強く、島國的偏狹を忌憚なく表はせる學說を憤るの念最も深く、之れに反抗せんとの精神の最も熾なりし國は、産業上の競争に於て永く英國の後塵を拜したる後漸く之れを對抗し得るに至れる獨逸の學者なる可きは、理に於て當然なり。殊に英國の國情を其必要に應じて立論せられたる自由貿易論は、工業國たる英國に取りてこそ大過なきを得れ、經濟上の進歩未だ之に及ばず、主として農業國たりし獨逸には實際上直ちに適用し難きもの多々あり。されば獨逸學者の先づ第一に英國學者に反抗したるは、其貿易論商業政策論にありて、英國學者以外一新旗幟を醸して先づ起ちたる獨逸學者はフリードリヒリストなり。彼を以て今日流行の保護政策論の鼻祖を爲すものあれども、是は當を得ず、リストは英國に就ては從來の英國學者の所論大體に於て誤なしとし、唯だ工業の發達未だ十分ならざる國にありては、幼者保育の趣意を以

てする保護政策を探る可しと主張したる者にして、英國學者の議論とリストの議論とは必ずしも全然相撞着するものに非ず。リストは獨り獨逸の學問上に大感化を残したるのみならず、長く米國に住居したるが故米國に於る保護政策論の爲に萬丈の氣憤を吐けり。然れどもリストは學者よりも寧ろ愛國の志士を云ふ可く、其學理上の事業は、通例人の思ふが如く大なるものにあらず。彼が個人に世界を偏重する英國學者に反對して、國家主義を標榜したるは、専ら其愛國的感情に出づるものにして、亦當時の獨逸の國情に鑑みる時は大に諒す可きものあり。時勢を異にし、國情を異にする他國他時の學者が、リストの所論の一端をのみ捉らへて、輕々に祖述雷同し、深く其の因て來る所以を察せざるは、大なる誤謬を招く基たり。當時獨逸は未だ統一せる一國を成さず、其の獨逸の爲に圖るものは、中央集權を確立し、國家の權力を鞏固にし、統一的帝國を建設するを最急務と成せり。リストが此の間に立つて、國家主義的經濟論を極力鼓吹したる功は、決して没す可からず、其と同時に、一度統一集權成るの日、リストの所論に斟酌を要するは勿論なり。リスト以前にありて理論の上に於て、英國學者以外別に一家を成したるものにヘルマ

ンあり。然れども經濟學の新研究の上に於て獨逸を重からしめたるものは、遙かに後れて出でたる、ロツシアー、クニース、ヒルデブランド三學者の始めたる所謂歴史派なり。ロツシアーは著述する所最多く、從て其影響顯著なれども、必ずしも深遠精刻なる思想家に云ふ可からず。之れに反して、クニースは終生著述する所多からず、其流布すること廣からず、表面に顯はれて活動すること稀なりしが故に、外國學者の彼を知るもの少く、獨逸にありてすら忘れられたり、雖も、其推理の透徹せる、思想の諒博深遠なる多くその儔を見ず。殊に最近に到り漸く盛みなれる經濟心理の研究は、彼の夙に力を用ゐて從事したる所にして、今日、雖も未だ彼の上に出づるもの少し。ヒルデブランドは不幸夭死したる爲め、三者中事功最も劣るもの、如し、雖も、其僅少の著述は甚だ尊敬に値す。其他ラウあり、ヘルドあり、シエフレあり、コーンありて皆新傾向の促進に預て力あり、雖も、斯學の三泰斗として普く認めらるゝは、近來物故せるワグナー、及シユモラー、現存學者の最長老たるブレンタノの三者なり。此三者の傾向必ずしも相同じからず。就中ワグナーは國家に重きを置くこと最も多く、其研究法に於てまた演繹法を取ること多し、其政策論は

純然保護主義の一方に偏し、人口の問題に於ては大體に於てマルサスを奉ずる等、新式學者中最も保守的なるものなり。後の二者并に其流を汲める現今の學者を總稱して新歴史派と爲してロツシアー等の舊歴史派と對峙せしむることあり。シユモラーは専ら經濟史の研究を以て顯はれ、事實的敘述的傾向の絶好の代表者なれども、純理論に於ては甚だ薄弱にして、時に舊時のポリヒストリー（一定の理論少く諸種の知見を蒐集するもの）に酷似するものなきに非ず。其政策上の見地は著しく官僚的にして、而して權宜の論を好み、商業政策に對する態度亦明確ならず。社會政策に於ては、間々極端なる干渉主義を主張することありて、時にワグナーを凌ぐ。ブレンタノは事實的歴史的研究に勉むるに共に、純理の明確に重きを置き、政策上の態度は旗幟鮮明にして、商業政策に於ては、大體に於て自由活動を甚だ尊重し、社會政策に於ては、勉めて官僚主義を排して自由任意の團結に依る組織主義を取る。爾餘の學者は、以上三者の何れかに所依するもの、見て大體なく、大體に於て社會政策の講究、歴史的統計的研究を重ずると皆同じく、相集りて『社會政策學會』なる有力の結合を成し、勞働階級の地位の上進に銳意す（現今此會はヘルクナ

其會長たり、彼は師の門より出でたる篤學淵厚の學者にして重きを爲せり。然れ共近くは八時間労働に異存を公言する等人或は戯れて社會政策學會は社會政策否定學會なりと云へり、獨り師は終始一貫八時間論を高唱し、其門生ヘルクナーと相對して論陣を布き其態度渝らざるを示せり。一方に熱中する者は、他方に缺陷なきを得ず。現今獨逸學者通有の弊は、政策に記實に專にして、純理の明確を重視せざるにあり。歴史的叙述になる所論は、該博精緻人目を驚かすものあり、雖も理論上の解剖に到つては前人の舊套を襲ふこと多く、獨創嶄新の見解の見る可きもの寧ろ尠く、此點に於ては今日、雖も英國學者に一籌を輸せり。但し最近時に至り、マックス・ウエーバーあり、ゾムバルトあり、オツペンハイマーあり、リーフマンあり、シュバーンありて、理論的研究勃然として興るの觀あり。奧太利に於ては、カール・メンガー出でて以來、所謂奧太利派なるもの盛にして、理論經濟學に貢獻すること甚だ大なり。就中、ボエム、バヴェルク、ヴェーザー、シユムペーター等の効は没す可からず。其他佛國のルロア、ボリユール、ヴァスール、コヴェス及びデー、米國のクラーク、パツテン、フキツシア、瑞西のワルラス、伊太利のメセダリア、パンタレ

オニ、アキレ、ロリア等あり、殊にバレットの研究は頗る重要なり。瑞典にはグスタフ・カツセルあり、和蘭にはピーアソンあり、露國にはニコライ・オンゲルスノフ等あり。然り、雖も、現存經濟學者の最大權威たるものは、實に英國のマーシアルなり。マーシアルは、一方に於ては獨逸學者最近の研究に通曉し、其長を收むるに共に、他方には英國學者に特有なる純理的研究を忽かせにせず、方今斯學の最も進歩せる立場を代表する學者にして、同時に世界經濟學の最大權威として仰がる、所なり。其門下の逸材ビグーは、マ氏の後を承けて、更に研究を進め、現在壯年學者の白眉たり。

社會主義學者近來の進歩もまた經濟學者に劣らず、歴史的統計的研究に於ても遜色なく、理論的研究に於ては、間々經濟學者の弱點を衝きて、更に新方面を拓くものあり。此點に於て近世學理的社會主義の學祖と稱せらる、カール・マルクスは、優に班を經濟學大家の中に列するを得るものなり。

經濟生活は間斷なく進化發展して息む時なし。されば之に關する學問なる經濟學も、亦た常に進化の行程上にあらざる可からず。以上略述したる經濟學の變遷は實に此理

を證す。然りし雖も千變萬化の中、又た自ら終始一貫せる根本の原則あり、時と處との異なるによりて影響せられざるものあるを要す。然らざれば經濟學は一科の獨立せる學問として存立するを得ず。經濟學現今發達の程度は未だ全く此要求を充たし得たりと云ふを得ず。是れ主として最近の傾向の政策論に專にして、純理論を等閑に附するが爲めならざるなきを得んや。向後斯學の力を用ゆ可きは先づ純理の研究にあり、斷じて政策の商量に存せず。

#### 第四章 補論

經濟學史の書世に其類尠からず、雖も一卷の内に全體を網羅して克く遺憾なきを得るもの一も之れあるなし。今日までの處にては先づ最も推獎に値するはイングラムの著なり。即ち

Ingram, A History of Political Economy. New York 1888. 其後版あり、内容同じにして、此書獨佛等の外國語に翻譯もせられ、其行はるゝこと廣く、日本譯も亦あり。然れども其上古及中古を説く所甚だ簡に過ぎ、近世に至りても専ら英國に偏し、肝要なる大陸の叙述に薄く、殊に最新の研究を參酌するに於て甚だ遺憾多し。」

此書に類して猶ほ簡潔なるものに

Price, A short history of political economy in England from Adam Smith to Arnold Toynbee. London 1891. 其後版あり、内容は同じ

あり。列傳體に英國に於ける經濟學の發達を叙したるものにして、初學の士を助くること、或はイングラムの著に勝るものなきにあらず。

イングラムの著と全く同一趣向に成れる佛書あり。即ち

Espinas, Histoire des doctrines économiques. Paris 1892.

是れなれども、此書は亦た上古に偏して初學者の全體を知らんことを欲するものに便ならず。之れに反し佛國リオン大學の教授ラムボアの著はしたる

Ramnaud, Histoire des doctrines économiques 3. E. Paris 1909.

は、イングラムの著よりも稍詳密にして一冊にして大要を纏るに便あり。更らに之れに勝るものは最近續刊せる

Gonnard, Histoire des doctrines économiques. 3 Vols. 1921-3.

なり。第一卷はケネー以前、第二卷はケネーよりミルまで、第三卷はミル以後に分ち仔細に編述したり。佛國にては先年より經濟學史の一科法學生の必修科目たる爲め經濟學史の著作尠からず、數に於ては英獨を凌駕せり、中に就てゴナールの此書は、デード及びリストの左書と共に群を抜くものなり。

Gide et Rist, Histoire des doctrines économiques depuis les physiocrates jusqu'à nos jours. 3. E. 1920.

此の書には獨譯 Geschichte der volkswirtschaftlichen Lehmeinungen. 2. Aufl. nach der 3. fran. Ausgabe übersetzt von Oppenheimer 1921. あり、英譯 A History of economic doctrines from the time of the Physiocrates to the present day. (2. E.) transl. by R. Richards Rep. 1923. ありて流布甚だ汎し。獨逸書は部分的研究にかゝるものは其の數頗る多し、雖も全體に渉るものには未だ

此種の適當なるものなし。獨逸經濟學の歴史は、今日に於ても未だロツシアの大著述を推して斯學第一の書と成さざる可からず。即ち

Roscher, Geschichte der Nationalökonomik in Deutschland. München 1874.

是れなり。但し最近斯學の著しき發達は此書説く處を變更せしむ可き新研究を多々起したれば、初學者に薦むるには大に斟酌を要す可きや勿論なり。

猶ほ伊太利書に甚だ便利なる書あり。コツサの著はせる

Cossa, Introduzione allo studio dell' economia politica. 3. E. Milano 1892.

にして、佛譯あり、英譯あり、我邦には此英譯を翻案したるもの數種ありしやに記憶せり。英譯本の表題は、

Introduction to the study of political economy. London 1893. 其後版あり、内容變化なし。

と云ふ。コツサは學者として深き研究者にあらず、其著す所凡て皆コムバイレーション(編集)と稱す可く、獨創の意見に成るもの甚だ乏し、此書に至つては殊に然り。されば其説く所悉く淺薄皮を相して肉に至らず、初學者には便なるには相違なれども、初より多



讀を期せざるものは、須らく第一流の書のみを讀むを却て勝れりとする點より云へば、必ずしも推薦す可き書と云ふを得ず。此意味に於ては全體に涉りて淺く博く學ばんよりは寧ろ一局部に就て精密に知るを可なりとす。

此目的を達するに絶好の一書あり。

Canan, A history of the theories of production and distribution in English political economy from 1776 to 1848. 2. E. London 1903. 其後版あれども内容同一なり。

是れなり。此書は書名の示す如く英國に於て經濟學の隆盛を極めたる時期に就て其學說中最も肝要なる生産と分配とに關する諸學者の所論を叙述評論したるものにして、獨逸にも佛蘭西にも之れに比肩すべき著述あることなし。

此他經濟學史を以て書名とするものにフランキー、ニース、ヴェルンスキー、メスニール、マリニー、リーセン、マクラウド、ヴェキニ、バルジュモン、ロスバツハ、ヂュボア等の著あり。何れも一部分に就きては甚だ尊重す可きものあり、雖も之れを今日の立場より見る時は、經濟學史の名を許し難きものと云はざる可からず。殊に本章述ぶるが如き着

眼點を以て統一的發展史的に、經濟學の變遷を觀察したるもの甚だ少く、單に事實人名の排列に過ぎざるもの多し。斯學の爲め甚だ惜むべし。

近時の出版に係るものにして、主として獨逸に於ける經濟學最近の進歩の状態を、夫々題目に分つて詳述したるものに左の一書あり。

Die Entwicklung der deutschen Volkswirtschaftslehre. 1908.

右は専らシュモラーを中心とする諸學者が同氏七十歳の賀を紀念せん爲めに合作したるものにして、卷帙浩瀚の大篇なれども、所收論文の價值必ずしも同一ならず、又間々公平を缺くものあり、必ずしも完璧を以つて見難し。

稍古きものなれども、左は何れも見るに足るものなり（二書共にマ氏に引照あり）。

Travers Twiss, View of the progress of political economy since the 16th century. London 1847.

Kautz, Geschichtliche Entwicklung der Nationalökonomik und ihrer Litteratur:.....Wien 1860.

又た

Robert von Mohl, Die Geschichte und Litteratur der Staatswissenschaften. 3. Bde. Erlangen 1855-8.

は、國家諸學の綜合的學史の書にして、經濟學史の書にはあらざれども、國家政治諸學の發達を背景とせる經濟史の發達を知るには、必ず見ざる可からざるものとす。

McCulloch, *The Literature of political economy*. 1845.

は書目の解題にして、主として英國に限られたりと雖も、専門學者の坐右に離る可からざる有益の參考書なり。

哲學を背景として、經濟學の發達を考察したるものに(マ氏引照あり)

Bonar, *Philosophy and political economy in some of their historical relations*. London 1893.

後版あり内容變化なし

あり。此書近年東氏の邦譯あり、題して『經濟哲學史』と云ふ。

部分的敘述の書には、フキジオクラシーに就て左の有力の著作あり。

Weulersse, *Le mouvement physiocratique en France*. 2 vols. Paris 1910.

考證該博、部分的學史の書中第一位に置く可きものとす。

經濟學全史を書名とすれども、未完にして、其一部のみを取扱ひたるものに

Oncken, *Geschichte der Nationalökonomie*. 2. Aufl. Leipzig 後版あり、内容は同じ

あり、規模廣汎、今日迄に刊行せられたるは其第一部にして、アダム・スミスに至るまでを記述せり。此割合にて完成するときは、恐らく、經濟學史中の最浩瀚のものたる可し。然れども、其記述必ずしも妥當ならず、考證亦必ずしも精密ならず。乍去、兎に角、今日までに顯はれたる學史書中最も詳細のものたることは疑なし。其他

Damascke, *Geschichte der Nationalökonomie*. 2 Bde. 13. Aufl. Jena 1922.

は教科書類のものにして、獨逸に於ては、甚だ汎く讀まる。初學者には便なり。

Eisenhart, *Geschichte der Nationalökonomie*. Jena 1901.

も右に類するものなれども、稍劣れり。

Denis, *Histoire des systèmes économiques et socialistes*. Paris 1904.

Duehring, *Kritische Geschichte der Nationalökonomie und des Sozialismus von ihren Anfängen bis zur Gegenwart*. 14. Aufl. Leipzig 1900. Later editions unchanged.

は共に社會主義學說をも併せ論ずるものにして、記述必ずしも公平ならず、取材必ずしも

周到ならず而して共に未完のものなれども、夫々卓拔なる一家獨特の見解を述べたるものにして甚だ重要なものなり。

オンケンの書よりも規模小に、粗ぼイングラムと同様の結構に成るものにして、近來我邦にても稍廣く行はるゝものに

Haney, History of economic thought; a critical examination of the origin and development of the economic theories of the leading thinkers of the leading nations. New York 1917.

あり。體裁要を得、材料豊富にして初學者には甚だ便なるが如し。雖も著者一流の管見を以つて、諸學説を一定の鑄型に挿入したる爲め、往々首肯し難き配置を敢てし、考證も亦た十分ならず、明かに誤謬を斷ず可き記述を見ること稀なりとせず、讀む者漫りに著者の言を信ず可からず。

最近刊行のものにては

Spann, Die Haupttheorien der Volkswirtschaftslehre, auf dogmengeschichtlicher Grundlage. 7. Aufl. Leipzig 1920.

Heller, Die Grundprobleme der theoretischen Volkswirtschaftslehre. Leipzig 1921.

の二書は、姉妹篇とも稱す可きものにして、一は時代を學派に分けて論ぜる横斷的學史、他は經濟學の主要問題に分けて縱斷的に論述せるものにして、共に『科學の教養』叢書中にありて、僅かに百頁内外の小冊子なり。雖も、初學者の參考書としては、最も推稱するに足るものなり。英語にて之れに類するは、

Lewinski, The founders of political economy. London 1922.

にして、『經濟學を建てし人々』と稱する邦譯あり。此書を右掲の二獨逸書と比較するときは、其れづくに長短あるを免れず。雖も、學者參考の料としては、此書は到底前二書に及ばず。

最後に、單行の一書にあらざれども、悉く精研深慮の結果に成り、著者苦心慘愴の跡を十分に窺ひ得可きものは、獨逸經濟學者合作の『社會經濟學大系』の第一卷に掲げたるシユムペーターの學史なり。題名左の如し。

Grundriss der Sozialökonomik. Tübingen 1914. SS. 119-124. Schumpeter, Die Epochen der Dogmen-

## und Methodengeschichte.

オンケンの書の如く該博ならずも確かに類稀なる力作を稱す可く殊に著書は尋常一様の學史家に非らず自ら理論經濟學者の雄として他の理論を綜括評議せるもの所謂名工名匠を談ずるものなり。凡そ經濟學史の著作百を以て算す可し雖も今日までの所此書の右に出づるものを見ず學者必讀を辭す可からざるものとす。猶シユムペーターの此書を併せ讀む可きものにはブレンターノ先生の

Lujo Brentano, Ueber die Nationalökonomie als Wissenschaft. 1923

あり。先生獨得の見地より斯學の發達を本質を論ぜられたるものなり。

邦文の書には翻譯書若干（イングラムの譯書、レヴェンスキ、ポナーの譯書など）を除いては學史の書として自家研究を述べたるもの殆んど之れなし。唯高橋誠一郎氏に『經濟學史研究』あり、河上肇博士に『資本主義經濟學の史的發展』ありて此の缺を補ふのみ。

本章は『メルカンチリズム』以降に説明を限りたれば希臘并に中世の基督教の經濟

學に於ける貢獻を全く眼中に置かず。されば稍々進んで研究せんを欲する者は必ず此兩時代に就て多少知る所あるを要す。中世基督教と經濟學との關係に就ては予は『トマスダキノの經濟學說』に於て稍々詳細の研究を試み、最近の研究に基て自家の説を下し置きたり。今は收めて『經濟學研究』自五七一頁至七一頁にあり。希臘に就ては

Trevel, A history of Greek economic thought. Chicago 1916.

あり。雖も根本文獻の研究十分ならず、叙述も亦た透徹を缺く、折角好箇の題目を捉らへ乍ら其成績の貧弱なるは甚だ惜む可き事なり。希臘經濟學說を知らんには此書を頼るよりも寧ろ最大の經濟論者たるアリストテレスに關する左の一書を見るを可し。

Jowett, The Politics of Aristotle, translated into English with introduction, marginal analysis, essays, notes and indices. 2 vols. Oxford 1885.

此書はアリストテレス研究書中の權威にして、考證周到綿密評論鑿々として肯綮に中る學者必讀の作なり。

前例を追ひマーシャルが引用せる諸書の原名を左に掲ぐ。

『メルカンチリズム』に關して。

Kautz, Travers Twiss, Bonar, 三書原名前段にあり。

佛國に於ける系統的經濟學の嚆矢なりとして。

Cantillon, Essai sur la nature du commerce en-général. 1755.

初めて『フキジオクラシー』なる名を用ひたる書にして。

Dupont de Nemours, Physiocratie ou constitution naturelle du gouvernement le plus avantageux au genre humain. 1768.

ナダム・スミスの評論にして。

Wagner, Grundlegung. (前に出づ)第六頁——Hasbach, Untersuchungen über Adam Smith und die

Entwicklung der politischen Oekonomie. Leipzig 1891. —— Knies, Politische Oekonomie. (前に出づ)

第三章第三節——Feilbogen, Smith und Turgot. Ein Beitrag zur Geschichte und Theorie der

Nationalökonomie. Wien 1892. —— Zeyss, Adam Smith und der Eigennutz. 1889.

其他雜誌論文の類は略す。

## 第五章 經濟學の範圍

近世社會學の鼻祖オーギュスト・コントが、人類の社會に於ける行動を個々の専門の學問に分割して研究するを不可ミし、之を一括して一の社會學ミすべしミ主張し、初めて社會學なる一科の學を唱へ出して以來、之に附和する學者尠からず。彼等思へらく、社會生活上の現象は交々相錯綜し、甚だ密接なる關係を有す、之を個々の方面に分割して觀察するは、真相を得る所以にあらず、是等個々の専門學者は皆各自の立場を捨て、全體を統一する社會學の研究に勉むべきものなり。是れ一見正當なるに似て、實は即ち然らず。

其故は、人類の社會に於ける行動の範圍は甚だ廣く、頗る複雑にして、到底一個人の力に及ばず。コント并にハーバート・スペンサーの該博なる知識、偉大なる天才を以てして、猶

ほ且つ其成就せし所は、纔かに社會學の端緒を啓くに過ぎざりしを以て之を知るべし。希臘の學者は、哲學の方面に於て大なる事業を成したれども、自然科學の上に於ては其進歩は甚だ遅かりき。其原因は、凡ての自然現象を單一の基礎の上に築きて觀察せんことをしたるにあり。之れに反し、近世に於ける自然科學の著しき發達は、此廣汎なる各般の問題を細分して、各々一部分を專攻するに至りたるに由る。社會現象に於ける其理之れに異ならず。

然れども、他方に於ては、自然科學に従事するものも、尙コントの主張せるが如く、單に其研究を一部分にこゝめず、近接の諸方面と相照し、相較べ、其間に絶えず密接なる接觸連絡を保つにあらざれば、功を收むること能はず。單に一局部の研究にのみ凝視して、全體の關係を度外に附するは、社會現象の研究に従事するものに於ては、殊に誠むべき所とす。コントの主張は、此弊を矯むるに與つて大に功あり。ジョンステュアート・ミルは之を布演して曰く、『經濟學者にして其他の何者にもあらざるものは、また善良なる經濟學者たる能はず。社會現象は各互に働き合ふものなるが故に、之を個々に引離しては其真

相を得る能はず。社會の物質的産業的現象は其れ自らに就て、全體論を下し能ふべきは勿論なれども、其の全體論たる、必ず常に一定の文明形態、一定の社會進歩階段と相關聯するものならざるべからず』と。ミル『コント論』、第八十二頁。

然れども、ミル并に其先進が經濟學の範圍として定めたる所、必ずしも正確なりと言ふべきにあらず。固より經濟學の範圍を擴張するときは、之が爲めに確定精密を失ふこと必然にして、失ふ所或は得る所に勝るなきを保せず、雖も、必ずしも常に然りと言ふは亦た非なり。されば、經濟學の範圍を定むるには、其範圍を擴張するによりて得る所、之れが爲めに失ふ所に優る點を以て程度させざるべからず。

社會諸學の中、經濟學は特別なる便宜を有す。其は他にあらず、經濟學が主として研究の對照とする所は、最も容易に且つ明瞭に秤量せられ得るものなること是れなり。即ち經濟學の論ずる欲望動機は、必ず一定の貨幣額を以て秤量せられ得るものなり。ミル『論六卷第九章第三節を見よ。』經濟學は人間の欲望に關係する學問なるは、人能く之を知る。然れども、單に欲望其物を論ずるものにあらず、又欲望の全部を論ずるものにもあらず。然るに従來

の學者之れを看過せり。拙著『經濟學研究』四五七頁以下參照。

經濟學が研究の問題とする所は、欲望の充足が經濟的と稱する特定の條件の下に在るときに限る者にして、其條件は何なりやこの間に對して從來提出せられたる解答二あり。

一 勞働を費すを要すること。

二 欲望充足の手段が限りあること。

之れなり。然れども此は未だ萬全の説明を見做すべからず。何故ならば、經濟學の論究せんとする所は直接に欲望其ものにあらず、其發動して一定の結果を生ずるときに限るものなればなり。換言すれば、經濟學は或一定の結果に向て行はる、欲望充足を研究するものにして、此意味に於て、經濟行爲は必ず之を目的と關聯して見るべく、即ち一の目的行爲（ツヴェック・ハンドリング）を云はざるべからず。經濟學にて欲望を論ずるときは、先づ必ず間接に其結果に就て論を立つるに止まる。然るに此結果に種々あり、必ずしも悉く皆經濟的なるにあらず。經濟的なる欲望充足と然らざる欲望充足との區別は、其一定の結果が貨幣額を以て秤量せられ得るや否やの標準に依るの外適當の説明を下し

得ざるものなり。是れやがて經濟學が他の社會諸學に優りて明瞭精確なる議論をなし得る所以なり。審美上の欲望と云ひ、學問上の欲望と云ひ、或は道德上の欲望と云ふが如きは、等しく重要な社會上の現象なること否むべらず、雖も、之れを其結果によりて秤量すること容易ならず。又時の場合との異なるに依り、人の同からざるに依りて、其結果なるものを比較對照すること不可能なることあり。之れに反し、經濟上の欲望は常に一定の貨幣額に於て表はる、ものを指す故に、其標準は的確にして、其秤量は甚だ容易なり。例を以て之を示さん、米食と麥食とは、何れかより、能く人生の欲望を充すかを判定するに種々の方面より之を見るを得べく、其内容の分析は別に難事ならざるも、其優劣を生理上一定の數字を以て言ひ表はせし要求せらる、ことも、之に答へんこと容易ならず（カロリー價値は生理的價値の一切にあらず）。之に反して米と麥との經濟上の優劣は、貨幣額によりて表せられたる其價格を比較すれば、直ちに之を定むることを得るなり。固より貨幣額によりて言ひ表はされたる優劣は、直ちに人生に向て其二者の有する優劣の全部にあらざるは勿論なり。されども、經濟上の優劣は其全部の優劣を定むべき出立點を供

す。經濟學者の物に對し、人に對する、決して貨幣の高のみを以て能事終れりとするにあらず、凡ての方面より之を觀察すべきは無論なり。されども他の優劣に至りては之を知ること容易ならざるに、貨幣額を以て秤量せらるゝ經濟上の優劣に至りては、之を云ひ表はすこと精確なるを得るが故、先づ之れを取りて研究を始むるに外ならず。

所謂快樂と苦痛の秤量も亦此意味に解釋すべく、ベンタムの影響を受けたる功利主義に、誤謬あるは争ふべきなし。雖も後の學者が口を極めて非難するが如きものにあらず。ラシユダール「善惡の理論」第二卷首部を見よ。其故は、彼等の快樂と云ひ苦痛と云ふは、先づ最も之を秤量對照する貨幣額を出立點としたるに過ぎずして、之れを以て全面目を盡し得たりとするにあらざるや明なればなり。即ち最小の勞費を以て最大の効果を收めんとする所謂『經濟の本則』なるものも、他の標準得易からざるが爲め、先づ之を貨幣額に言ひ表はして、最小の支出を以て最大の収入を得ることを標準としたるに過ぎず。後の學者が之を思はずして、攻撃の鋒を鋭くするは、的なきに矢を放つゝの感なき能はず。

單純に經濟上の立場のみに限るも、金錢額によりて秤量せられたる優劣は、直ちに全體

の優劣とすべきものにあらず、是には幾多の制限の存することを忘るべからず。即ち先づ第一に、同價格によりて言ひ表はされたる快樂若くは満足と雖も、人を異にし、事情を異にするに依て、其實質の上に大なる相違あるを知らざるべからず。富者の一圓と貧者の一圓とは、價格の稱呼相同じと雖も、之を失ふより來る苦痛は、大に異なれり。同じ人において、も、囊中濫かなるときの一圓と、冷かなるときの一圓とは、又甚だ異なる重要を有す。之れと同じく、等しく一圓の収入を得るも、富者と貧者とによりて、之れより得る快樂若くは満足の増加は甚だ異なる。貧富の差異を度外に置くも、尙人々の地位身分、天賦性癖、慣等の異なるによりて、同じ貨幣額も甚だ異なる快樂若くは苦痛を意味す。唯之れを全體に就て概観する時は、是等の個人的相違は大抵相平均し、同じ貨幣額によりて示されたる物の與ふる快樂若くは苦痛は、原則として同一と看做して妨げなし。更らに事情異なること甚だしく相違を生ず、就中人の屬する社會階級、其の營む職業、其の住む地方、并に其物を得若くは失ふ時期異なるによりて、差異あり。然れども、廣く凡ての異なる事情を概括して見る時は、個々の差異は概ね平均せられ、同じ地方同じ職業同じ時に於ては、一



定の貨幣額の意味する快樂若くは苦痛の量は同一なりと言ふを妨げず。唯此全體の概括を個々の場合に適用するには細心の注意を要す。

更に轉じて他の方面より之を見るに、人間の經濟上の活動は、必ずしも常に理性的判斷のみに基きて行はるゝものにあらず否多くの場合に於ては、専ら習慣の情力に支配せらるゝものなり。然れども此習慣なるものも亦多くは過去に於ける綿密なる判斷、思慮ある選擇の結果にして、就中營利行爲に於ては、理性的判斷、正確なる事前の秤量の力に由るこゝ多し。

從來經濟學の主として論じたるは、此意味に於ける營利行爲なり。後の學者が此點を以て彼等を攻め、彼等は人間を以て單に理性的判斷のみによりて支配せられ、常に貨幣額によりて表はされたる差異を追求する利己主義、即ち所謂經濟的利己主義のみによりて支配せらるゝ爲せり難ざるは、誤解に基く妄斷なり。彼等に攻むべきは、營利行爲に就て立論したるものを、少しの斟酌を加ふることなく、直ちに經濟行爲全般に適用すべきものゝ速斷したるにあり。カーライル、ラスキン等が此點を以て極力經濟學者を攻撃した

るは諒みす可き所あり。但し貨幣額の損得によりて常に理性的に其行爲を撰定する産業生活の行動は最も精確、最も綿密に研究するを得るものにして、學者が先づ此點に着眼したるは咎むべきにあらず。唯だ此産業生活に於ける人々雖も、決して貨幣額の堆積量を以て一切を秤量し盡くすにあらず。多くの場合に於て、近世企業家の行動を最も強く支配するものは、貨幣額の多少に表はれたる損益に非ず、他の人に打ち勝たんことを名譽心、或は廣く之を言へば、近世社會の特長たる行動の衝動（テーチヒカイトリップ）なり。他方には直接産業生活に關係なく、一見貨幣の得喪を度外に置く行動にありても、之を秤量し、之を判斷し、其優劣上下を定むる標準は、畢竟貨幣額を借り來るものなり。他の點に於て事情悉く同一なるときは、其行爲の結果として、貨幣額をより多く持ち來す行爲を以て成功とし、然らざるものを以て失敗とすること、世上の習なるを思へ。經濟行爲は貨幣額を以て秤量せらるゝ云ふは、貨幣を以て萬能と見做すが爲めにあらず、之を以て更により高き目的に導く手段とみなすが爲なり。此意味に於て、經濟上の財（グーズ）は低き財にして、倫理上の善（グード）は高き財なり。從て經濟上の富は、より高き意味に於る富に

到るの前提なり。換言すれば其標準の精確、其秤量の綿密なるを要するの意に於て、經濟行爲は貨幣額に表はれたる結果によりて判定せられ、經濟上の欲望は斯くの如き結果を目的とする欲望を意味するものなり。

されば經濟學は一般人間の社會的行動を支配する凡ての感情道念理想等を無視するものにあらず、出來得る限り廣く之を考慮に入れ、或程度迄は精確綿密を犠牲に供するも辭せざるものなり。只斯くの如き廣き理想道念感情より起る社會行爲は其作用茫漠として捕捉し難く、其結果も亦た一定の標準に照して測定し易からず、從て此複雑なる現象を概括すべき理法を立つるに甚だ困難なるは覺悟するを要す。

終りに一言を要するは、近世經濟生活の發展は益々共同的行爲を普ねからしめんとする傾向あるに是なり。此點に於て從來の學者が經濟學の出立點を個人に置きたるは斷じて誤謬なり。殊に將來の發展を推すに當りては個人中心の經濟論は正鵠を失す。經濟學に於て個人を論ずるは、之を社會の一員として見る可く、單に孤立單獨なる個人として見るべきにあらず。唯研究の方法としては、部分より全體に進み、近きより遠きに及

ぼすの外なきは勿論なるが、故個人の行動を標準とするは已むを得ず。但し常に個人より社會全般の作用に到達するに忘るべからず。經濟學が一箇の學としての範圍も此點に立脚して定む可く、其研究の範圍は實際社會の外に出づべからず、假想的なる經濟人の推定の如きは固より之を捨つべし。唯之をなすに當りて、

- 一 勉めて確定の標準、精密なる秤量を下し得べき現象を基礎として論を立つること。
- 二 標準は貨幣價值に取るに最も其當を得たるものにして、貨幣價值にて秤量せられ得る動機の下に働く人間行爲より生ずる現象は、必ず相互間に密接なる關係ありて一體の系統をなすこと。

を忘る可からず。

要するに、經濟學の範圍に關する爭論に腐心するは甚だ無益の業にして、實際上に起る問題は普く之を採り、實際社會に於ける現象は常に之を漏らさざることを勉め、其標準は精確にして容易に比較對照し得べきものたるを要す。此標準を備ふるものは悉く之を採り、之に合はざるものは、其犠牲の大ならざる限り之を採るべく、始めより偏隘なる分界

を立て、自ら狭ふせざるを念ひすべきなり。

## 第五章 補論

本章の論旨は、既に第一章の補論に言ひ置けるが如く、英國流の經濟行爲中心の研究法を、マーシアルが採用せるものなることを忘れては、其眞意を捉へ難し。されば、之れに經濟組織を併立せしめざれば、斯學現在の範圍を定め得たりと爲す可きにあらず。

經濟學の範圍を、専ら經濟行爲の研究に止めて之れを見るべきは、マーシアルが從來營利行爲のみを以て經濟行爲と見做したるの不可なるを論じ、經濟學者は一樣に「ヘドニズム」又は功利主義の哲學を基礎とするものなるかの如き見解の甚だ謬れるものなるを極言し、貨幣價值を標準として人々物々を判定するは、之れを以て全部を盡くすものゝ爲すが故にあらず、唯一應精確の標準を定むるの便宜上、斯くするものなるを明かにした

るは、進歩せる現在學者の一致する所なり。而して此論はまた移して經濟組織論の根本概念を爲すを得可し。經濟行爲と云ひ、經濟組織と云ふ、兩者共通の基礎は「經濟」なる一語にあり。然るに近來經濟組織の論を提出して、斯學の上に一新生面を開きたる獨逸の學者は、其基礎たる「經濟」又は「經濟的」なる語の意義を精査せず、甚だ曖昧なる説明を下すもの多し。シユモラーの如き殊に然り。拙著『經濟學研究』四五七頁及五七一頁を見よ。此に比ぶれば、マーシアルの説明は甚だ明瞭にして、大體に於て要を得たり。予は經濟行爲と經濟組織との兩者を包含して、經濟學の範圍を要言せんと欲して、「國民經濟原論」に於て、始めに「分觀の概念」を説き、次に「集觀の概念」を説きたりと雖も、今に及んで甚だ不十分なりしところを見出さざるを得ず。其は他に、予の所謂「分觀」と「集觀」とは、單に言語の上に於ける區別に外ならず、未だ實際の現象を分け得たるものにあざればなり。此點に關する現在の卑見は、「國民經濟講話」に其大要を陳述し置きたり。讀者の往見を乞ふ所なり。

マーシアルが引用したる著書の重なるもの左の如し。

Schäffle, *Bau und Leben des sozialen Körpers*. 2. A. Tübingen 1896.

シエフレはコント、スペンサーと相並んで社會學の三泰斗と目せらるゝ學者にして、イシアルの云ふ如く他の二者の如く自ら高く標置せず、専ら生物學の研究を應用して、社會組織論に力を盡くしたる人にして其所論は今日多く受け納れられず、雖も亦た甚だ敬重に値す。猶ほ氏に

Schäffle, *Das gesellschaftliche System der menschlichen Wirtschaft*. 3. A. Tübingen 1873.

あり前文言へる經濟組織の研究に貢献すること甚だ多かりし書なり。此點の研究を今直ちに試みんご欲するものは、先づ此書を繙く可きなり。但し其所論は今日の進歩せる立場より見れば、不備不完のものなること勿論なり。

Green, *Prolegomena to Ethics*. 3. E. Oxford 1890. 其全集版第七刷一九一八年刊行には此書のみは之れを缺く。

經濟動機論に就ての引照なり。今本章に於て突然として經濟動機論を試むること予は其可なるを知らず、故に本論に於ては全く省略に附したり。

### 經濟學の本體 (Substance of Economics—Marshall)

マーシャル改版に據る、改定經濟學講義第二章を収録す。故に本文と重複する點若干あり。

**經濟生活の動機は貨幣額を以て稱量す。** 經濟學は日常生活の行程中に生活し運動し思考する所の人間を研究す。其主たる問題は此等行事に於て最も力強く最も常住的に人間を左右する動機 *Motive, incentive, motor-force* 是なり。元より人は其日常の生計を營むに方りても高尚なる動機を度外に置くものに非ず、個人的情愛義務的觀念高遠なる理想は又人を支配しつゝあり、幾多の發明家發見家改良者は富其ものを求むる爲ならず高潔なる道念に驅られて偉績を樹つるもの尠しみなさず。然り然り雖も日常生活行程に於て最常住的の動機たるものは人が其營む所の業に對して物質的報酬の支拂を得んごする願望 (The desire for the pay which is the material reward of work—Marshall, P. 14) なる

るこゝ一の疑の容る可きなし。此報酬たる或は利己的に或は非利己的に、或は高尚なる目的の爲めに或は低級の目的の爲めに、消費せらる可く其趣の千差萬別なるは人の性質の其に異なるが如くなり、去り乍ら此動機其のものは常に一定の貨幣額によりて稱量せらるて、Measurement by an amount of money; money-measure 共通の一性質を有せり。斯く經濟學研究の主題たる日常生活に於いては其動機を一定精確なる貨幣額を以て稱量し得るこゝは、他の社會科學が企て及ばざる點にして實に經濟學の本體獨得の特色なり。化學者に精密なる秤ありて其研究の精密なるこゝ他の自然科學の遠く及ばざる所なるが如く、社會科學中にありては、經濟學は貨幣てふ精密の秤量あるにより、其最も精確のものたるを得るなり。斯く云ふも經濟學は其精確の度に於て之を自然科學と同一視す可きやに非ざるは勿論なり。蓋し其研究の對象たる人生の力は常に變化して已まざる微妙複雑のものなればなり。

經濟現象の内容的統一。"Internal homogeneity"—Marshall, P. 27 經濟學が他の一切の社會科學に勝りて有する長所は、其研究の對照を精確なる研究方法により、取扱ひ得ると即

ち人間の願望欲望 Desires, wants 其他の心理的動作は其顯はれて經濟行爲を發作するこゝき、吾人は經濟學に於て其力其分量を捉らへ來りて之を精確なる秤量の下に置くを得る一點にあり。經濟學の論ずる所は直接に欲望願望其ものにあらず、其發動して一定の行爲となるこゝき、詳しく云へば一定の結果を前提し之を現實せんが爲に動作するこゝき、是れなり。故に吾人の研究は或一定の結果に向つて發動する欲望充足を主題とするものにして、此意味に於て經濟學の活動は必ず之を目的と關聯して觀察するを要す。經濟行爲は從て一の目的行爲 Zweckhandlung たり。目的行爲とは必ず結果を豫定するものなり。然るに此結果たるまた種々あり必ずしも悉く經濟的なるにあらず。其經濟的たるも然らざるもの區別は、其一定の結果が貨幣額の秤量を容る、や否やによりて定めらる。而して、是れ經濟學が他の社會科學に異りて有する一の特色たり。審美上學問上或は政治上にて云ふ欲望は社會上の動機として、其重要決して經濟上にて云ふ欲望に劣るものにあらず。雖も、之を一定精密の秤量を以て比較するこゝ能はず。之に反し經濟上より見たる欲望は常に一定の貨幣額を以て其力其分量を間接に測度し得るが故に、其標準は的

確にして其秤量は精確なり。固より貨幣額を以て秤量したる優劣は直ちに人生の全部に對する優劣を看做す可きにはあらず。然れども人が或一定の満足を得る爲めに提供するを辭せざる、又は人をして或一定の苦痛疲勞を肯ぜしむるに要する一定の貨幣額は、即ち其人の動機之力——動機其ものに非ず——を稍々確定に近く測定し得てふ一事は、科學的研究法に緊要の根柢を與ふることは拒む可からず。

外形的間接測定。 *Indirect external tests or measurement* 經濟學は人心の情緒を其自ら

に就て又は直接に測量せんを欲するものに非ず、唯だ其結果を通じて間接に考定せんに止まる。異なる時期に於ける自己の心理的狀態を互に比較し又は秤量するにこそは誰人も爲し能はざる所なり、況んや他人の心理狀態に於ておや。吾人の能くし得る所は間接秤量あるのみ。或情緒は人間の高尚なる性に屬し、或るものは低級の性に屬し、其種類も亦千差萬別なり。然れども單に同種類の生理的の快き苦きのみで見て見るも、吾人の比較は間接に結果より溯及するものたるに過ぎず。此く得たる比較は雖も同一時に於ける同一人に關する場合の外は何れも或程度までは概測的なること到底免れ得ず。

即ち其生理的満足が人間の行爲に與ふる刺戟に就て間接に下したる比較たるに止まる。茲に二種の快樂あり、之れを得んを欲する人間の願望が同一事情の下に在る人をして、均しく一時間の勞を厭はざらしむるか、又は同一生活程度同一資産の人をして均しく一圓の支出を肯ぜしむるものなるを、吾人は這箇二種の快樂を以て吾人研究の目的に對しては全く同一のものなりと云ひ得るなり。何となれば其願望たる同一條件の下に在る人を驅りて行動せしむる所の強さは同一なればなり。斯くの如く一の心理狀態を測定するには行爲を惹起す動力に就てすること普通なる故其研究する動機の或ものが人の高尚なる性質に屬し、或ものは低級の性質より來りたりとて、爲めに測定に困難を感ずることなきなり。

例へば茲に人あり、まさに十圓を支出して或物を買はんを欲せしが、偶々路傍に憐れなる貧しき病者を見、其持つ所の十圓を之に恵み去れりせよ。此人は低級の満足を捨てて高尚なる満足を取りたるものと云ふ可く、兩者取捨の間に起る此人の心理的經過は、哲學者倫理學者のまさに研究する所たる可し。然れども經濟學者より見れば、均しく是れ

十圓なる貨幣額得喪の問題に外ならず。或物を買ひて得る満足も貧病者を救恤したる爲め得る満足も其外部に顯はるゝ所は共に貨幣額の十圓なり。從て經濟上兩者を全然同一なる心理的動作に基くものと認めて差支なし。

斯くの如く經濟學者は周到細密の注意を以て各人が通常の生活に於て日々營む所を仔細に研究するも、其の注意の標的は人の高尚なる情緒と、低級の情緒とを比較して、其真正なる價值を測定し、例へば徳を愛する念と食を嗜む念とを秤量するが如きことに存せず。吾人は經濟學に於て人間行動の動力を其結果によりて評價すること、日常生活に於て常識を以て爲す所と毫も異ならず。唯だ常識的評價と異なる所は吾人は研究の對象に就て慎重の態度を執り得る所の知識の範圍を、明瞭にするを勉むること是なり。但し、斯く云ふも、經濟學は人生の心理的、精神的方面を全然度外視するものにあらず。否、狭く純經濟學的研究の範圍に限るも、人間を驅りて行動せしむる願望其ものが、人生を高め強き性格を作くる底のものなりや否やを知ることは必要なり。此等研究を汎く實際問題に適用するに方りては、經濟學者は人間の最終目的如何を考慮せざる能はず。同一の經

濟的秤量を有する種々の満足に就て、其真正の價值の其々に異なることを忘る可きにあらず。かくて經濟的秤量の研究は、必竟一の出立點たるに過ぎざることを悟る可し。唯だ吾人は最終の到達點に到る順序として先づ出立點を確定するを要するが爲め、貨幣額の秤量てふ一事に重きを置かざるを得ざるものなり。

**個人的差違。** 斯く經濟學の主題とする所は、一定の貨幣額を以て一々精密に秤量し得るものなりと雖も、此秤量は無制限に凡ての場合を通じて行はるゝものにあらず、其適用の制限せらる可き場合決して尠しとなさず。即ち同一の貨幣額によりて言表はさるる快感又は満足 Pleasure; satisfaction の量は人を異にするより、又た事情を異にするより、其間大に徑庭あり。一般には感受性 Susceptibility 乏しき人が、特に或種類の快又は苦に對して著しく感受性に富むことあり。人の稟性と教育の同じからざるにより、一の快又は苦より得る満足の度に著しき相違あり。然のみならず、貧者をして富者と同一の金額を提供せしむ可き動機は遙かに強きものたる可し。所謂長者の萬燈、貧者の一燈とは、能く此消息を道破せるものとす。富者に取りての一圓は貧者に取りての一圓よりも、其代表す

る満足は遙かに少きものたる可し。然り然り雖も多數の異なる人々を綜覽し其全體に就て平均を求むるときは、此等個人的特性は互に相殺し、從て同一所得を得る人々が一の快を求め一の苦を免れんが爲に提供する一定の貨幣額は、其快其苦 Pleasure; pain の精密妥當なる尺度を看做して大過なきを得るものとす。唯此く得たる一般的尺度を個々の實際の場合に適用するに方りては、最も細心の注意を要すること之を忘る可からず。かくして經濟學の取扱ふ出來事の大々多數は、社會の凡ての異なる階級を殆んど同一の比例に於て左右するものと認む可し。されば二の異なる出來事によりて惹起さるゝ幸福が貨幣額を以て秤量して相均しきときは、其幸福の分量は同一なりと認むるときは合理的にして又た普通の慣例に合へるものとす。又た貨幣が人生の高尙なる用に向けらるゝ度合は今日の文明國何れに赴くも殆ど同一比例を保つものなれば、物質的満足を加ふるこも均しきものは、生活の充實と人類の向上とに於ても亦た均しき増加を爲すものと推定し得るなり。

經濟行爲と合理行爲。 *Wirtschaftliche Tätigkeit; rationalistische Handlung* 元より人間行

爲の動機は或度の精確を以て秤量せらるること云ふも一切の行爲必ずしも悉く計算熟慮の結果たるに非ず。此點に於ても他の點に於るごとく、經濟學は有りの儘の人間を取りて之を考究せざるべからず。日常生活に於ける有の儘の人間は、豫め凡ての行爲の結果を秤量して其動機が人間高尙の性に属するか、低級の性に属するかを、一々に吟味するものにあらざるは勿論なり。然り雖も人生の方面中經濟學が取りて研究の對象とする所は、人間行爲の最も打算的又た合理的 *Calculative; rationalistic* の方面に属するものにして、其行爲を爲すに先ち利害得失を商量すること最も多きものなり。尤も習慣風俗の勢力も亦た此方面には強く働くものにして、從て打算的合理的考慮の行はれざる場合尠ならず。然れども一度定りて後は、專制的威力を有する風俗習慣も其活動するに方つては、精密周到なる利害の打算に基づく場合多し。然れば人間生活中經濟的方面は最も系統的最も計量的なる方面に属すと云ふも大過なきものとす。

營利以外の衝動。從來經濟學の主として論じたるは、此意味に於ける營利行爲 *werbstatigkeit* にして後の學者が此點を以て彼等を攻め、彼等は人間を以て單に理性的判斷



のみによりて支配せられ、貨幣額によりて表はされたる満足のみを追求する利己主義によりて左右せらるる爲すに難ずるは、誤解妄断にあらざるはなし。彼等に攻む可きは、營利行爲に就て立論したるものを、少しの斟酌を加ふることなく、直ちに經濟行爲全般に適用すべきものゝ速断したる一事に在り。カーライル Carlyle, Past and Present. 1843.—Nigger question. 1849. ラスキン Ruskin, The Political Economy of art (A joy for ever). 1857—Unto this last. 1862—Fors clavigera. 1871. 等が此點を以て極力當時の經濟學者を攻撃したるは止むを得ざる處なり。貨幣額の損得を標準として合理的に行爲を撰定する産業生活の行動は、最も精確最も綿密に研究するを得るものなれば、學者が先づ此點に指を染めたるは決して非可きにあらず。唯だ産業生活に於ける人々雖も貨幣額の多寡を以て一切の行事を計算し盡くすものにあらず、多くの場合に於て近世企業家の行動を最も強く支配するのは他人に打克たんもの名譽心、即ち認識衝動 Anerkennungstrieb (Schmoller); Geltungsstreben (Wagner). 並に常に何事をか成さずんば已まざる行動衝動 Tätigkeitstrieb にして、貨幣利益の得喪は、却て度外に附せらるる、場合往々之れあるを見る。

貨幣を得んもの願望は必ずしも低き動機より來るにあらず。貨幣は目的を達する手段 Mittel zum Zweck なり、其目的にして高尚なる限り手段たる貨幣に對する願望は決して卑しむ可きにあらず。直接産業生活に關係なく、貨幣の得喪を度外に置く如き觀を呈する行動にありても、畢竟は之を秤量し之を判断し其優劣上下を定むる標準は、多く貨幣額に藉るものなり。他の點に於て事情悉く同一なるときは、行爲の結果として齎らす所の貨幣額多きもの優り、其少きもの劣ることは合理的にして、又た普通なり。されば經濟行爲は貨幣額を以て秤量すこと云ふ意は、貨幣を以て萬能にするにあらず、之を以て更らにより、高き目的に導く所的手段とするに外ならず。此の意味に於て、經濟上の財は Goods, Güter, biens, beni, goederen は低き意味の善にして、倫理上の善 Good, gut, bien, bene, goed は高き意味の財なりこと云ふ不可なし。乃ち經濟上の富 Wealth, Reichtum, riches, ricchezza はより高き意味の富に到る前提たり、手段たり。

斯くの如く、經濟學は先づ貨幣の概念を以て其研究の中心に置くものなり。其意は貨幣又は物質的富を人間努力の主要目的と認むるにあらず、又た經濟學研究の最要問題と

爲すにもあらず、今日の文明國を通じて人間日常生活に於ける行爲の動機を秤量するに最も精確にして、又た最も便利なる手段たるを認むるにあるなり。人間行爲の動機を以て彼が贏得 *Acquire, erwerben* する貨幣の額によりて秤量せらるる云ふは、人間は貨幣の得喪以外何の念ふ所なしとするにあらず。蓋し人が營利貨殖 *Geldwerb* の爲めに營む業務はまた其自らに於て快樂たるもの多し。社會主義が今日の社會を改造して更らにより多く人間日常生活の爲めにする業務を、其自らの快樂たるの實を擧げ得可しと主張するは決して架空の臆説と斷ず可からず一面の眞理は慥かに這裡に存せり。John Gray, *The Social System*, 1831. を見よ。一見不愉快なる如き貨殖營利上の業務も、人間の能力に活動の範圍を供するにより行動の衝動を満足すると著しく、従て大なる快樂の源たること尠からず。唯だ吾人の記憶する可きことは、貨幣額を以て人間日常生活行爲の動機を秤量する上に於て、人間の感情道念理想等を無視す可からざることは是れなり。殊に階級的同情と家庭的愛情とは、絶へず吾人を支配しつゝありて、時には貨幣額を以てする秤量を全く無効ならしむるこゝあり。又た今日の文明人は其日常生活を孤立したる個人として

營むものにあらず、必ず社會の一員として營むものなり。従て自己一家の利益は社會全般の利益の考慮によりて著しく左右せられ制限せらる。而して今日に於ては社會に於ける共同的行爲の範圍著しく擴張し來り、貨幣額の秤量は此共同的行爲の立場より下さる可からざる場合甚だ多きを加へたり。

**科學としての經濟學の要求。** 吾人は從來經濟學者間に行はれたる抽象的經濟人

*Homo oeconomicus, economic man, Wirtschaftsmensch, homme économique* の概念の如きは、今日に於ては斷然之を捨てざる可からず。吾人は實在の社會の一員としてあらゆる階級的感情家族的同情の支配の下に立つ人間を取りて、吾人研究の對象と爲すを要す。從來の學者が其研究の出立點を個人一而も抽象的の經濟人一に置きたるは大なる誤謬なり。個性の尊重は今日の文明社會の根本的要求にして自我の實現は其最終の目的たりと雖も、功利主義 *Utilitarianism—Bentham* の説きたる個人主義ロビンソン・クルソー觀は輒く學問上に許す可からず。此意味に於て彼の『ヘドニステック・カルキュラス』*Hedonistic calculus—Pantaleoni* を經濟學の本體なりとする學説は此意を明言するにせざるに拘らず飽迄

排斥す可きものなり。かくて吾人の研究は貨幣額の秤量を出立點として、其研究の對象が (一) 内容に於て共通の統一性を有し (二) 外形に於て一定精確の測定を爲し得可きとを根本的要求と爲すものと知る可し。貨幣額によりて其行爲の動機を間接に秤量し得ることは内容上の共通統一性にして、此秤量によりて各異なる動機を比較し得ることは外形上の測定なり。此れ纏て經濟學が取りて以て其の研究の本體と爲す所なりとす。

#### 經濟學の本體 補論 改定經濟學講義第一卷補論其四を収録す

經濟二様の意義。獨逸の學者は經濟學其もの、定義よりも却て經濟の定義に力を傾注すことは前に述べたり。其經濟と云ふに二様の意義あり。一は『ヴェルトシアフト』 Wirtschaft 即ち組織としての經濟にして、二は『ダスヴェキルトシアフトリック』 Das

wirtschaftliche 即ち經濟的と云ふ是なり。組織としての經濟は更に之を解剖すれば『經濟的』と云ふこと『組織』と云ふことなる。蓋し經濟とは經濟的社會組織 Wirtschaftliche Organisation der Gesellschaft の略稱として用らるゝものなればなり。さて其組織に就ては特殊經濟共同經濟綜合經濟 Sonderwirtschaft, Gemeinwirtschaft, Gesamtwirtschaft の三種を分つこと普通なり。特殊經濟とは最も分明にして誰人も認め得可き具體的の組織にして、今日に於ては家族經濟企業及國家經濟の三者之に當れり。此種組織に就ては別に込み入りたる詮索を要せず、自然人の何人かより成る一の社會單位なることさへ判明すれば足る。之に反し共同經濟綜合經濟に就ては其性質を確定すること容易ならず。先第一に特殊經濟に於けるが如き經濟主體 Wirtschaftssubjekt 果してありやなしや、此主體の發意に基く統一的の組織意志を有するや否や甚だ曖昧なり。獨逸の學者は此點に就て博詞宏辯を費すものあり、雖も今日に至て論據未だ確定するに至らず。必竟するに共同經濟綜合經濟共に一の準格に過ぎずして、特殊經濟と全然同一の意味にての組織たることなし、單に説明の便を圖り多少の無理あるを知りつゝ、強て命ずるに經濟の名を以てし、

特殊經濟の概念に近接せしめんとするものにして、牽強附會の嫌は到底免るゝ能はず。従て之に關する學者の論究は必竟名稱争ひ以上に出でず、學問の内容に貢獻する所少し、獨逸學問の一弱點茲に現はるゝ云ふ可きなり。

『經濟的』てふ概念。他方に於て『經濟的』とは如何なることこの意なるや獨逸學者の説は甚だ要領を得ず。此事は嘗て『經濟と經濟行爲の概念に關する誤謬』なる拙文に於て評論したることあり。其文「經濟學研究」四五七頁に收む 就て看よ。英國其の他の國の學者の説も獨逸學者の説以上に出づるものを見ず。普通『經濟的』なる語の下に解釋する所は存在の量稀少にして、之を財の稀少性 Parität, Seltenheit と名く而して之を人間の用に供せんとするには勞力又は代價の費用 之を假りに費用性 Kostennässigkeit 之を假りに費用性 Kostennässigkeit 之を假りに費用性 Kostennässigkeit を要するもの、換言すれば有償的のみに得らる可きもの 之を有償性 Entgeltlichkeit と名くに關すること之なり。是れ大體に於て最も無難なる解釋にして他の凡ての説明に優れり。オツペンハイマー故に曰く、欲望に經濟的欲望なるものあることなし、唯だ人間の欲望を經濟的に即ち費用を提供して充足することあるのみ。Kein wirtschaftliches Bedürfniss, sondern wirtschaftliche, d. h. kostennässige Befriedigung der

Bedürfnisse フックスも亦經濟的てふ概念を定むるには有償的と云ふ概念を中心とす可しと云へり。左右田氏「經濟法則」の論理的性質序文 されば存在の量豊富にして何人も任意に之を取りて欲望を充足するを得可きもの 例へば日光・空氣等に關する人間の行爲は經濟的にあらず經濟學研究の範圍外に屬す。又た存在量限りあるも之を得るに費用を提供することなき場合、費用の提供によりても之を得ると能はざる場合、兩つ乍ら經濟的ならずして經濟學の問題たらずとす。又た一派の學者は此くまで立入りて論究せず、單に有形物質と云ふことを以て經濟的てふ概念を定めんとせり。即ち曰く、經濟的とは人が其欲望を充たすに要する物質的要件有形財に關することと云ふ。マーシャル第一章の所論粗ぼ此れに近し 此定義の不充分なることは多言を要せず。經濟的てふ概念の適用せらるゝは決して物質的要件有形財のみに限らず。人が欲望を充たすに要するものは、之を二大別すれば有形財と無形財とあり。無形財の主なるものは人の勞働殊に普通勤勞 Service, Dienstleistung の名の下に知らるゝ他人の勞働給付是れなり。今日の吾人は他人勞働の給付を受くること無くしては一日も生活を營むと能はず、殆んどの何等の欲望をも十分に充たす能はざるものなり。殊に經

濟上最も重要な価値の現象は、有形財のみに存するにあらず、無形財即ち他人の勤勞權・利關係等にもあり。吾人は此等無形財にして吾人の欲望を充たすものに價值付けし、之に對し價格を支拂ふことなくしては、一日も經濟生活を持続する能はざるなり。乃ち經濟的てふ概念を有形財物質的要件に限るは、全然實際の事實に合はざる空説なるを知る可し。獨逸學者が甚だ綿密複雑なる論究の結果は、廻り廻りて再び元の所へ戻り、舊時の英國學者の説きたる所に歸着せずんば已まず、リカルドが説きたる費用本位の經濟概念は今日に於て再び勝利を占めんとする勢を示せり。

**經濟の本則。** 然れども單に費用のみを以て經濟的てふ概念を定めんとするは種々の不都合あるを免れず（此事拙文『費用學か利用學か』に於て略論せり、改定經濟學研究の其文を見る可し）。吾人は今一層立入りて更らに概念を精密ならしむるを要す。元來『經濟的』てふ語は節約の義を中心とす、經濟的の行爲は節約の行爲と同義なり。從て學者は經濟の本則 *Prinzip der Wirtschaftlichkeit* なるものを立て、『最小の勞費を以て最大の効果を擧げ最大の満足を得ること』を以て其目的と爲せり。然れども此法則は委

しく分解すれば、次の三項より成るものなり。一 一定の效果一定の満足を得るに最小の勞費を用ゐること、之を最小費用の法則 *Prinzip des geringsten Kostens* と名く可し。二 一定の費用を用ゐて最大の效果最大の満足を得ること、之を最大效果又は最高満足の法則 *Prinzip des grössten Effektes oder der Maximalbefriedigung* と名く可し。三 最小の勞費を用ゐて最大效果最高満足を得ること、之を最小費用最大效果併行の法則 *Prinzip des geringsten Kostens und des grössten Effektes* と名く可し。茲に效果と云ひ満足と云ふは、術語に於ては略して利用 *Utility*, *Nutzen* と云ふ。故に最大效果最高満足の法則は、之を言換へて最大利用の法則 *Prinzip des grössten Nutzens* と爲すも可なり。今諒解の便を圖りて之を表すれば左の如し。

費用	利用
(1) 一定……………最	大  最大利用の法則
(2) 最小……………一	定  最小費用の法則
(3) 最小……………最	大  大最小費用最大利用併行の法則

右三の場合を總括して經濟の本則行はる云ひ、此經濟本則の支配を受くる場合を稱して經濟的ニ云ふ。是れ最も簡潔明晰なる解説にして學者好んで之を使用せり。然れども少しく考を旋らすときは、此くの如きは決して單に經濟的現象行爲のみに限るにあらず。如何なる行爲にても苟くも人間が健全なる常識に訴へ合理的に行動するときは、右の法則は必ず之を遵奉するものにして、人間社會的個人的百般の行爲に均しく適用せらるゝ所とす。政治上に於ても、學問上に於ても、宗教上に於ても、藝術の上に於ても、他に妨ぐる事情存せざる限り、吾人は一定の行爲に要する所の勞又は費の最少にして、其效果の最大ならんことを期せざるはなし。而して技術の真相は、必竟右の法則を實現する手續たるにあり。技術の發達は勞費を可成節減し効果を成る可く大ならしむる人間工夫の進むことを云ふに外ならず。されば右經濟の本則なるものは人間合理行爲の本則 *Prinzip des rationalistischen Handelns* 名くるを妥當とす。單に經濟行爲のみに限局するは事實の真相を大に謬るものなり。然れども學者が之を經濟行爲のみに限局したるとは、一應の理由なきにあらず。凡そ人間合理的行爲の中、亦最も合理的打算的なるは經濟

行爲にして、他の如何なる行爲よりも、人間の合理性は著しく作用するものなり、此點本文に於てマーシアルの論ずる所要を得たり。而して之に加へて更に一の有力なる理由あり。即ち經濟行爲に就ては、其要する費用も、其擧ぐる所の效果、其より得る利用（満足）も、共に精確に之を稱量し得て、果して合理の本則に合するや否や、其大小多寡を綿密に測定するを得ること即ち是なり。何故此く精密なる稱量を爲し得るや、云へば、經濟行爲は其費用も其利用も、共に一定の貨幣額を以て測定し、又言表はし得るが故なり。マーシアルが貨幣稱量を容るゝ、人間行爲を以て、經濟學の本體と爲す所以茲にあるなり。吾人は人間の合理的行爲を二分して、一は貨幣額測定を下し得可きもの、二は之を下し得ざるものとするを得可し。其貨幣額測定を下し得可き合理行爲は即ち經濟行爲なり。從て吾人は經濟的てふ概念を定義して下の如く云ふを得可し。人間合理行爲の中、貨幣額稱量を爲し得可き者に關する現象を經濟的ニ云ふ。近來獨逸の哲學者リツカートは科學を二大別して自然科學、人文科學とし、人文科學は人文價值（又は文化價值） *Kulturwert* に關連するものなりと云へり。 *Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung*. 3. 4. A. 1921.

Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft. 4-5. A. 1921 此說に従ふときは經濟的とは貨幣額の稱量を許す人文價值に關連するところを云ふべき爲す可きなり。マーシャルの經濟學本體論は斯く觀察すれば現今學問上最も進歩したる立場を代表するものと思む可きなり。

**餘剩利用及所得。** 然れども吾人の研究は更らに一步を進むる所なかる可からず。

何ごなれば貨幣額の稱量は、アーシアルも認むる如く、必竟外形的測定 External test or measurement たるに過ぎず、其内容的統一は未だ之によりて十分に確められざればなり。乃ち吾人は此の貨幣額稱量てふ外形的測定を許す一切の人文價值が、内容的にも亦統一性 Homogeneity を具備するものなるを證明せざる可からず。是れ現今經濟學の最中心問題にして其解決甚だ容易ならざるものごす。外形的に均しく貨幣額稱量を許す現象又は行爲にても、其性質は千差萬別にして、必ずしも内容上の統一性を共通に有すご豫斷す可からず。商人が其營業の爲めに支出する十圓ご、父が子の教育の爲めに支出する十圓ごは、貨幣額より見ては同一なりご雖も、之より得る満足は内容的には莫大の差違ある可し。之を均しく經濟的てふ概念の下に一括するは、其内容にも何等かの點に於て共通統一の

性質あるごを立證するを要す。然らざれば學問の對象は單一なる可しごの根本命題を打ち破るごご、なる可きなり。

論じて茲に到り、以上説明する所の未だ間然する所甚だ多きを悟る可し。單に費用ご利用ごの兩項を置き、之を外形的に貨幣額の測定てふ一事を以て強て統一するのみにては不十分なり。ヘーゲルの所謂『シーシス』『アンチシーシス』を得るに止り『シンシーシス』を得たりご云ひ難し。吾人は那邊に此の『シンシーシス』を求む可きや。予は答へて曰はんごす、所得の概念にごこそ之を求む可しご。今少しく其意を布演して解説を試みん。

費用と云ひ利用ご云ふ、其もの自ら人間行爲の目的たるにあらず、此兩者は人間行爲に與へられたる『カテゴリー』なること恰も時間ご空間の如し。吾人は經濟行爲てふ一の合理行爲を營むに方り、必ずしも最小の費用に執着せず最大の效果に束縛されず、此兩者を得んご期するものは、必竟費用を提出して得たる利用より、其費用を控除して得る眞正の利用 (之を餘剩利用 Surplus utility; Mehrnutzen ご名く可し) の最大ならんとを期する

に外ならず。言換ふれば、人間經濟行爲の關連する人文價值は、眞正の餘剩利用即ち是れなり。故に費用大なるも利用更らに大なるか、利用小なるも費用更らに小なれば、吾人行爲の目的は達せらる、譯にして、又た事實に於て吾人は常に爾く行爲しつゝあるものなり。即ち吾人は必ずしも最小費用の法則にのみ即せず、最大利用の法則にのみ支配せられず、吾人を支配するものは實は最大餘剩の法則 Prinzip des größten Mehrs (又は最高餘剩利用の法則 Prinzip des maximalen Mehrnutzens なるなり。今 K を費用 N を利用 M を餘剩とすれば、人間合理行爲の單純通則は  $N \sqrt{M}$  なる定式を以て言ひ表はす可く、修正通則は  $N - \sqrt{M}$  なる定式又は其解式たる  $N - \sqrt{M} = \square M$  ( $\square$  を以て最少を  $\square$  を以て最大を示す) 又は  $\square N - \sqrt{M} = \square M$  を以て言表はす可きなり。

さて右の餘剩利用も、經濟行爲に就ては之を貨幣額を以て稱量するを得るなり。此く貨幣額を以て稱量せらるゝ、餘剩利用を、經濟上に於ては所得 Income, Einkommen 云ふ。是れ經濟行爲最終の目的にして、從て經濟學の本體たるもの。貨幣額を以て稱量すてふ外形的測定の下され得る限りの餘剩利用は、所得として内容的統一を得るなり。所

得を詳説すれば、經濟行爲—労働又は財産の運用及其兩者の結合たる企業—の結果として新たに一經濟單位に入り來る利用の増加なり、餘剩利用なり。(之を略して富の増加とも云ふ) 此所得を得ることに關連する行爲現象を總稱して經濟的と云ふ。故に言を改めて云へば、經濟的とは所得形成的 Einkommenbildend 云ふことにして、其の形成せらる可き所得は經濟上に於ける人文價值なり。人は單に欲望の満足のみをのみ求むるものにあらず、又た其満足が物質的要件を有する時のみ經濟行爲を營むものにあらず。單なる欲望充足は獸類も之を勉む可く、其際物質的要件を獲得することも、凡ての生物に共通なる現象にして、特に一人文價值としての經濟現象を惹起することなし。之れに反し人類は均しく欲望の満足を求むるにも、餘剩利用てふ人文價值所得てふ人文價值に着眼す、之によりて人類の行爲中特に『經濟的』と稱せらる可きもの起るなり。經濟學は即ち此の人文價值を取りて其の研究の本體とするものなり。故に經濟學は餘剩の學なり、餘剩利用の學なり。費用の學にあらず、又た單なる利用の學にあらず。兩者相併せて生ずる『シンシーシス』たる所得の學問なり。



## 第六章 科學としての經濟學

經濟學に於ては論理方法即ち研究法に關し、殊に演繹歸納何れを主とす可きやに關し、永き論争あり。獨逸歴史派のシュモラーと奧太利派のメンガーとの研究法に關する討論、今猶吾人の耳朵に残る所にして、近くは河上博士は幾多の論篇を公けにして此問題を論じ、予が本書舊版に於ける論述に對しても詳細の批評を下され、予も之に對し簡單乍ら博士に答辯するこゝを勉めたり。然るに此間西洋殊に獨逸に於ては、此問題を更らに根柢に溯りて研究する學者ありて、從來經濟學者が相互の間に於てのみ狭き知見に局限して論争したるこゝ、其用甚妙きこゝを悟らざる能はざるに至れり。元より今日も雖も演繹歸納兩論法の適用に就て考究を要する問題多くあり、雖も事實に於て研究法上の論争は學問の内容に接觸するこゝ寧ろ少く、研究法論に於ける論者も經濟學の本問題に於

ける論者もは、全然別人の觀あり、兩者の間に有機的連絡を見出すこゝ殆んど不可能なり。リーフマン曰く「如何なる方法論上の要求たりとも、單に方法論的要求の見地よりのみする理論體系の批評は之を斥けざるべからず、伴ふに積極的なる理論的業績を以てせざる方法論的主張は無價値なり」也。『國民經濟學綱領』第一卷第一頁、予は斯學の現狀に痛恨を禁ぜざる者として衷心より此言に賛同せざる能はず。今日に於てはリカルド一流の抽象的論法を用ゐる學者殆んゞ一人もなく、歴史も事實もを講究する必要は、程度の差こそあれ、殆んゞ凡ての經濟學者之れを認めつゝあり。從て舊來の如く狭き範圍内に於て研究法に就て長き討論を重ねるこゝの利益は甚しく疑はるゝに至り、學者は勉めて本體の問題に就て着々積極的建設の業を積む可きこゝを承認するに至れり。然るに近來の根本的研究は此くの如き比較的無用なる論争の類に屬せず、抑も社會科學研究者の凡てに向て注意を促がす大問題たり。此新傾向は一面に於て自然科學萬能時代の反動と目するを得可く、此點に就ては永久的價値を有するこゝなし。然れども他の一面に於ては、此傾向は從來の學問學 Wissenschaftslehre に一生新面を開くものにして、此點に於ては

永く學問上の一進歩をして維持せらる可きものなり。此新研究の有力なる代表者は獨逸の學者リツカートにして其説を布演し其論を法律學に應用したる者にラスクあり、經濟學に應用せんを勉むる者に獨逸にステフエンガーあり我邦に左右田喜一郎博士あり、共にリツカートを出發點として更らに獨創の研究を進め、經濟學の學問としての性質を考ふるに就て寄與する所少からず。更らにマツクスウエーバーに至つては、嶄然として儕輩の間に卓越せる研究を試み、其豊富なる史的修養を基礎とし、天才的の哲理思索を縱横に往來せしめ、新機運の劈頭に立つて正さに、經濟學に一紀元を招かんとする慨ありしも、業央にして早世したるは、斯學の爲め痛惜に堪えざる所なり。吾人學に従ふもの、向後の研鑽を進む可きは、實にウエーバーが暗示したる方向に存せり云ふも不可ならじ。

抑も唯物觀と唯心觀の争は學問あると共に存し、向後雖も決して消滅するものにあらざる可し。十九世紀の後年、自然科學が驚く可き進歩を致し、社會科學の進歩之れに伴はざるや、凡そ學問は皆自然科學の如くならざる可からず、この念學者を支配するに至り、殊に佛國のコントに至つては、最も有力に社會科學を自然科學と同性質のものたらしめ

んこの傾向を作れり。進化論の偉大なる發見は、此傾向を促進する可き大にして、自然科學者にして又た哲學者たる獨逸のヘツケル、オストワルド等は、殆んど極端まで此種思想を鼓吹し、終に宗教の範圍にまで立入らんとするに至れり。ヘツケルを中心とする唯物論者は、唯物論なる名稱を厭ひ自ら稱して『モニスト』(Monist, monismus) (一元論者)と云ふ名は、此く異れり。雖も彼等は、必竟一種の唯物論者なり。經濟學に於ては、ヘーゲルより分岐するマルクスの一派は、唯物史觀の説を主張して侮る可からざる勢力を作れり。我邦にても、此の一元論なるものは、一時勢力あり、黒岩周六氏の如き、天人論なる書を作り、萬古の疑案を一元的に解決し得たり。主張し其論一世を風靡するの勢ありき。歴史學者にては、近く物故せる獨逸の文明史家カールラムプレヒトの如き、極端なる立場を代表し、歴史を悉く進化論的自然科學的に改め作らざる可からず。爲し是れ又祖述者を見出す可き妙からず。マーシアルは別に一元論を公けには採用せず、雖も經濟學を自然科學に出來得る丈け接近せしむ可きものなり。主張し以上の大勢に洩れず。予は經濟法則を悉く自然法則とするの不可なることは、嘗て極力之を論じたり。改定經濟學研究七十一頁以下

然るに獨逸殊に南方獨逸の學者間には、此一般の傾向に反對する潮流は稍々久しき以前より存したりしが、リツカートに至つて茲に有力に此新傾向を促進することとなり、學問の本質殊に人文科學の本質に就て著しき異説を樹て、自然科學萬能の時代思想に反省を促したり。リツカートの最代表的なる著述は、題して『自然科學的概念形成の限界』*Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung*, 3-4 A. 1921. 云ふ、即ち自然科學的に概念を作るとは無限なるを得ず、自ら制限あり、然るを其制限を無視してあらゆる學問に之を推及せんことを誤なりと云ふ趣意を評論したるものなり。氏は其大要を一小著述に集約し其書を『人文科學と自然科學』*Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft*, 4-5 A. 1921. と名けたり。氏の主張する所は一元論を排して再び二元論を恢復するにあり、先づ認識論の上より殊に『概念』の研究によりて、其業を開始す可しと云ふにあり。之によりて、社會科學は必ずしも自然科學の如くなるを以て目的とするを要せず、其自らの研究法より特有の概念形成法あることを立證するなり。從てまた社會科學に於て云ふ法則は、自然科學の法則と同一種に屬せず、其自らの特質を有すと爲す。此點に就ては左右田氏に

『經濟法則の論理的性質』*Die logische Natur der Wirtschaftsgesetze*, 1911. (Tübingen staatswissenschaftliche Abhandlungen, 17. Heft.) なる著作ありて、詳密の研究を載せたり。予はリツカートの論を學ぶこと未だ甚だ不十分なるものなれば、茲に之を詳述せず、唯目下予の抱く所の見解を未熟ながら次に開陳し置くに止めんとす。

學問の本質は、其研究の客體が内容的に一貫的統一を有すること、此客體を認識するところが精密なることの二條件を具備せざる可からず、此點本書の本文に於てマールシアルに基きて粗ほ解説し置きたり。今經濟學の論理的性質を論ずるは、主として其第二の條件たる精密性に關するものにして、今日まで學問の精密性を最も多く具へたるものは、自然科學中の或もの(例へば物理學化學又は星學の如き)なるとは誰人も疑はざる所なり。從て或る科學を精密なりと認むる標準は、此等自然科學に接近すること多きこと、同意義に解釋するを常とせり。其接近と云ふとは、主として論理的性質に就て云ふものにして、之を實現するものは、一は研究法にして、一は研究法の運用によりて打立てらる、所の法則是なり。即ち或一科の學の研究法が、自然科學殊に星學物理學化學等に近けれ

ば近きほゞ其學は精密的なりと看做され其形成する所の概念が自然科学の概念の如く、打立つる所の法則が所謂自然法則に類すれば類するほゞ其學の學としての性質は十分なるものと認められたり。元より人間社會の現象は到底自然界の事實と同じきを得ざれば、唯だ接近し類似す云ふに止りて、全然同一なる事能はざるは誰人も争はざる所なれども、是れ其學の進歩未だ不十分なる所以にして、吾人は全力を盡して一日も早く自然科学へ接近類似の度合を増進せしめざる可からざるものとせられ、從て社會科學に於て概念を形成するには、出來得る丈、之を自然科学的に取扱ひ、一切の社會現象をあげて凡て之を概念に歸着せしめ盡くす程度まで進まざる可からず、非概念的、非合理的、後天的要素は勉めて之を排除するに勉む可しとせられたり。斯く大體の方針を立つるも、其實行の問題を考ふるに至つては、彼の正統學派經濟學の如く、僅々の概念と法則とを打立て、一切の經濟現象を其中に壓搾するこの不可なるは學者の悟る所となり、歴史派の勢力大を加ふるに共に、經濟學の自然科学化は之れを力學の如き程度まで進むることは到底不可能なり、須らく生物學の程度まで進むるを以て満足せざる可からずとするもの漸く

多數となれり。マーシャルは英國に在て最後まで此説を方説しつゝ、ありて多數の賛成者を有せり。生物學の如くする云ふことは、主として生物進化の理法を經濟現象に適用するに於て、獨逸の學者が組織としての經濟（或學者は更らに極端まで進みて有機體としての經濟ありと主張す、我邦にては金井博士即ち此説を執る）なるもの、解説に主力を傾注するは此に基けり。此思想を豊富ならしめたるは前章紹介したる經濟發展階段説なり。即ち經濟を經濟生活と見、此生活が進化的に漸次に發展して今日に至れる順序を、幾干かの發展階段に盛り分けて、不十分ながら發展史的なる概念を形成せんとする企是なり。シュモラー、ブヒアー兩氏は主として獨逸の歴史に就て、斯くの如き階段説を立てたるに、前に紹介する如く、史學者にありてはラムブレットの心理的階段説あり。（ラムブレットは象徴時代、模型時代、假設時代、個人時代、主觀時代、Symbolismus, Typismus, Conventionalismus, Individualismus, Subjektivismus の五階段を分つ、拙著改定經濟學研究一二六頁及桑木博士の近著を見よ）此等の説は暗示に富む奇抜なる試みとして、甚だ歓迎す可きものなり、雖も其以上の價值を認むるは困難なり。凡ての國民凡ての文明に就て

主張し得可き概念たる能はざるは勿論獨逸のみに就ても實際の歴史を解説するに必ずしも妥當なりと云ひ難く、殊にラムブレヒトの説に至ては一種の『ファンタジー』たるの感なきを得ず。歴史派の成績此くの如きものに止るならば、其當初の高言に相應せざる遠きものこの謗を免るゝ能はず。必竟するに、此等の説たる只管に自然科学への接近を勉むるに急にして、其間打破り難き堅壁の存するを無視したるもの云ざるを得ず。茲に於て吾人は再び踵を旋らして、先づ吾人自らの出立點を精査し見るの必要を感ず。果して自然科学の論理方法が唯一の方法にして、其法則が唯一の法則たる可きや否や、社會科學（人文科學の全體に就ても）には自ら他の論理方法あり、他種の法則存するにあらざるか否か、此れ吾人當面の問題たるに至れり。他の語を以て云へば、學問の根本的條件たる精密性は、自然科学的たることの外にも亦た別に存せざるや否や是なり。

予の今抱く所の考は極めて未熟淺薄にして自ら甚だ之を危ぶむものなり。雖も先覺諸學者の説を學びたる結果、少くも其の或は可能ならんことを覺へざるを得ざるものなり。唯だリツカートの説には未だ徹底せざる所あるが如し。即ち氏は第一には自然

科學と歴史とを二個の對立物とすに、更らに又た第二に自然科学と人文科學とを對立せしめ、前者は研究方法上の對立にして、後者は研究客體上の差なりとす。前者に於ける自然科学と歴史との差違は、一は普遍的行程を取り、一は個別的方法を取るにありし、さて後者に於ける自然科学にも、人文科學にも普遍的と個別のとの兩行程存す。然れば第一の場合に於ける自然科学と第二の場合に於ける自然科学とは、名は均しけれども其の實は異なるものならざる可らず。此點に關する氏の説は、予の寡聞を以て判じたる處にては甚だ不徹底のものたるが如し。然れども、此は或は予の推考甚だ未熟なるが爲なるやも計られず。兎に角普遍的方法と個別的方法との二者あり、自然科学に於ては前者主として用られ、人文科學に於ては後に後者を採用す可きとは十分に諒解し得る所なり。シユモラーは、リ氏の説を浮薄誇張の見 シユ モ ラー は、リ 氏 の 説 を 浮 薄 誇 張 の 見 シユ モ ラー は、リ 氏 の 説 を 浮 薄 誇 張 と 評 せ り。原論卷一百六頁。而して氏は特に經濟學に就て左の如く云へり。

Den gr̄sten Raum werden die allgemeinen Begriffe in den Kulturwissenschaften einnehmen, welche das wirtschaftliche Leben zum Gegenstande haben, denn soweit solche Bewegungen sich überhaupt isolieren lassen, kommen ja hier in der Tat sehr oft nur die Massen in Betracht, und das für diese

Kulturwissenschaft Wesentliche wird daher meistens mit dem Inhalt eines verhältnismässig allgemeinen Begriffes zusammenfallen. So kann z. B. das historische Wesen des Bauern oder des Fabrikarbeiters in einem bestimmten Volke zu einer bestimmten Zeit ziemlich genau das sein, was allen einzelnen Exemplaren gemeinsam ist und daher ihren naturwissenschaftlichen Begriff bilden würde. Das mag also das rein Individuelle zurücktreten und die Feststellung allgemeiner begrifflicher Verhältnisse den breitesten Raum einnehmen. Es ist hieraus übrigens auch verständlich, warum das Bestreben, aus der Geschichtswissenschaft eine generalisierende Naturwissenschaft zu machen, so häufig mit der Behauptung Hand in Hand geht, dass alle Geschichte im Grunde genommen Wirtschaftsgeschichte sei. Rickert, Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft. 4.5. A. 1921. S. 129-30.

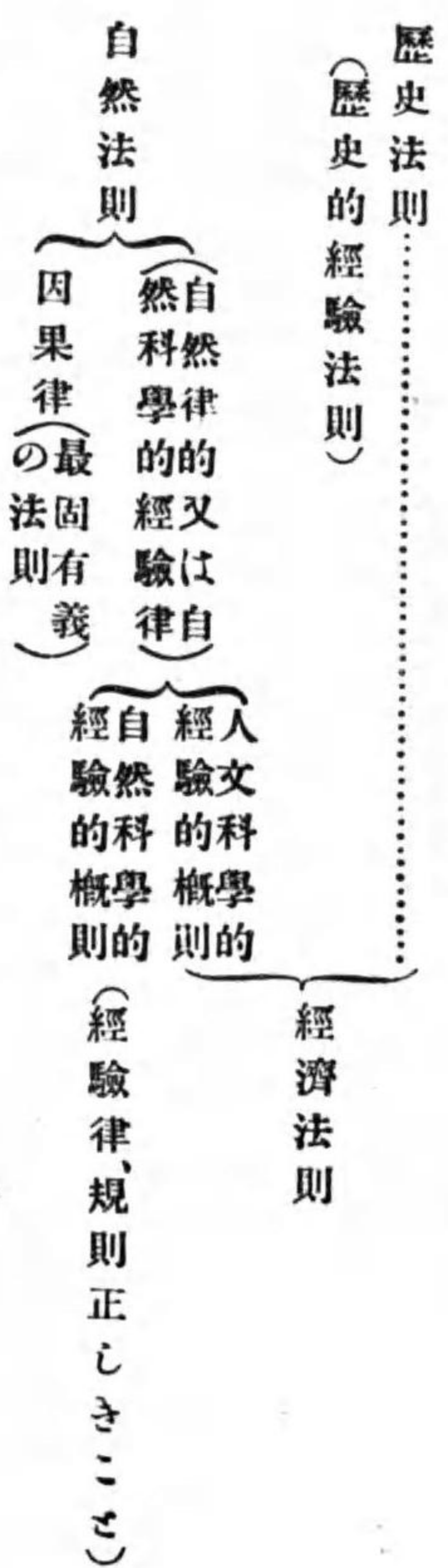
右を意譯すれば左の如し。

人文科學の中經濟生活を研究の對象とするもの（即ち經濟學）に於いては、普遍的概念は最も廣く用らる可し。何となれば、人文生活の中特に經濟的運動の分別せられ得る限り、何れも大數に關するものなる可く、従つて經濟學てふ人文科學の本體は、最も多く比較的に普遍的なる概念の内容と一致す可ければなり。例へば、一定の國一時の時代に於け

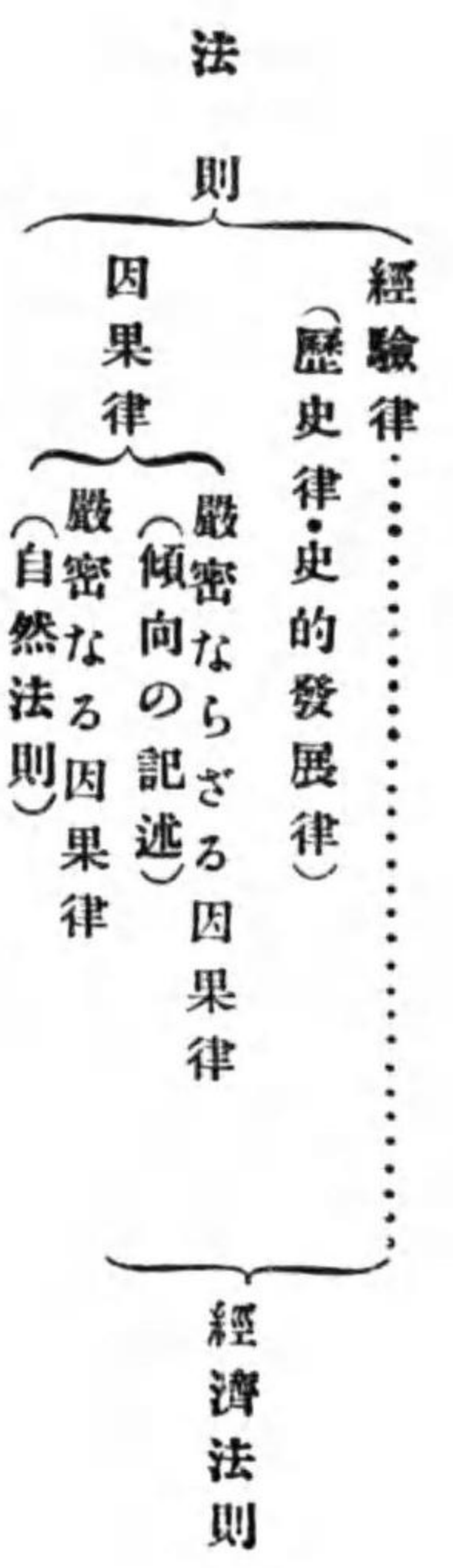
る農民又は工場労働者の歴史的性質は、凡て他の同種のものに共通なるものなる可く、従つて自然科学的に其概念を形成し得可く、純個別的特性は顯はれず、一般的概念的事情の設定最も廣く行はれ得可し。此理により歴史科學を普遍的自然科学と爲さんとする企ては、一切の歴史をあげて經濟史と爲す可しとの主張と、相伴ふこと屢々なる所以を諒解可し得きなり。

所謂唯物史觀は此く一切の歴史を經濟史とし従て之を自然科学の一たらしめんとする最極端を代表し、社會多數の労働者のみを普遍的に認め、個人の殊別的作用を全然度外に置かんとするものにして、其不當なること多言を要せず、雖も其間自ら經濟現象の普遍性多きことを立證するものも、かくて自然科学と歴史との對立は、主として論理方法に就ては主張し得可きも、實際現在の學問の本體に就ては、此く嚴密なる對立を認むる能はざること明白たる可し。人文科學も、其普遍的なる部分に就ては、自然科学的概念を形成し、従てまた自然法則に近き人文法則を立て得可く、經濟學は凡ての人文科學中、此くの如き普遍的部分を有すること最も多きものなり。唯だ經濟學に個別的部分あり

りて此は自然科学的に取扱ふ可からず自然科学の概念を強制す可からず従て之に就て立つる所の法則は自然法則に大に異なるとは必ず知らざる可からず。左右田氏は『因果律の意味に於ける經濟法則なるものあり得可からず（中略）經濟法則は上下的及左右的兩様の意味に於ける規則正しきこの定式に外ならず』Die logische Natur der Wirtschaftsgesetze. 1911. S. 126. に主張し次の一表を示せり。



一右は精細なる研究の結果に成るものにして今之を論評するこゝ容易ならざるも以上言ふ所の卑見は遙かに簡略にして凡そ左の一表を以て之を示し得可きなり。



少くもマーシャルの意味する所は右に大差なきものにして他日は知らず今日現在に於ては予は斯く單純に考ふるも大過なきを信するものなり。

右の説に對し左右田氏は現在の混沌たる状態に在る經濟學のみに就て云へば之を認む可し。雖も此くの如きは嚴密に經濟學の科學的性質を定むる所以にあらず必竟現在の状態に於ける經濟學は一の混合體なり吾人は一日も早く此状態を脱し純一なる研究客體に方法を有する經濟學を打立てざる可からず其打立つ可き新經濟學は寸毫も自然法則又は因果律を含有せざる人文科學的法則のみを認むる經驗的歴史的人文學ならざる可からず主張す。従つて此點に就ては右に引きたるリツカートの一言も左右田氏の難ざる所ならん。然れども左右田氏の主張は必竟一の理想論『ゾレン』論にして、經濟學を斯くの如きものゝ爲さざる可からずこゝにありて現在實際の經濟學は斯く

ありこの事實を説明するものにあらず。氏も斯くありこの解説のみに限るときは、經濟學には傾向の記述の意に於ける因果律と經驗律との兩者の併存するここを拒むものにあらざる可し。されば氏も予もは此點に就て大なる懸隔を有するものにあらず。唯氏は此現狀に満足せざること甚しく直ちに改造の業を始めて嚴密なる人文科學としての經濟學を打立つ可きを熱心に主張し予は這箇改造の事は自ら學者の研究熟し學問の内容充實する曉にあらざれば粹かに之を企つるも其詮なしと信するものなり。

\* \* \* \* \*

從來經濟學の研究法に關する論争甚だ紛糾せる裡に自ら二大派を劃するを得可し、演繹學派歸納學派是れなり。演繹學派の最も重なるものは英國の正統學派にして歸納學派の主たる代表者は獨逸の歴史學派なり。而して今日大多數の進歩せる學者の歸一する所は歴史學派にあるや勿論なり。雖も歴史學派のみ正しき研究法を獨占し從來の正統學派の所論は悉く謬れりとするは妄斷も亦甚し。然のみならず、正統學派は悉く演繹論法のみを執り、歴史學派は歸納論法のみに依るものにあらず。リカルド、ミルの兩學者

は正統學派の二大泰斗と看做さるれども、専ら演繹論法に偏倚したるはリカルドのみにして、ミルに至つては其研究法に關する主張に於ては、演繹法を盛んに稱揚したれども、其實際履みたる跡に就て之を見れば、歸納論法を用ひたること決して尠しき爲さず。リカルドも亦其一度立てたる大體論を運用するに方りては、専ら演繹論法に依りたるは疑ふ可からず。雖も其大體論を得るには英國に於ける實際事實に基きて歸納したるものなり。アダムスミスに到りては、演繹法を用ゆること共に、亦た盛んに歸納法を用ひたること、今日凡ての進歩せる學者の齊しく認むる所にして、他方に於ては、歴史學派を標榜する學者亦た演繹法を用ゆること少からず。されば演繹學派と歸納學派との區別は程度の問題にして、何れを多く用ひたるやに従て假りに命名するの外意味なし。今日に於ては、英國并に佛國の舊派（之れを英國にて正統學派と云ひ佛國にては一般に自由學派と云ふ）は多く演繹學派に屬し、米國學者、伊國學者亦之れに近きもの尠からず。獨逸の學者并に其流を汲むものは一般に歸納學派に屬するものと云ふ可く、所謂埃太利學派と稱せらるゝカール・メンガー一派の埃國學者も亦前者に屬すこと云ふ可し。されども、昔日の



意味に於ての演繹學派を稱す可きものは殆んど全く其跡を絶ち、皆歸納法をも併せ用ゆるものと觀察して大過なし。されば今日に於ては演繹學派歸納學派の區別を設くるは却て妥當を缺くものと云ふ可し。

予の見る所を以てすれば凡そ學問に學派なるものある可からず。學派あるは其學說の未だ眞理に到達せざる證にして、學問が學派の争に腐心したるは未だ一科の學問として十分に發達せざる状態には免る可からざるこゝなれども、一度獨立獨歩一科の學理を成就するに到れば、學派の異同は自ら消滅す可きものにして、若し強いて學派を分つ可しとすれば眞派僞派の二ありと云ふ可きのみ。經濟學は前に述べたるが如く種々の長き變遷を経て今日に到り、漸くにして一科の獨立なる科學の地位を占め得たるものにして、此發達の行程の中に於て發生したる學派の異同は今や漸く消滅して、茲に共同歸一の域に達せんとしつゝ、あり、演繹歸納、正統歴史等に分ちて黨同異伐したるは須臾にして過去の夢たらん可し。獨逸新歴史學派の泰斗として人も許し自らも許すグスタフ・シユモラーは曰く『演繹法も歸納法も經濟學の研究に相共に缺く可からざるこゝ猶ほ人の雙脚

の如し』と。英國學者中大體に於て正統學派を繼承し多くの點に於て其辯護に勉むる新學現時の碩者たるアルフレッド・マーシアルは、亦たシユモラーの此の言を以て其意を得たるものなりと公言す。兩派の先覺既に然り、他の祖述唱和するもの、如き多く言はずして可なり。

大體の趨向は斯くの如し、然れどもまた人各々天稟の差あり、趨向亦た同じきを得ず、されば各其長ずる所に從て其才能を發揮するは、學問の進歩に最も多く寄與する所以ならざるを得ず。今經濟學現在研究の状態に就て汎く之れを見れば、學者の態度に於て其傾向に於て自ら二大潮流の流れつゝ、あるを見る可し。此二大潮流は演繹歸納の學派争ひに胚胎し、何れの學問に於ても之れあるを見る。學者或は此二派の一を呼んで抽象學派とし、他を呼んで現實學派（又は實驗學派）と云ふも、此稱は多少褒貶の意を含むを免れざるが故に穩當と云ひ難し。是非輕重の意を少しも寓するこゝなく、唯其の傾向の趨く所を取りて假りに名を爲し、一を演理を主とする學者、他を記實を主とする學者と云ふ最も當を得るに庶幾からん。

獨逸の學者が經濟學の分科なるものに大に力を用ゐ、煩雜難澁なる種々の標準を設け、經濟學中各種の部門を夫々種類に従て分類するに勉むるは、學究に特有の通弊は云ひながら、學問の進歩に貢獻すると甚だ妙き事業に無益の勞を惜まざるものなり。凡そ何れの部分にありても、先づ事實を観察し、之れを記述するとより始めざる可からず、續て必ず概念の形成を缺く可からず、更らに進んで一貫の理法に到達するここなくして已むものは學問研究の中段に止るものなり。されば記實を主とする學者、演理を主とする學者、併存するは學問研究上分業の利を收むるものなり。記實せざる演理ある可からざるが如く、演理に及ばざる記實亦たある可き理なし。唯人生れて自ら長あり短あり、習慣教育亦た預りて其嗜好其傾向を左右す。學者は唯だ最も克く其才能を伸べ、其知見を發揮し得べき事業に勉む可きのみ。自ら獨り高しこして他の傾向他の嗜好を有するものを輕視するを許さず。之を譬へて云はゞ、齊しく富士山に登るもの、中、先づ途上の風景を十分に樂みて後頂上に到らんこ欲するものあり、途上の風景は途上の行程の進むに任せ一に山嶺の風景を専らにせんこするものあるが如し。二者共に終に達する所は必ず頂上

ならざる可からず。途上の風景を探るに全力を竭くして終に頂上に達せずして已むものは、富士山の全景を談ずる資格なきが如く、唯頂上あるを知りて途上の風景を全く顧みざるもの亦た富士山を知れりこ云ふ可からず。頂上に達せんこする者必ず困難を忍び苦勞に耐へて山路を辿り行かざる可からず、而も永く途上に彷徨して前進することを思はざれば終に山嶺に達するの期を失ふ可し。演理の完全を期せんこせば必ず記實を輕視す可からず、記實を好むもの亦た演理の業を辭するを得ず。經濟學の現狀に於て學者の態度未だ此邊の用意に於て缺陷なきを得ざるは、向後の進歩を待て改む可き所なり。然れども同一事實を蒐集し、之れを按排して一定の解釋を下さんこするに方りて、確定不動一ありて二なき定式の存するものと思ふ可からず。マーシアルは之れを將棋に譬へて、局に對する毎に其下す所の手必ず異ならざるを得ず、初より終まで必ず相同じき定法あるこみなしこ云へり。要する所は終局の勝を占むるにあり、此れに到る方法は千變萬化なる可し。されば經濟學の研究法に於ても始めより必ず一定の成案を設け、學者皆必ず此れに準據せざる可からず、爲すが如きは、學問研究の要を失するも亦甚しきもの

なり。將棋の例を以て云へば、『女王』の操縦を主とするものあり、『馬』の進退に得意なるものある如く、經濟事實を按排分合するに於て、其組合せ其比較其連絡は千趣萬態なるものあり。唯要する所は、記實演理共に其一に偏す可からず、富士山に登るもの、行きゆきて終に極まる處は共に山頂なるが如く、事實の研究は之れより一貫の關係を發見し得るによりて始めて其用を爲すものなり。從來の演繹云ひ歸納云ひ交々派を分て相闘きたる學者は、途上の奔命に疲れ終に頂上に到らずして畢るものならずんばならず。

ミルは經濟上の現象は他の社會現象よりも演繹論法に適するもの甚だ多し云へり、是れ一理なきにあらず。經濟上の現象は概ね貨幣額によりて秤量測定比較し得るものなるが爲め、他の社會現象に比しては其精確其定質遙かに勝れるものあり。然れども、ミルは此點を過重視し、經濟上に於ては關係を同ふする二個の事實存するときは、其の他に經驗觀察を要することなく、常に必ず此れのみを基て因果關係を推論し得可きものこそせり。社會上に起る經濟現象は千趣萬様なれば、中には亦た此くの如きものあるや疑なし。雖も、其然らざるもの亦た多々あり。物理上の現象に於ても、單に演繹法のみを間斷な

く應用し、其の間他に觀察經驗を試むるを要せざるは、多くは試験室内のみに限り、實際の自然界に於ては幾多の錯綜せる他の現象其間に混在し、一氣に演繹法の連鎖のみを以て繋ぎ盡くすを得ざるを思ふ可し。況んや經濟上の現象は自然界の現象よりも遙かに不確定なるを常とするのみならず、經濟上の現象の依て起る材料は自然界の物質に勝りて常に進化變遷して已む所なきものなるをや。されば或一定の形態の下に於て應用して誤なかりし推論も、之れを他の形態に應用するときは全く其用を失すると屢々あり。殊に人種上の差異は大なる影響を人間社會の現象に及ぼし、國を異にし民族を異にするによりて、原因結果の關係に甚しき異同生ずるを免れず。此等諸種の點を網羅せんには、詳しく事實を觀察し、現在に於ける經驗に照し、過去の變遷發達に鑑みざれば、經濟學の理論は机上の架空論に止まる可し。此點に於て歴史派の起りて、從來の正統學派の誤を指摘攻撃したるは、學問の進歩に大に寄與する所ありしもの云ふ可し。

然れども實際事實の觀察と歴史の研究とは直に全體の眞理を供給するものと思ふ可からず。斯くして得たる事實は亦嚴密なる推理的の吟味を経ざる可からず。學者間々

歴史の教ゆる所此くの如し、或は此くの如くならず云ふ。而も其謂ふ所歴史の教訓は、其學者が歴史上の事實に就て自ら試みたる推斷を指すものに外ならず。其推斷には正しきものあると共に、正しからざるものも亦之れある可し。一見して歴史の教ゆる所を見ゆるものも、更らに深く之れを究むるときは、却て反對の結論に到達せざるを得ざるもの亦たあらん。或は又當然生ず可かりし結果の他の事情の障碍する所となりて、却て一定の原因より生ず可きものも反對なる結果を生じたることなきを保せざる可く、殊に隠れたる關係に就ては、觀察する人を異にするによりて、現在に於ける事實も雖も其見解を同ふし能はざるもの尠からず、況んや遠く過去に溯りて推論を試むるに於てをや。學者多くは云ふ『歴史は繰返す』と。是れ確かに眞理なり、然れども此警句は亦た甚しき誤解を惹起すことあり。凡そ歴史上の出來事にして總ての點に於て全く同じきもの殆んど之れあることなく、何等かの點に於て必ず多少の差異の存するものなり。されば歴史は繰り返へすこと云ふは其大同の點のみを見たることきの事にして、小異の點あればこそ歴史は繰返へすこと云ふこと意味あるなり。繰返へすものは多くは人にして、事實其ものに

のにあらず。其同じこと云ふは等しきこと云ふ意味を強めて言ひ表はしたるに外ならず、唯其差異の點は甚だ輕微にして、姑く之れを度外に措くも妨げなしとすることのみ。然れども輕微なる差異も數重なれば終には重大の相違となる可く、或事柄に取りて輕微なる差異も他の事柄との關係に於ては重大なることあり。人ご時ご處ごを異にするごき、亦た同様なる變動を生ずることごも同じく豫め覺悟せざるべからず。

されば歴史を應用して、今の經濟現象に關する理法を推斷せんごするには細心綿密の注意を要するものにして、單に歴史的研究法を取るご號するのみにして、理論上の解剖を怠るものは、演繹論法に偏して、事實の觀察實際の經驗を輕んずるご等しく正鵠を失ふものなり。マーシアルは英國の北部に於ける永小作制度の普及ご農業進歩ごの因果的關係を例證して、歴史上の論定の輕々しく下し得可きものにあらざるを説き、又名同じく實異なる事實名異りて實同じき事實あるを記せざる可からずごして『レント』を例證したり。

シユモラーは、其經濟原論にラサルレの言を引ききて曰く『材料は思想を缺きても猶ほ

其れ相應の價値を有するも、材料に基かざる思想は全く妄想たるに過ぎず』Der Stoff hat ohne den Gedanken immer noch einen relativen Wert, der Gedanke ohne den Stoff aber nur die Bedeutung einer Chimäre.—Grundriss. I. S. 104. 50。是れ現在に於ける進歩せる學者の態度を示すものなり。然れどもシユモラーの率ゆる歴史學派なるものが、此の格言を守りて一の過つ所なきものなりやと云ふに、必ずしも然る能はず。近來經濟學の研究法に關して最も學界の耳目を聳動したる論争は、シユモラーとメンガーとの間に起れるもの是れなり。メンガーの率ゆる所謂塊太利學派が、シユモラー等の歴史派學者の記實を偏重すること極端なる過を指摘したる效は認めざるを得ず、其他の論點は今日に於て之れを見れば、言辭上の論詰多く行掛り上の論戰に力を傾倒するものにして、學問の進歩に貢獻したる所左迄重大なりと云ひ難し。メンガーの論ずる所、シユモラーの答ふる所、其正しきものは取りて以て經濟學者の共同財産と爲す可く、眞理の闡明に於ては、塊派もシユモラー派も共に偕に最後の結論を一二にす可きものにあらず。

されば演繹と云ひ、歸納と云ひ、正統と云ひ、歴史と云ふ、正しき結論に達せるあり、謬れる結論に止まれるあり。今日吾人の要する所は此等學派の異同にあらず、其正しき結論は如何にして之れを得、其謬れる論斷は何故に生ぜるやを知るにあるのみ。正しき結論に到達したるは、學派として標榜する所の如何に拘らず、先づ準備を事業として事實の蒐集觀察記述に勉め、その備十分に成りて後、慎重公平の論法を用ひて之れを解釋し、之れを定義し、之れを分類し、而して其間に存する一貫の關係を闡明したるべきにあり。アダム・スミス然り、リカルド然り、ミル然り、ロツシアー然り、シユモラー亦然り。之れに反し此等の用意を怠りたるときは、歴史派と云はず、正統派と云はず、其得たる結論は半成不備に止るか又は誤謬に陥れり。斯く適當なる用意を缺かしむ事情自ら其間にあり、人間の弱點として寛容せざるを得ず、雖も學問研究の上に向上の歩を進めんことを欲するもの嚴に戒心を加ふるを要す。

其事情は他なし、慎重公平なる可き學術的研究に政策的傾向を加味すること、是れなり。正統學派の謬論は其の演繹論法偏重の爲めなるよりも、リカルド并に其祖述者が當時英國の經濟上の實際政策に關與すること深く、其學理論を取つて直ちに政策上の實際

問題を左右せんじしたるに歸因するもの多し。歴史學派が大體に於て其研究の方法態度用意、正統學派の上に一步を進めたるに拘らず、屢々他の學者の指斥を免る、能はず、メソンの如き有力なる反對論者を見る所以は、政策論に熱中して、爲めに間々累を學理論に及ぼすことあるが爲めならずんばならず。此點に於ては、兩者とも昔日のメルカントリズムの程度を未だ全く脱却せざるものなり。リカルド時代の英國、シュモラー一流の起れる時代の獨逸に於て、實際上の國情が學者に悠々從容只管に學理の研究に耽けるを許さず、圖書堆裡の人亦た時あつてか起つて時務の急に干與せざるを得ざるものありしが爲めにして、必ずしも深く咎む可きにあらず、却て其國を念ひ其時を憂ふる誠衷は諒みせざる可からず。雖も、後の學者は取つて以て自ら鑑み自ら戒むるの資料を爲すを怠る可からず。現今我邦にあつて經濟學の研究に従事するもの亦た其周圍の事情を此均しくするものなるは茲に絮説する迄もなき所にして、政策論を喜んで純理論を疎むの弊に對して最も嚴重なる注意を要すること、我邦現時の學者の如きは多からず。

固より經濟學の研究によりて得たる結論は、之れを實際生活に移して行動の指針とす

可きものなるや云ふを待たず。然れども經濟學當然の職分として、政策當面實際政治の討究を要すとなすは當を得ず。學問の職分は一貫統一の理法を發見するを以て終る、其以上に爲す所は學問當然の職分として爲す所にあらず。マーシャル曰く『經濟學者は或る一定の行動の經過が與へられたる條件の下に正しきものなりや否やに就きて其意見を公表する自由を有すること、凡ての人に異らず、殊に問題の性質が主として經濟上の現象に渉る時は、經濟學者は多少の權威を以て論辯するを得べきなり。然れども概して之を云へば——今日學者間に此點に關して多少の異論あるは勿論なれども——經濟學者が實際の時事問題に向つて是非の判斷を下す時は、一私人の資格に於て之れを爲すを可しし、決して藉るに經濟學の權威を以てす可からざるものなり』と。シュモラーも亦た曰く『經濟學者は經濟上の實際問題の判定が、常に實驗的基礎の上に立つ可く、黨派并に利害關係先入の僻見感情等によりて左右せられざるを勉め圖らざる可からず。而して學者自ら時事問題の論争に餘り主動的に干與すること、是は、克く此目的を達すること、能はざる可きなり』と。學者は學問の爲めに學問に従事す可く、其實上の功過如何は自

ら他の人を待て之れを定む可きなり。然れども斯く云ふは決して經濟學研究の一部門として經濟政策の研究あるを否定するものにあらず。經濟政策論の研究は原理論と相待つて斯學に缺く可からず。さりながら、經濟學者の經濟政策を研究するは實際政治上の綱領を定め一定の政略的立場を自ら確立せんが爲なる可からず。『斯くある可し』『斯く爲さざる可からず』と主張するときは、既に學問の第一義より下りて第二義に落つるものにして、學者の經濟政策論を研究するは原理論に於るに同じく、一貫關係の發見を期するものに外ならず。即ち各國各時代實際上に起る經濟政策の事實を觀察し、記述し、之れを解釋して、其内より一貫の理法を闡明するを要す可きのみ。此點より云へば獨逸の學者が經濟學を二分して、理論經濟學實地經濟學と爲すは人の誤解を招く虞あり。所謂理論經濟學に於ても、各國各時代に於て實際施設せられたる政策上の事實を度外に措きては、萬全なる推論に到達するに能はず。實地經濟學に於て期する處は、實地上的の劃策並に綱領を得るにあらず、等しく一貫の理法の發見以外に奔逸す可きものにあらず。英國經濟學者の内には、間々學としての經濟論、術としての經濟論の區別を設げんとするものあり。將た亦た經濟學は果して學なりや術なりやとの問題をさへ提出するものあるは、獨逸學者と同じ謬見に陥れるものと云はざる可からず。

また純正經濟學應用經濟學の區別を施さんとするものあり。所謂應用經濟學は英國學者の『術としての經濟論』と云ひ、獨逸學者の『實地經濟學又は經濟政策』と稱するものを意味す。然れども此論は學問の要を誤解せしむること亦た右に述べたる所に譲らず。凡そ純正應用の區別は、詮する所單に程度の問題にして、マシーナルの引例せる如く、力學は幾何學より見れば一の應用學に過ぎず。雖も、工學は力學の應用學と云ふ。然るに鐵道工學は亦た一般工學より云へば應用學たるが如く、經濟學の問題とする所は、總べて實際上に存在する不確定不規則なる現象なれば、此意味に於ては經濟學は其全部を擧げて應用科學なりと云はざるべからず。然るに、他方には、農業經濟學、商業經濟學又は商業學等經濟學より見れば明かに應用學たるものあり。然れども苟くも科學を以て自ら標榜する以上は實地行動の指針とす可き命令教訓處方的立論は其分とする所に非ず、實地と云ひ應用と云ひ術と云ふも、其本來の目的は齊しく一貫關係の發見以外に

存す可きにあらず。

されば學者が經濟學の部門として劃定する所も、單に研究の便宜上假りに分つて順序を定むるの外ある可からず。其研究の方法に到つては一あつて二なきものなり。其當面の對象は實際の經濟生活に其現象の外に出づ可からず。純正應用理論實地學術等の區別は、研究若くは講說の便を圖つて之れを設くるものならずれば必ずしも排す可からず。雖も名の爲めに實を掩ひ、研究の對象并に方法に斯くの如き根本的區別の存する如く思はしむるは、學者の勉めて避く可き所にして、此用意より見れば此くの如き名稱は寧ろ全く廢するに若かず。

經濟學の名稱に關しても學者亦た區々の見解を立つるものあり。雖も實質にして具はる以上は、學問の名稱の如きは力を傾注して論争する價值なき問題なり。英國にては長き間『ポリチカル・エコノミー』Political economy 即ち政治經濟なる稱を用ひたるに、近來マールシアルは『エコノミー』は經濟を云ふものにして經濟學を意味す可きにあらずれば、須く改めて『エコノミクス』Economics とす可し。唱へ、出來得可くんば之に『ソ

ーシアル』Social (社會的)なる形容詞を加へて、其研究する所は個人的經濟現象にあらずして社會的經濟現象なることを明かにす可し。云ふ。佛國にても『エコノミー・ソシアール』Economie socialeなる稱を取る學者あり、獨逸の學者亦之れに贊同して『ゾチアル・エコノミク』Sozialökonomik とす可し。論ずるもの少からず (佛國のギョー、獨逸のヂーツェルの如きは其著に此新名稱を附せり、近くは獨逸學者共同の大集作たる書にも『社會經濟學大系』なる題を着けたり、又瑞典の大家グスタフ・カッセルの原論も『理論的社會經濟學』と稱せり。獨逸にては在來『ナチヨナル・エコノミー』『ナチヨナル・エコノミク』又は『フォルクス・ヴェルトシアフツ・レーン』Nationalökonomie; Nationalökonomik; Volkswirtschaftslehre 即ち國民經濟學なる名稱最も汎く行はる。我邦にては從來單に經濟學と呼び來りしが、金井延博士其著を名けて社會經濟學とせし以來此稱亦た稍々行はれ、國民經濟學なる名を冠する書も亦た出でたり。明治三十六年刊の拙著は之を『國民經濟學原論』刊行せらる。全體の名稱としては矢張舊に依て最も短くして亦た人の容易に解し得る經濟學なる稱を以て最も當を得たるものとす可く、或點に重きを置きて論を



立てんことを時、其事情に應じて社會を冠する可なり、國民を冠する可なり、世界を冠する可なり、亦差支ある可からず、必ずしも拘泥の論を以て追従し非難す可きにあらず。

次に經濟學の分類に就ても、獨逸流の學者は博詞宏辯を費すを好む、雖も無用の長物たらざるを得るもの少し。其中フキリツボヰキツチが經濟學を分て（一）經濟誌（二）經濟史（三）經濟理論（四）經濟政策を爲したるは、先づ現在の狀態に就ては要を得たり。唯だ其一の經濟誌を稱するものは、今日未だ一科の獨立せる部門を成さず。近來獨逸にて『ヰキルトシアフツクンデ』（經濟事情誌とも譯す可きか）なる名稱を附して各國の經濟事情を蒐集記述するに勉むるものあり、商業學校等の科目に之れを加へ、其教科書用として獨逸商業教育協會にて編纂せる大部の著述出でたり、雖も未だ學術上獨立の價值あるもの少く看做されず。英國にてもバーミンガム并マンチェスター等に商業大學の設立せられたるに伴ひ、アシユレー其他學者の力を添へて重要産業の現狀を記述したるものに甚だ有益の出版物あり、されど此等をあげて一科の部門とするは尙早に失するの嫌あるを免れず。經濟統計も性質上同じく經濟誌に屬す可きものなれども、是れ亦た未だ進歩

の初段にありて一科を成すに到らず。されば今日實際研究の現狀に於ては、單に從來の慣習に基きて成立ちたるものを以て經濟學の部門を爲すの外あらず、此點英國に佛國に獨逸に各々其國情を異にし、殊に大學々制の系統を同ふせざるが爲に異なるなきを得ず。英國にては先づ經濟原論あり、續いて銀行論貨幣論外國貿易論外國爲替論等あり、此等と相並んで財政學統計學等ありて一通りの經濟教育の順序を成すものなれども、近來獨逸學問の流を汲みて新たな科目を加ふるもの少からず。獨逸にては一般經濟學又は理論經濟學を始めし特殊經濟學又は實地經濟學之に續く。特殊經濟學は之を經濟政策學と呼ぶを常とせり。此れを普通農工商并に交通論に細分す。又貨幣論銀行論取引所論保險論植民論救貧論（皆概ね政策の文字を加ふ等）を別に設くるあり、社會政策を全く獨立の部門とする可きもあり。其他財政學統計學（之を又細分して人口統計經濟統計社會統計等とす）あるは勿論なれども、近來經濟史を特別の部門として大學に講座を設くるもの少からず、殊にミュンヘン大學に於ける一八九九年以來のブレンタノ教授の講義、其後を承けたる故マックス・ウェーバーの講義（近來遺稿を整理して刊行せり）の如き、其模範的なる

ものなり。英國にても近來經濟史の一科に甚だ重きを置き、米國にても經濟史の講座を設くることハーヴァード大學に於けるが如きあり。此等皆多くは學制上の關係を、學者の配置より來れることにして、必ずしも學術的の部門を以て目す可きものにあらず。經濟生活は有機的の活物にして、凡ての生物と同じく絶へざる進化發展の流の中にありて、其經過も成態も共に間斷なく變遷する歴史的產物に外ならず。現在吾人の生存しつつある經濟組織、此組織内に活動する人間の經濟行爲は、齊しく最近の現象にして、其特質亦た極めて新らしき成立に屬す。産業自由の原則は、近世文化の賜にして、其確立は近世的國家の建立の時期を同ふし、其進歩の頂上に立つ英國に於て最も早く發達し、今日に於て最も完全の發展を遂げたるものにして、他の進歩後れたる國はまた其發展に於て一日の弟たるものなり。此くの如き經濟生活の經過を成態を研究の對象とする經濟學も、亦永き史的發展の行程を経て今日に到り、漸くにして時務的變動的學說の域より脱して、一科の獨立なる科學たらんことを以て、其研究の範圍は曩日の學說的時代に比して著しく擴まり、學者業に此に従ふもの亦諺博なる識見を豊富なる思想を以て臨まざる可からず。されば其研究法として取る所、亦此範圍の全體に涉り洩れなく偏するなく、あらゆる學術的器具を應用し、黨同異伐の弊を戒め、客觀公平の態度を持して、一時的政策的利害關係の爲めに左右せらるることなく、記實を演理と兩つながら之れに勉め、經濟生活を支配する一貫法則の發見を以て最高の標的として進まざる可からず。

今此要求に應じ、現今經濟學者の研究して得たる結果は、第二編以下に於て講述せんとする所にして、要求の大なるに比し今日迄に成し遂げ得たる所は大なりと言ふを得ず。雖も區々末葉に關する論戰討究の先づ收まりて、學者の歩調凡そ歸一するに到りしは、極めて最近時の事なるを思へば、向後斯學に従事するもの、前途は希望洋々たるものありき云はざる可からず。今グスタフ・シュモラーが經濟學者が現在に於て學者が一般に一致して共同の立場を認むる所は左の如し云へり。Schmoller, Grundriss der allgemeinen Volkswirtschaftslehre. T. I. 1919. S. 124.

一 進化發展の理法を經濟學研究の根本とする。

二 心理倫理の研究を以て基礎の概念を定め、昔日の學者の架空に抽象せる「經濟人」

の如き假定を捨つること、從て其主たる問題として

一 近世の産業自由の原則は歴史的產物なるを認識し、原則として、個人并に所有權自由の存續を主張すること共に、共同主義の作用を認め、之に伴ふ所得分配の新制度、新形態の研究を忽せにせざること

二 社會階級の分岐は社會進歩の要件なるを認むること共に、其過超は吾人の現在を脅すものなるを認め、之を矯正すべき大規模の社會改良を期すること

三 極端なる宇宙主義の誤なるを認むること共に、國と國とは必ずしも利害常に衝突するものにあらず、對外經濟政策（商業政策）は敵對的思想を根本とす可きものにあらず、是れによりて國際間の協調を進め所謂世界經濟の建立に寄與するを勉む可きこと

\* \* \* \* \*

經濟學の目的は、知識を知識の爲めに得るを第一とし、之を實際の問題に適用することは第二なり。吾人は學問の研究に従事するに方り、其要用如何を慎重に考慮するを要す

るは勿論なり、然れども實際の要用如何を以て吾人研究の方針を定む可きにあらず。實際の要用を眼目とするときは、時々必要のみを考慮することとなりて、學問の第一義たる一貫的綜合を遂ぐることは能はず、單に斷片的なる知識を追求し、之を實際の必要とふ一事によりて非學問的に綜合するに過ぎざることとなるべし。かくては學問上の真理に到達する日の來らんことは終に期す可からず。學問上の系統を立つるには、相互相均しき事實及び論證のみを集大成せざる可からず。かくして其中より系統あり一貫せる真理を採出することを得るなり。

今試みにマーシアルが經濟學研究問題の重なるものとして列擧する所を見るに次の如し。

- 一 近世の社會に於て富の消費、生産分配及び交換産業及貿易の組織卸賣及小賣、外國貿易雇主及雇人の關係を左右する原因は何なりや、是等の運動は如何に働き又た如何に反動するや。其終局の傾向は直接の傾向と如何に異なるや。
- 二 如何なる制限の下に、或物の價格は其に對する願望の尺度たりや。社會の或階級

の富に於ける一定の増加が生ず可き直接の安寧増進の程度如何。一階級の産業能率 Industrial efficiency は其の所得の不十分なるにより如何なる程度まで害せらるゝや。一階級の所得の増加は一度起るの後は、如何なる程度まで其の能率を營利力 Earning power; Erwerbsfähigkeit の増進により之を維持するを得るや。

三 産業自由の影響は如何なる程度まで及ぶや。如何なる他の影響が有力なりや。此等の結合せる作用如何。産業の自由は如何なる程度まで協業及獨占 Combinations and monopolies を作るに預つて力ありや其作用如何。社會各階級は之が爲めに如何なる影響を被るや。税制の轉嫁 Shifting of systems of taxation 如何其が社會に對する負擔如何國家に持來す實收如何。

以上を根本問題として、之より實際上の問題生ず。此は時々國々により夫々異なるものなり。雖も、今歐洲諸國現時の主要なる問題をあげれば凡そ左の如し。

- 一 産業自由の善き影響を増進し、悪しき影響を減ずるには如何にす可きか。富の分配をより多く均分ならしむるを可きすれば、其爲め私有財産制度に如何なる變化を加ふ可きか。富の減少を忍んでも自由企業に制限を加ふ可きや否や、其程度は如何。租税の負擔を社會各階級に如何なる割合を以て分配す可きや。
- 二 分業の現状は果して満足す可きか、人民の大多數が性格を高むる力なき性質の業にのみ従ふこと必要なりや。勞働者の間に高尚なる仕事に對する能力を具ふ可く教育を施すこと可能なりや、殊に勞働者に對し協業による企業を起すを得可き様教育を施し得るや。
- 三 個人的活動と共同的活動との適當なる關係如何。如何なる事業は之を國營又は公營に委ぬ可きや。獨占的性質を帶ぶる業務は如何なる程度まで之を私企業に委ぬ可きや。此點に於て私有財産制度の現状は其儘維持す可きや、將た亦た多少の變化を必要とするや。
- 四 富の使用に關する現時の状態は缺點なきものなるや。國家の干渉却て害ある場合に輿論の制裁を用ゆる道如何。國々國々の經濟上の義務は、一國內個人間の

其に比して如何に異なりや。

新く經濟學の問題は政治的社會的又た個人的生活に關聯すも雖も其最重要なるものは人間の社會生活に關するものなり。換言すれば今日現在に於ける經濟學の實際問題は第一次に於て所謂社會問題の解決に資するものを主要なるものとす。

## 第六章 補論

經濟學研究法に關する著書は殆んぎ無數にして何れの經濟原論にも論及しあらざるはなし。英國學者の作中先づ最も薦む可きは、經濟學の範圍の章に於て、マーシアルも引用したるケーンズの著なり。其の着題左の如し。

Keynes, *The Scope and method of Political Economy*. 2. Ed. London 1897.

之れをケルンズの著

Cairnes, *Character and logical method of political economy*.

と共に讀む可し。次に昔に溯りて最も研究す可きはミルの論理學

Mill, *Logic*. 9. E. 1875.

の第六卷是れなり。是れを前既に引きたるヂルタイの

Dilthey, *Einleitung in die Geisteswissenschaften*. 1883.

と併せ讀む可し。

是れに續いて必ずジエヴォンスを讀む可し。

Jevons, *Studies in deductive logic*. 1880.——*Theory of political economy*. 1891.

次に英國に於て歴史的研究法を主張せるクリップレスリーを缺く可からず。

Cliffe Leslie, *Essays in moral and political philosophy*. 1879. 2. E. 1883.

現在英米に於ける歴史的研究法の最も有力なる唱道者としてアッシュレーの『**歴史的經濟的研究**』(原名前に出づ)亦た讀まざる可からず。

獨逸歴史派の方法論の權威にして學者必讀の書はクニースの左の著なり。

Knies. Politische Oekonomie vom geschichtlichen Standpunkte. 2. A. Braunschweig. 1883.  
シユモラー、メンガー兩氏の論争は載せて左の諸書にあり。

Schmoller, Ueber einige Grundfragen der Sozialpolitik und der Volkswirtschaftslehre. Leipzig 1893.

Schmoller, Zur Literaturgeschichte der Staats- und Sozialwissenschaften. Leipzig 1888.

Menger, Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften und der Politischen Oekonomie insbesondere. 1883.

Menger, Irrtümer des Historismus in der deutschen Nationaloekonomie.

又シユモラーの原論第一卷『經濟學の方法』の章は簡潔にして甚だ要を得たり。

其他ブレンタノ *Klassische Nationaloekonomie*. 1888. ヲグナー原論第一卷第一册五十四節以下は必ず併せ参照す可きものなり。

金井博士社會經濟學(二七一—三〇八頁)は研究法を論ずる詳密丁寧なり。然れども其シユモラーを貶しメンガーを擧ぐるは予の服し難き所なり。其ミルに下せる評論は公平にして所謂應用經濟學に於て歸納法のみに依り、純正經濟學に於ては演繹を専ら

す可しとするの誤なるを論ずる亦甚だ要を得たるものにして、予の推重する所なり。然れども純正應用の別を設けて別々に論を立つるこゝ、伊太利のコツサに似て却て折角の論旨を累する嫌あるもの、如し。河上博士經濟學原論(二六六頁)には追て後卷に述べ可しとして一言するをも惜み、反てクラインヴェヒターの爲に數頁を割愛して、其論旨を盡さしめたれども、元來クラインヴェヒターはコムピラチオン(編集のみを成して自家の説を爲す)こゝ少ければ、博士の親切は其有難迷惑する所なる可し。

河上博士は其經濟學原論に於て言及せざりし各種の問題に就て、頗る有益なる研究を發表し、經濟學の科學としての地位を、其研究法に關し、從來の經濟書に於て聞くを得ざりし深遠の説を提供し、兼ねて予が本章に於ける所論並に其他に於て公けにせる意見を論評せらるゝ、こゝ甚だ詳なり。予が眼に觸れたるもの左の如し。

一 歸納的眞理の價値の大小(國民經濟雜誌七ノ二)

二 眞理の進化(同上七ノ四)

三 經濟學研究法に就て福田博士の教を乞ふ(同上七ノ五)

## 四 學理は凡て假定に立つ(京都法學會雜誌五ノ二)

右等諸論文に於て博士が提出せらるゝ問題は、科學の根本問題に關するものにして、單に經濟學のみに限られたるものにあらず。而して其論は、獨り博士專用のものにあらず、博士と同様なる疑問を懷きて、抑も科學存在の根柢に向て大斧鉞を下さんご欲する學者其數決して尠しご爲さず。されば博士ご予ごは、共に孤立せる論點を維持するものにあらずして、兩者間の異論は、聽て凡ての科學に共通なる大問題に關連するものなり。故に博士ご予ご此等の點に就て如何に論争するも、其決定を見るの望終に存せず、必ず先づ之を世界學問の一般の趨勢の赴く所に鑑みて決着するの外道なきものなり。而して、博士も予も嚴密に云へば、此の資格を缺くものなり。元より經濟學者ご雖も、亦科學の根本問題に就て云爲する權利を有するものなりご雖も、其は經濟學者ごして爲す所にあらず、別に哲學の修養、論理學の研究を十二分に積みたる後に於て、其れによりて得たる知識に基て論辯す可きものなり。然るに、博士ご予ごは經濟學の上に於てこそ共通の地盤を有すれ、哲學論理學の上に於ては、予の如きは僅かにヴントに師事したる外何等の素養なきもの

にして、河上博士ご相共に哲學上の問題を廣識する資格は一も之を有せざるものなり。されば、予は此種討究の専門學者より見れば、一場の兒戯に終る可きを信ずるものにして、今妄りに輕々の言を弄するの勇氣を缺くものなり。故に經濟學其物并に其研究方法に就ては、飽迄博士ご共に討究の事に従ふ可きも、此狹き範圍の外に奔逸するごは全く之を避けんごす。唯博士の懇篤親切に酬ひん爲め、予が所論に向て下されたる批評に就ては、今次に限り一言を敢てし置かんご欲するものなり。

さて、博士が予の所論に對して下されたる評論は、約して左の三點に存するもの、如し。  
(一) 凡ての現象は進化す、此進化する現象に關する眞理も亦進化す。然るに予が絶対的眞理を云々するは誤なり。博士乃ち曰く、『縦ひ如何なる研究法によるも一切の學理は、凡て假定に立つものなり、故に一切の學理は、凡て假理にして眞理に非るなり、故に學者の任務は、畢竟此の假定を改良して益々正確ならしむるの外なく、従つて又た科學の進歩ごは、所詮迷信の發達を指すに過ぎざるものなり、然らば畢竟如何にするも吾人は、到底絶対的眞理を悟了するに由なきか、答へて曰く、然り、科學の範圍に於ては吾人は、到

底之を悟了するに術なきなり』と。

今右に對し先づ博士に問ひ度きは、博士の所謂科學は哲學を含むものなりや否や、博士が眞理は科學以外に於て得可しと云ふは、哲學に於て之を求め得可しとの意か、又は宗教に於てす可しとの意か、近來博士の文禪家の語調を藉るもの多きに徴すれば、博士は或は所謂『悟』の中に眞理求め得可しと爲すこと、近重博士の『禪學論』に説く所に同ずるものなりや、博士が予の絶対的眞理と云へるものを否定せらるゝこと、若し此意に於けるものなりとすれば、予も亦博士と略同様の見解を有するものなるを告白せざるを得ざるなり。然れども、斯くの如きは、博士も云ふ如く、科學者としての議論の範圍を脱するものなれば、予は茲に論及するを避け、單に科學、殊には經濟學研究者としての予の管見を述べんに、既に『現象は進化す』『現象に關する眞理は進化す』と博士の云へるもの、即ち科學に絶対普遍なる這箇の眞理を認容するものにして、然る以上此眞理に基きたる科學的知識は、亦其れと同じき意味に於ては、普遍絶対なる可きなり。然らざれば『現象は進化す』『現象の眞理は進化す』と云ふこと、其自ら絶対普遍の眞理ならずして、博士が此根基きを得んや。

の上に立ちて爲せる一切の議論は、皆假定論たるに終り、之を以て他を評議すること無用の詮議たるに止まらん。言詮も及ばず、棟樑を嫌ふを以て絶対の眞理と爲せば『進化す』と云ひ『進化せず』と云ふ、既に絶対の理に非ず、普通の論に非ず、今言を切にして之を云へば『學理は假定に立つ』てふ博士の『ポスチュラート』も亦假定に立つものなるなきを得んや。

普通の眞理と云ひ絶対の眞理と云ふは、所謂科學的研究法を用ゆる科學の上に就て云ふに過ぎず。而して其は言詮を容るゝの意に於て、假定の上に立つと云ふ或は不可ならず。『心』を假定する眞理學あれば『勢力不滅』を假定する物理學ありと云ふ意に於て、一切の經濟學は亦假定の上に立つと云ふ不可ならじ。即ち『現象は進化す』『眞理は進化す』との假定の上に立てたる博士の議論を以て、經濟學より延て一切の社會科學、否凡ての科學の性質を議定するとの差支なきが如し。然れば予が普通の眞理と云ひ、絶対の眞理と云ふもの、凡てが假定の上に立つものなりとの博士の評言は、予は謹受するものなり。予は此點に就て博士と論辯せんとするものにあらず。而して予が『經濟學研究』



に於て絶對的眞理を云へる、亦此意に於てせるものに非ざることは辯明の要なからん。

予は唯他の凡ての科學に於けるは同一の意味にての普遍的眞理、絶對的眞理の我經濟學に於ても亦求め得可く、否求めざる可からざるものなるを云へるに過ぎざるなり。即ち

『時處に從て、其原理原則を二三にす可きものにあらず、不偏不黨各種の利害を消長の上に超然として克く客觀的の理法を示す可きもの、謂なり、彼の主觀的の理想を判斷さによりて、一は一非し、其代表する利害の如何によりて、左支右梧す可きものにあらざるなり』經濟學研究 五七三頁 云へるは、此意味を言ふに外ならず。而して予は『我經濟學は今日

も雖も未だ完全なる意味に於ては、此くの如き程度に達したるものに非ず』同上書 五七四頁 信ずるなり。唯學者勉強して一日も早く此狀態に到らしむる可ものと思惟す。然るに博士は如此は到底達し得られざる空想迷信なりと嘲笑せり。ピラトは『眞理は何ぞや』と基督に問へり。基督黙して答へず。眞理は之れを求むるもの、み之を得可く、ピラトに向て百萬言するも、必竟無用なりと基督の思惟したるは、微笑を洩せる迦葉に傳へて、博詞宏辯の阿難終に此一大事を承けずとせむると同じからん。予は自ら終生勉強して、

猶且つ之を得ずとするも、眞理は之を求むるもの、終に得可き所なるを確信して疑はず。博士と予と此點に於て或は其立つ所を異にする者ならん。然れば百の陳辯、必竟人を煩はすに過ぎず。河上博士の如くせば到底は一切の科學の存在を否定すること、ならざるを得ば幸のみ。然れども博士も亦『眞理は進化す』『現象は進化す』この信條を立つる以上、否定せんとして否定し盡す能はざるものあるに非ざるか。然らば異日同所に落ち來るの望全く之なきには非らず、予は忍耐して其日の來るを待たんのみ。氏或は云はん『現象は進化す』と云ふ、元より絶對的眞理に非ず。然らば絶對的ならざる此眞理を提げて絶對的なる眞理の有無を論究すると如何にして可能なりや予は惑なき能はず。

予は以上舊版に記し置きたる處を殆ど其儘保存したり、ざり乍ら、今(天正十三年七月)校訂に際して翻て河上博士の諸文を商量するに及び、予が右答辯を草したるは、き未だ我經濟學の問題となり居らざりし一大時弊に對し、博士は其獨特の第六感によつて、豫め痛棒を下し置かれたるかの感を禁する能はず。一大時弊とは、學問殊に哲學萬能の臆説の

流行是れなり。カントの哲學上に功績の偉大なるこゝは、予等の管々しく云ふを待たざる所なれども、近來カントの虎威を藉りて、耳食の徒切りにアプリオリの絶対權威を以て一切の實證科學の根柢を破壊し去らんとするものあり。ロツシアーが嘗つて、經濟學は哲學的方法の爲めに大なる誤謬に陥れり、絶叫して騒起し、歴史的方法の重んず可きを、野に叫ぶ人として提説したるは、既に七八十年の昔にあり。吾人は今日の一知半解の哲學萬能論、エピゴーネンによつて誤傳せられたるカント哲學濫用の流行に對して、轉たロツシアー當年の感慨を追懷せざる能はず。實證科學は勿論のこゝ、哲學も亦た河上博士の云はるゝ如く、凡て假定に立つものにして、博士の言を藉りて云へば、其の絶対普遍妥當のアプリオリなるものも、亦必竟は假理にして眞理にあらず、哲學の進歩は所詮迷信の發達を指すに過ぎず。博士の言を更らに借れば、畢竟如何にするも吾人は到底絶対の眞理を悟了するに由なきか、答へて曰く、然り、科學、哲學の範圍に於ては、吾人は到底之れを悟了するに術なきなり。然るを、哲學のみ獨り絶対の眞理を教ゆるもの、如くに主張する一部耳食の徒に對しては、河上博士の此言は、さながら萬斛の冷水を極熱頭に注ぐの慨

なくんばあらず。

英國の大學者フレーザーは、三十年苦心の大著述「黄金の枝」十二卷を完成し而して其最終に於て自己の業績を、自己の研究の題目を總括して實に左の如く云へり。

Yet the history of thought should warn us against concluding that because the scientific theory of the world is the best that has yet been formulated, it is necessarily complete and final. We must remember that at bottom the generalisations of science or, in common parlance, the laws of nature are merely hypotheses devised to explain that ever shifting phantasmagoria of thought which we dignify with the high-sounding names of the world and the universe. In the last analysis magic, religion, and science are nothing but theories of thought; and as science has supplanted its predecessors, so it may hereafter be itself superseded by some more perfect hypothesis, perhaps by some totally different way of looking at the phenomena——of registering the shadows on the screen——of which we in this generation can form no idea. The advance of knowledge is an infinite progression towards a goal that for ever recedes. The Golden Bough. Ab. Ed. 1923. pp. 712—3.

『乍去、思想の歴史は吾人に戒めて、世界に關する學問的理論が今迄形つくられたるもの

の中最善のものなりとて、之を以て、必然的に完全にして最終なるものと爲す可からざることを以てす。吾人は記憶せざる可からず、必竟する所、學問の概括又は、普通の用語を藉れば、自然の法則なるものは、吾人が、世界と云ひ、宇宙と稱する尊稱を以て權威付くる所の、思想の常に交代して息まざる幻燈を説明す可く案出せられたる單なる假定に過ぎざることを。結局に於いて、魔術、宗教及學問は、單に思想の諸理論に外ならざるものにして、恰かも學問が、其先輩（魔術及宗教を云ふ）に代位したりし如くに、學問其ものは、又他日、或るより完全なる假定、恐らく吾人が現代に於て夢想だもし得ざる或る全然異りたる現象考察の方法——即ち幕に映する影を記録する方法——によつて驅逐せらるゝことあり得可きなり。知識の進歩とは、絶えず後退する標的へ向つての無限なる前進の謂なり。

『黄金の枝』、節約版 七一—三頁

此の謙遜にして篤實なる態度を持たればこそ、プレーザーは彼が如くの大なる業績を擧ぐるを得たるなり。此れをアプリアオリ哲學の武威を藉りて、傲然として他に臨み、節を屈して異説を聴くことを恥とする耳食學者の態度に比す、其差千里も管ならず。

\* \* \* \* \*

二）演繹歸納學派の別は畢竟程度の問題なりとの予の論は誤れり云ふこと、

河上博士の此點の評論は終始抽象的にして、經濟學史の史實を全く無視す。氏は食事の例を抜き來りて、順序の一問題なり云々と言はれたれども、其は演繹歸納兩論法の性質論なり。予は論理學上の這箇の問題を論ぜるにあらず、主として英國及び獨逸の經濟學史上の沿革に於て、所謂演繹學派歸納學派の論争は、必竟程度の問題に過ぎず云へるにて、事實に基きて立論したるに過ぎず。經濟學史の實際に徴するときは、河上博士の云ふ如く、常に凡ての題目に就て先づ演繹論法を用ゐ、歸納論法は必ず第二段に於てのみ使用したる（使用す可しと主張したるの意にあらず）學者なく、又其反對に歸納論法を常に始めに用ゐる演繹論法は其後に於てのみ用ゐたる學者亦之れなし。リカルドも、其生産論に於ける、交換論に於ける、分配論に於ける、順序同一ならず、又各論中の各頭目に關する研究法夫々に異れり。されば河上博士の云ふ如く、常に『スロープ』より始めて珈琲を最終に喫するが如きものは、經濟學の全般に於ては絶へて存することなきなり。若し河上博士の如く、經濟學の一切に就て、スロープより始むるものを演繹學派とし、珈琲より

始むるものを歸納學派云はんことをするならば經濟學には演繹學派も歸納學派も共に存せざるなり。之に反し經濟學史の實際の事實に於ては、此兩學派は肉を多く喰はんことをするもの、パンを多く喫せんことをするものがあるが如く、演繹論法を多く用ひんことをする者を演繹學派とし、歸納論法を多く用ひんことをするものを歸納學派とし、肉を多く喰ふ者亦必ずするもの必ずしも先づ肉を喰ひ、終りにパンを喫すことを云ふ可からず、パンを喰ふ者亦必ずしも其食事を始むるにパンよりすことを云ふ可からざるが如きなり。河上博士の如く云へば、パンを多く食するもの、雖も、食事の始めに肉を取り、次でパンに及ぶものは、之を目して肉食者、爲さざるを得ざることならん。此理ある可からず。予は抽象的に兩派の本質を論ぜざるものにあらず、經濟學史の實際に於て演繹學派を稱し、歸納學派を稱せるもの、爲す所を見て、兩者の差は必竟程度の問題たるに過ぎずことを云へるものにして、河上博士の批評は、全く標的とする所を異にせるもの、予は今に於て、猶曩に本書に於て説きたる所を改むる可き所以を見る能はざるものなり。

(三) 歴史は文學なり、而して經濟史は科學たる經濟學の補助要具なり。然るに予が之を科學たる經濟學の一部門とせざるは誤なりことを云ふこと。

予が經濟史を以て經濟學の補助科學なりとする見解を取らざること、本文中に論述し置ける所なり。經濟史は其自らに於て、所謂發展の法則の發見を勉むるものにして、單に記述を事とするのみにあらず。世上或は歴史哲學なる者を以て、歴史の上に立つ可き科學なりとし、史學は飽まで單に記述を主眼とする程度の學なりとする學者なきにあらず。史學發達の現状に於ては、或は然るが如きものあらん。然れども予は史學其ものも亦一の獨立せる科學たり得るもの、たらしめざる可からざるものなりと思惟するものにして、歴史哲學と云ふことに對して、未だ多大の信仰を捧げ得ざるものなり。而して經濟史は其自らに於て經濟現象發展の法則を見出すを目的とする科學なり。若し單に記述に限ることするときは、古今東西に涉りて、普く一切の現象を記述するが如きは、到底人間の爲し能ふ所にあらず、其記述は、必竟史的發展の理法を闡明するに必要なる程度に止まるものならざるを得ず。此意に於ては、經濟史も多く假定の上に立つことの非難を被ること亦已むを得可からず。

以上單に河上博士の論評に對する答辯の一端に過ぎず。若しそれ更らに深く根柢に溯りて立論せんことを欲せば、此種論争は單に斷片的の論文若くは著書の附録に於てす可きものにあらざ、別に特殊の研究を總括する一書を作さざる可からず、此事或は遠き將來に期し得可しとするも、今は其時に非ず。予は右述べたる管見に基きて先づ經濟學其もの進歩發達を期し、斯學の學理の討究に潛心する外なく、途上の奔命に疲れて予が業の終に半成に了らんことを常に自ら戒めて爲さざる所なり。幸に河上博士の諒察を乞ふ。

猶同博士の『學者政策を論ずるの權威ありや』なる論文に付ては、本章本文に於て卑見を盡しあり、參照を乞ふ。予は學者としては政策を論ずる權威なしを確信する。今大正十三年七月、猶昨に渝らず。(本書舊版には右の外更らに河上博士の因果理法云々の論に關する答辯を載せたり。此點拙答誤あり、仍て今省きて載せず)。

### 經濟學上の法則

改定經濟學講義第一卷第三章を收録す。故に前段と重複の點若干あり。

學問の要は其對象の何たるを論ぜず一貫統一の理法を發見するにあり、凡て此の目的の爲めに普く事實を蒐集し、之を適當の順序に排列し、之を解釋説明し、之より終に一貫の理法の推斷に及ぼす可きなり。シュモラー Schmolter, Grundriss der allgemeinen Volkswirtschaftslehre. T. I. SS. 101-112. が觀察記述定義分類の四を以て、經濟學研究の準備過程なり。こ云へるは即ち此意に外ならずして、マーシアルも亦た同ざる所なり。シュモラーは其意を布演して曰く、經濟學の研究に三個の不可缺過程あり、一は事實を汎く觀察し、之を正しく記述す、二は之に基いて定義し分類して、洩らす所なく、謬なき概念を構成す、三は之より平準を見出し、其原因を究めて終に因果的結論に到達す。此等の事業たる何れも必要不可缺研究の過程にして、三者其何れを缺くも完全を期する。こ能はざるもの。こす。

然り然りも雖も吾人研究最終の到達點は一貫理法の發見にあり、他の過程は此目的を達する手段たり方法たること決して忘る可からず。苟くも此の目的を到達するに必要なものは、演繹論理たること歸納論理たることを問はず、均しく採用す可きなり。従つて經濟學にのみ特有なる研究方法あることなく、吾人は凡ての科學に共通なる研究方法に従ふの外なきものこそす。然りも雖も吾人研究の問題の異なるに従ひ、事實の考證に重きを置く可き場合あり、又は反對に事實相互間の關係の推究に主力を注ぐ可き場合あり、必ずしも千篇一律なるを得ず。

從來經濟學に於ては、研究法に關する論争甚だ盛んにして學者各々區々の見解を持して下らず、甲論乙駁殆んど底止する所を知らざるの觀あり、局外者をして適從する所を得るに苦しめたり。人或は直ちに此の事實を捉へて、必竟經濟學は未だ一科の獨立科學たる資格なしと苦言する者あり。而して經濟學者自ら其半生の心血を絞りて只管に研究法の論争に従事し、却つて本來の研究其ものを忽かせにするもの亦た尠からず。所謂學派云ふものも、多くは經濟上の學理其ものに就て見解を異にするより起るにあら

ず、單に研究法の異同に基きて離合集散するものなるやの觀あり。是れ或度までは學問發達の道行上免る可からざる一の階段にして、論難紛争の間亦一條の光明の自ら認む可きあり。經濟學の現状は未だ此の過渡時代を脱却し了らざるものなり、雖も今日に於て最も進歩せる學者の間には自ら相一致し相認承する點の定まるあり、また曩日の混沌たる状態も同一視す可きにあらず。固より國を異にし人を異にするにより趣向必ずしも同一轍に出づるを得ざるも、此等の小異によりて左右せられざる大同の傾向の存すること復た否定すべからざるに至れり。

凡ての科學中進歩の最も著しきものは精密科學 Exact science; exakte Wissenschaft にして、自然科學 Natural science; Naturwissenschaft は多く之に屬せり、雖も自然科學は今日に於て何れも皆完全なる意味の精密科學たる状態に在りと思ふは非なり。然れども凡そ科學たる以上は自然科學たること人文科學 Kulturwissenschaft (Ricker) たることを問はず、何れも精密科學たらんことを期するもの、期せざる可からざるものなり。精密科學たらんには、多數の觀察材料を一定の記述 Statement の下に置くを得るものならざる可からず。此の

一定の記述は、屢々他の現象、他の事實を以て吟味するにより愈々確められて、或度までは之に基いて未然の出來事を豫測し得るに至る可く、かくて茲に科學上の法則 *Scientific Laws*, *wissenschaftliche Gesetze* なるものを生ず。されば學問の進歩は、詮ずる所、此等法則の數を増加し、其精密の度を加ふることに存す可きなり。一度得たる法則は、之を吟味するに愈々嚴密なる考査を以てし、其範圍を擴張し、其結果、適用の範圍狭小なる小法則は漸くに廢れ、其範圍の廣き大法則之に代るに至りて、科學の資格は完全なるを得るなり。此程度に達するときは、吾人は法則の運用によりて權威ある豫測を未然將來に關して下し得可きなり。研究者の數加はれば加はる程、各種の方面に涉りて既存法則を精密に吟味するに多く行はれ、又た新なる法則の見出さるゝに至り、後代の學者は能く前代學者の研究の結果を利用し得、必らずしも自ら初より研究に着手するに及ばず、前人の研究終る所より研究を繼續して、常に何物かを新たに附加し得るなり。經濟學の現状は未だ此程度に達し居らず、雖も其期する所は此の種科學の列に入らん可きなり。經濟學の測定は十分に精密なるを得ず、又た最終確定のものならず、雖も學者の努力は精

密の度を増し法則適用の範圍を擴張しつゝあり。

凡そ與へられたる原因は之を妨ぐる事情なき限り一定の結果を招致す。此兩者の關係を言表はすもの即ち法則なり。科學上の法則中引力の法則 *Law of gravitation* の如きは最も精密にして、之を疑ふ可き餘地毫も存せざるが如し。然れども實際の自然界の出來事にして、引力の法則のみの支配を受くるもの一も之れあらず、何れも之を妨げ之れを支ふる事情あり。凡ての物は地に落つ可き云ふも、空氣よりも輕き瓦斯は、却つて反對に浮揚す。されば精密一點の疑を容れざる引力の法則、雖も要するに、一定の傾向の記述 *Statement of tendencies* にして、實際起る現象を其儘に言表はすものにあらず。然れども數學者は此法則に基きて種々の計算を立て、其計算は寸分の差なく之を凡ての場合に適用して戻らず謬らざるなり。經濟上の法則は決して斯くの如き精密を有する法則にあらず、然れども自然現象の法則、雖も引力の法則の如き精密を有せざるもの多々ありて、經濟上の法則に相似たり。マシーナルは潮の高低を以て之に比し、經濟上の法則は星學の法則よりも潮の高低に關する法則に近し可き云ひ、又た生物學上の法則 *Biological Laws* に似

たりとも云へり。

從來經濟學に於て法則を稱せらるゝもの其數尠からず。然れども其法則なるものに關して學者の所論一致するもの寧ろ少く、抑も法則なるもの經濟學にある可きや否やは重大なる宿題として、今日未だ十分なる解決を見ず。殊に歴史學派は法則なるものに對して重大なる疑ひを抱き、或は其存在を全然否定するものあり。是れ法則なる文字の意味を解するここ人に依つて異なるより起る所にして、法則ありと主張するものと、法則なしと主張するものと其説く所の内容必ずしも異なるにあらず、所詮は名稱の争ひに過ぎざる場合少しとせず。

法則を云ふに凡そ四の意義あり。一は慣習上行爲の常規 *Gewohnheitsgesetze* の意にして、英語にて *law of conduct* を云ふ、如何の場合には人は如何の行爲をなすを當然とすこと云ふことを一定の形に於て言ひ表す、其最も整へるは商慣習民事慣習等之れなり。二は法律 *Rechtsgesetze* の意にして公けの制裁の下に定めたる人間行爲の拘束なり。三は道德律 *Moralgesetze* の意にして人は斯く爲す可きものなりとの命令、獨逸語にて所謂『サイン

ズレン』のこゝなり。四は因果理法又は一貫關係の傾向記述 *Statement of tendencies* の意にして、此の原因あれば彼の結果ありと云ふことを定式的に言表はすこと之れなり。經濟上にて云ふ法則は、第一第二第三の意味に於てするものにあらず、第四の一貫關係の傾向記述のこゝなり。如何の場合に何を爲す可きやを定むるは慣習上の法則なり、權利義務の關係を定め之に公けの制裁を附するものは法律なり、何は善事なり爲すべし何は惡事なり爲す可からずと教ふるは、道德律なり。經濟上の法則は、此等と異り如何なる原因あるとき如何なる結果生ずるや、之れに他の原因加はるときは如何なる作用起るや等、事實との關係を述ぶるに過ぎず、此く爲す可し此くするは善事なり等の命令、教訓を與ふるものにあらず。所謂經濟政策上の法則も、亦直ちに人間の行爲に準律を下すにあらず、政策上に於ける施設と作用とに就て、一定の關係を説明せんとするものなり。此一貫關係の理に基きて、行爲の標準を立て、實際政策の方針を劃し、法律を制定し、又は道德上是非の判斷を下すは政治家なり實際家なりの爲す所にして、法則の關する所にあらず、經濟學者が學者として與る所にあらず。然れども法則を云ふも引力の法則、勢力不滅の法



則 Law of the conservation of energy の如きものに非ず。故に學者或は經濟上の法則は moral law (道徳的因果律) なり云ふ其意命令教訓を含む道徳律の謂にあらず、道徳的存在たる人間動機の働きに關する法則の義なり。獨逸の學者は又之を経験律 Erfahrungsgesetz; empirisches Gesetz 又は歴史律 historisches Gesetz 發展律 Entwicklungsgesetz 等云ひ英國に於ける歴史派の代表者たるアッシュレー Ashley, English Economic History. I, i. 1894. Preface XII は Law of social development 史的發展律なる語を用ゆ。經濟學現時の要求としては歴史律又は史的發展律の發見は最も重要なり、雖も經濟史研究の未だ幼稚なる之より歴史律を打立て得るには材料甚だ闕如たり。從來の正統學派が經濟上の法則を以て第一義に於ける自然法則即ち引力の法則勢力不滅の法則等、全然同一種のものとしたるは當を得ず。歴史學派起りて其誤謬を指摘し、主として史的發展律の意に於ける法則に重きを置き、又た人間動機の作用の大なるを明らかにする爲め道徳界の自然法則云ふ意味にて moral law なり、唱道し、更らに近來之れを目的律 teleologische Gesetze と稱する者あり。何れも夫々相當根據を有する主張なり。

法則とは精密確定の度に夫々の差違ある傾向の記述、一般的前提の謂に外ならず。故に何れの學問に於ても此意味の法則存せざるこなし。然れども一般的傾向の言表はしは直ちに悉く法則たるに非ず。吾人は其中法則の名を下す可きもの、然らざるものを分別せざる可からず、其分別の標準は一に科學的要求にのみ基く可し、斷じて實際上政策上の考慮を加味す可からず。又た一部の獨斷臆説を執て他を排す可きものにもあらず。(此點に於て吾人は、一部學者のアプリオリ論に賛同するこを得ず)。

今定義を下さんならば社會上の法則とは社會的傾向の記述、即ち一定の條件の下に一定の社會團體の部員に就て期待す可き一定行爲の記述なり、云ふ可く、經濟上の法則とは經濟的傾向の記述、即ち社會的傾向の中、其主たる動機の強さを貨幣價值を以て稱量し得る行爲に關するもの、記述なり、謂ひ得可きなり。されば經濟上の法則、然らざる社會法則との間の區別は、截然分界せられ得可きものにあらず、貨幣價值を以て測定し得る動機のみに關する社會法則、貨幣價值の測定を全然許さざる動機に關する社會法則との兩極端の間には、不斷多數の中間現象あり。何れの點に於て一端終り他の一端始

まるやを確知するこゝ容易ならず。

法則に準據する現象を法則的或は規範的現象 Normal phenomenon と云ひ然る行爲を法則的或は規範的行爲 normal action と云ふ。經濟學に於ては此等法則的現象法則的行爲を論ずる場合甚だ多し。其意味は一定の條件の下に、一定の經濟社會の部員に就て期待し得可き、一定の行爲行程と云ふこゝにして、其條件の變じ其屬する經濟社會異れば其行爲行程の同じからざる可きは勿論なり。具體的條件と社會狀態とを離れて法則行爲を論ずるは無意味にして誤謬なり。今日經濟學にて云ふ法則的行爲とは、今日の文明國に於て殊に産業の自由私有財産交換及分業 Economic freedom, private property, exchange and division of labour の發達せる社會に於て行はるゝ所を云ふものにして、此前提の具備せざる社會に就ては必ずしも其儘に適用し得可からず。此點阪西教授の論推服す可し。近刊神戸高六頁所載『價格生活 商開校二十周年紀念講演及論文集六九―九の理論』を見よ。普通今日の産業社會の常態を自由競争の社會と云ふ、然れども法則的行爲の中には、自由競争の前提の下に行はるゝものあり、此の前提なくして行はるゝものあり。然るを法則的經濟行爲と云へば、必ず自由競争の前提の下に立つものとの解釋

するは誤なり。又經濟上の法則には、寸毫も善惡是非の判斷を含まざるものなれば、法則的行爲と云ふも決して道徳上正しき行爲の謂にあらず。言換れば法則的行爲と云ふは、人は其行爲を爲す可きものなり、又は其行爲を爲すを正しとすこの意を寸毫も含まず、斯く斯くの條件の下には、斯く爲す傾向を有するものなりこの意を表はすに止まる。故に學者或は難じて曰く、經濟上の法則は凡て假定的 Hypothetical なり、法則的行爲と云ふも皆假定的行爲なりと。然れども其意味にては、凡ての科學は皆假定の上に立ち、凡ての科學上の法則は假定的なり、絶對的法則なるものある可からず、何れも一定の條件の下に於てのみ行はれ得るに止まるものなるを知らざる可からず。殊に社會科學にありては『他に妨ぐる事情なきとき』又は『他の事を凡て同一なりと推定して』 Ceteris paribus; other things being equal と云ふこゝの常に相伴ふものなり。經濟學に於ては此事殊に必要にして、學者は常に此事を繰返し聞く者をして常に此推定の伴ふものなるを忘れしむ可からず。所謂正統學派演繹學派 Deductive school の誤の多くは、此事を繰返すを煩しこして省略に従ひしより起れり。殊にリカルドに至つて然りとす。然り而して與へらるゝ條件

は絶えず變遷し、經濟現象の起る社會状態は常に進化して已まず、されば一時に於て法則的行爲たりしもの他時に至りては其資格を失ふもの尠しとせず、各時代は夫々に特有なる經濟問題を有し、各文明國は夫々に固有なる經濟現象を有す。經濟學は此等問題此等現象の異なるに従ひ、殊に其進化發展に伴ひ、其學理を之に適應し行くものにして、今日英國を中心とする歐米文明國に著く行はるゝ、經濟學説は英國が經濟上の優勢を占めたる過程に伴ひて漸次に開展して今日に至れるものにして、此状態の變ずるに従ひ、學説も亦た變化するこゝを免れず。吾人は勉めて研究の範圍を廣くし、材料の蒐集を大にして、可成凡ての状態、凡ての事情に通じて適用し得らる可き法則の發見を期せざる可からず。經濟學の現状は未だ此の要求に副はざるもの多々あり、然り、雖も吾人の將來に期する所は實に我學をして此状態に到達せしむるにありとす。

## 總論 附錄

### 經濟學研究の葉

凡そ一科の學問を研究するに多讀と精讀と二の道ある可く、其孰れを執る可きかは、人の天稟の同じからざる事情を等くせざる、并に目的の一ならざるによりて一様に答ふるこゝ能はず。唯予一個の從來の經驗を語りて學者の参照に供せんに、概して多讀よりは精讀の方益多きが如く、殊に自己が滿腔の尊敬と同情とを傾注するを得可き或一家の書を取りて熱讀玩味し、其文字以外の精神を捉ふるこゝに勉むるを以て學者第一の業とす。決して第二流以下のものを選ぶ可からず、書名の如何、出版年月の新舊は暫らく之を措き、第一流の學者の第一流の書のみを讀む可く、唯だ此くの如きものを缺く時始めて第二流以下に下る可し。單に書名の嶄新なるも、目次の體裁の整へるも、出版年月の新らしきも

を喜びて著者の誰なるかを問はざるは、初學の通弊なり。雖も此くの如きは、學問の進歩に害ありて益なし。學問に流行を競ふ可からず、研究に追従を事とする勿れ。今先づ此意を以て經濟學の研究に従事せんことを讀む可き斯學現今の最も進歩せる立場を代表する學者の書を求むるに、其數多からず。予は其書としてマーシャルの大著（原文を解せざる人は大塚教授の邦譯、大正八年四月刊行「マーシャル經濟學原理」を見る可し）を躊躇なく凡ての人に薦めんことを。原題及版次左の如し。

Marshall, Principles of Economics. An introductory Volume. I. Edition 1890.—2 Ed. 1891.—3. Ed. 1895.—4. Ed. 1898.—5. Ed. 1907.—6. Ed. 1910.—7. Ed. 1916.—8. Ed. 1920.

唯此著を初學の用に供するには左の點に注意を怠る可からず。

- 一 氏の文體動もすれば冗長に流れ、其要領を捉へ難きこと屢々あること。されば初學の士之れを讀む時は、一切他の雜念を去り、一意全心精力を集中するを要すること。
- 二 氏は反對論に對しても決して疾呼して其非を鳴さず、諄々として之を自己の立場と對照するを倦まざること。されば讀む者間々氏の定論の那邊に存するかを看極

#### め難きこと

三 氏は大體に於て從來の英國學者、殊にジョン・スチュアート・ミルの立場を守持するに勉むること。氏は獨逸の學者の所論は元より佛伊奧國學者の研究に精通すれども、可成新奇の觀を避けんことに意を用ゐ、新らしき學說を古き説明法を以て包むる力を盡したること。されば、之を獨逸學者の論と對照すれば、外觀甚だ異なる所あるが如くなれど、其實は獨逸學者に更らに一步を進めたる新說も亦尠からざること。従て讀む者眼界を廣く保ち、頭腦を緊張するにあらざれば、實の山に入りて手を空くして歸るの虞あること。

是れなり。猶右書の續篇として、其後刊行せられたるものは左の二書にして、恐らく之を以てマ氏の大著は事實上完結せるものなる可し。果して本書校訂中、氏は八十餘歳の高齡を以て、終に易筆したり。第一にあげたる『産業と貿易』は邦譯書既に市に上れり。

Marshall, Industry and trade: a study of industrial technique and business organization, and of their influences on the conditions of various classes and nations. 1919. 1920.

Marshall, Money, credit and commerce. 1923.

次に薦む可きはシュモラーの新著なり。原題左の如し。

Schmoller, Grundriss der allgemeinen Volkswirtschaftslehre. I. Teil 11-12 Tausend. Ergaenzt und vermehrt. 1919. .... 2 Teil 7-12 Tausend Ergaenzt und vermehrt. 1919.

氏は最も新らしき立場を代表するこゝ勿論にして、殊に其書の編次從來の何れの書とも異なりて、全然新案に成れり。然れども一見して甚だ新奇なるものも詳かに其内容を吟味すれば、必ずしも然らず。氏の著の最も勝れたるは、其歴史的叙述に係る部分にして、其最も劣れるは演理的部分なり。此點に於ては長短をマーシアルの著と正反對にするもの云ふ可くして、兩々相補ふに最も可なり。或學者がシュモラーの新著を評して「經濟學の存在を否定する最も有力なる書」を痛言したるは、此意を極端に表はしたるに過ぎず。されば、マーシアルの書と同じく、初學の士直下に之を取りて讀むは可ならず、明眼の師家を得て授述を待つ可きものとす。

次に予は國別に從ひ其國學者の著述せる經濟原論の書の重要なるものを紹介す可し。

獨逸學者の手に成るもの

フキリツボヰキツチ經濟原論

Philippovich, Grundriss der Politischen Oekonomie. I. Bd. Allgemeine Volkswirtschaftslehre. 14. Aufl. 34-39. Tausend. 1919.

此書は屢々版を改めて最新事實を最新學説を網羅するこゝ甚だ懇切なり。氣質勸重氏の譯本は未だ完璧を云ふ可きにはあらざる可し。雖も獨語を解せざる人の爲めには甚だ歓迎す可きものにして、文辭暢達編次整備邦譯經濟書中有數のものとす。但し原書新版の改訂に從つて、校訂の必要あり。

ワグナー理論社會經濟學

Wagner, Theoretische Sozialökonomik, oder allgemeine und theoretische Volkswirtschaftslehre, Grundriss thunlichst in prinzipieller Behandlungsweise. 2 Bde. 1907 u. 1909.

伯林大學の學生に講義參考用として從來私刷配布したりしものを増訂し、始めて一書として公けにしたるものにして、同氏の大著經濟原論(原名前に出づ)を讀む手引を爲す

に便あり。千九百九年第二巻出でて全部完結せり。或は簡潔摘要の點に於ては此れ彼に勝るものあらん。氏の經濟原論は大著述にして、シユモラーの書出づるまでは斯學第一の書とまで云はれたるものなれども、編次繁雜、定義分類の形態に力を傾け過ぎて、内容之れに副はず、初學者の讀むには適せず。氏を評して「プログラム倒れ」云ふものあるは氏の學風の純獨逸學究的なるを嘲りたるものなる可し。然れども今日に於ても、猶ほ甚だ敬重す可き一代の巨作なるこゝは、人の普く認めて渝らざる所なり。

コーン經濟原論(原名前に出づ)

文字簡潔清楚、シユモラーの絢爛、ワグナーの綿密なるを相對して、特色を發揮す。其の行はるゝこゝ割合に狭きは、教科書向きならざるが爲めなる可く、又材料の豊富の點に於て遠くフキリツボヰキツチに及ばざる故もある可し。雖も試験用體裁用以外唯だ學問の樂に浴せんが爲め、經濟書一二冊を讀まん程の心掛を以てする人には、獨逸書中にては、最も薦むるに適せるものなり。是れコーンの學風、身は獨逸學者にてあり乍ら英國學者に私淑する所甚だ多きが爲なる可し。予は此書を愛讀する者なり。

コーンの著と同様の意味にて推薦し得可く、而も其れに比すれば遙かに多く新研究を含み、更らに理論の方面に於いて勝れるものは左の書なり。

Lexis, Allgemeine Volkswirtschaftslehre. (Die Kultur der Gegenwart: ihre Entwicklung und ihre Ziele, herausgegeben von Paul Hinreberg Teil II Bd. 16.) 2. Auflage 1913. Later edition unchanged.

此書はコーンの書に較ぶれば、聊か難解の感なきにあらず。其は著者の文體極めて簡潔にして、豊富なる學理を僅かの紙數に滿載したるが爲なり。されば、此書を讀むものは、藥精を水に解く如き心得を以て、十分に自己の思考力を働かせつゝ、讀み行くときは啓發する所甚だ大なる可し。

右書は趣を異にすれども、簡潔の文を以て、精緻該博なる組織を披瀝したるものに左の一書あり。殊にマルクス評論の節の如きは、僅少の文字を以て、雄勁なる批評を試みたるものなり。此書人の之を論ずるもの妙きが爲め、其價值十分に認められざるは、甚だ惜む可きこゝなり。是れ一には、著者が名聞を好まざる篤學の人たるが爲なる可し。予は此人の此著を顯はすの義務あるを痛感するものなり。

Platter, Grundlehren der Nationalökonomie. Kritische Einführung in die soziale Wirtschaftswissenschaft. 1903.

右三書は、正反對に博詞宏辯、一切の問題に涉りて、娓娓として説いて盡きず、而もフキリツボヰキツチの如く、主として他人の説を蒐むるのみを以て事せず、自家の研究を経、として、他人の研究を緯とし、縦横に論究して、殆んご餘蘊なきものは、左の書なり。

Pesch, Lehrbuch der Nationalökonomie. 5 Bde. 1909-1923.

通計五卷より成り、第五卷は極めて最近に刊行せられ、殆んご十五ヶ年を経て大成したるものなり。行文は平易なれば、通讀難事ならず。著者はエズウキツトの僧徒にして、其の立場より經濟生活を研究したる爲め、教外のものに取りては、往々興味を感ぜしめざる論述もあれども、其論必ずしも狹隘なる教理に囚はれざるが故、敢て障礙となるまでのことならず。否、時には、尋常經濟學者より聞く能はざる獨得の觀察を知るところを得、我等の狭き専門臭を打破するの妙用もあり。

極めて簡單なれども、要領をあげて殆んご漏す所なき書は Fuchs, Volkswirtschaftslehre.

なり。其の甚だ汎く行はるゝは誠に當然なり。予は『國民經濟原論』本集後段収録すに於て、其梗概を祖述し置きたり。

其他コンラッドの Grundriss zum Studium der politischen Ökonomie クラインヴェヒターの Lehrbuch der Nationalökonomie あり、雖も、何れも第一流の書にあらず、又た苦心の作とも覺えず。予は敢て此等を推薦する勇氣を缺くものなり。

英國學者の手に成るもの

Flux, Economic principles. An introductory study. 1904.

マーシャルミ殆んご同じ立場に立つものなれば、マーシャルの大著の手引ミして最も適す。新奇を銜はず、所論穩健、甚だ要を得たり。但し自家獨創の見を立つるとは、尠し。

マーシャル經濟要論に次の二種あり。前者は夫妻の合著にして最も早く刊行したるものなり。

Marshall, The economics of industry. 2. Ed. 1888. Later editions.

Marshall, Elements of Economics. Vol. I. Elements of economics of industry. 3E. 1923. later editions.

後者は原論の摘要なり。予嘗て此書を教科書に用ゐて甚だ失望したり。著者自ら作りたる摘要なれば、必ず宜かる可しと信じたるに、多くは、原論の抜萃に止り、其省略せる部分の事は全く大要をも知ると能はず、抜萃せる箇所にも猶省略す可き箇所尠からざるを發見したればなり。思ふにマーシアルの長所は説き釋て餘蘊なく、兩端を叩き賛否を盡さしめ、婉々として及ばざらんを惟れ恐るゝ邊にあり。されば此要論は氏が得意の作と言ふ可き物にあらざらん。然れ共原論の浩瀚なるに躊躇する人にして、一應マーシアル自らの言にて其論を學ばんとする者は必ず此書に依る可きは勿論なり。此要論に邦譯あり、譯文難澁、英語を解する者には字引を藉るの勞を忍びても、原論に依る方勞遙に少し、次に薦む可きは左の諸書なり。

Cannan, Elementary political economy. 3. ed. 1903. Later editions unchanged.

Cannan, Wealth: a brief examination of the causes of economic welfare. 1914.

Chapman, Outlines of political economy. 3. ed. 1917.

Chapman, Elementary economics. 5. Impression. 1923.

Chapman, Political economy. (Home University Library)

Hobson, The science of wealth. (Home University Library) Reprinted 1919.

Nicholson, Principles of political economy 3. vols. 2. ed. 1902-1908.

第一にあけたるもの形小に、着題通俗を標榜すれども、所論必ずしも平易にあらず、初學者には多少困難あらん。第二のものは、大阪高商の伊藤教授の邦譯あり。簡明にして要を得たる書なり。チャップマンの書何れも、有益の書なれども、平易と云ふ點より云へば、必ずしも理想的のものにはあらず。殊に「アウトラインス」は通讀に困難を感ぜしむる節多し。第三のものは、最も平易なれども、内容必ずしも豊富ならず。されども、キアナと云ひチャップマンと云ひ、目今英國に於ける有数の經濟學者にして、殊にチャップマンは理論に鋭き人にして、少くとも英國經濟學の最新の立場を知らんとする人は、必ず其書を見ざる可からず。ホブソン亦有力の英國學者にして、或部分に於ては、チャップマンを凌ぐ鋭さを有せり。其書亦一讀を要す。ニコルソンは、或意味に於ては、マーシアルの論敵にして、其の評論必ずしも皆妥當とは云ひ難けれども、兩々併せ讀む者は益する所尠



からざる可し。

米國學者の手に成れるもの

予は左の數書を薦めんがす。

Carver, Principles of political economy. 1919 & 1921.

Clark, Essentials of economic theory: as applied to modern problems of industry and public policy, 1907.

Davenport, Outlines of economic theory. 1905.

Davenport, Outlines of elementary economics. 1916.

Fetter, The principles of economics with applications to practical problems. 1905.

Fetter, Economic principles. 1915.

Fisher, Elementary principles of economics 1920.

Seager, Principles of economics, being a revision of the introduction to economics. 1913. Later editions.

Seligman, Principles of economics: with special reference to American conditions. 4. ed. 1909. Later editions. 邦譯あり。

Tausig, Principles of economics. 2. ed. 1917. Later edition.

クラークは嘗て米國經濟學の巨匠たりし故ウォーカーを凌駕すとも云ふ可き人にして米國經濟學者の第一人なり。其研究必ずしも經濟學の全般に涉らず其最も得意とする所は分配論にあり。右にあげたる書も經濟學通論の書としては行き渡りたるものにあらず。されど米國學者の重鎮の手に成る一書は必ず讀まざる可からず其目的の爲めには右にあげたるものを見る可し。デーヴンボルトの書には長所も短所もあり。其長所は可なり著しきものなると共に短所も亦輕視を許さざるものあり故に初學者の卒讀には適せず相應の指導の下に讀む可きものとす。然る時には讀者の益を享くるもの決して鮮少ならざる可し。氏も亦クラークと粗同一の傾向を有し分配の理論を得意とす。セリグマンの經濟原理は著しく獨逸流の體裁殊にシュモラーの編次を加味したる跡ありて最新の立場を示さんと勉めたるものなり。書中統計并にダイアグラムを多く挿入し各章毎に參考書を掲げまた卷頭にピブリテグラフィを載せたる等米國學者の著書中第一等の書なり。然れども未だ學者一般の普く認めざる異説を斟酌なく所々に繰返

して非難を招くこと少からず。殊に同僚なるクラークの一種の新學說を恰かも斯界の定論の如く説きたるは、初學の士に先づ讀ましむ可き教科書として、應當を缺くものにして、タウシツグの如きは此書を以て全然失敗の作なりと評せり。教科書中に新説を載するは、決して不可にあらす、唯其が斯學上の一説なる由を明記し、必ず其心を以て説明す可く、之を他の定論と介在せしめて分界を紊れしむ可からず。タウシツグの酷評は其他の點にも及びて缺點を指摘したれども、其は何れの書にも多少は免れざる所、之れを以て此書が大體に於て近來の名著たるを否定する理由とするは、コルムビア、ハーヴァード兩大學の學閥争ひの餘波にあらずやと思はる、程にて、決して公平なる論評と云ふを得ざるなり。兎に角此書も適當の講說の下に讀むに適して、獨習者に便ならずと云ふ可きか。タウシツグの書は、恰かも右セリグマンの書の好敵手と云ふ可し、雖も、一の成書としては遙かに此れに及ばず、反對に著者が自家の説を述べたる點は、著しく多し。但しタウシツグ其人の主張する説は、學者間に異論少からず、決して定説を以て目すべきものにあらずと知る可し。故に初學の士に取りては、セリグマンの書の方適當なるは言ふを待た

ざるに共に、稍進みて研究せんとする者には、タウシツグの書は一種の學說を可なり力強く説きたるものとして一讀の値あり。

フエツター *Principles of Economics*. 1905. は嶄新獨創の見書中に充つ、有益の書なり。殊に理論に強く一讀痛快を覺ゆ。されど初學者の獨習には適せざらん。此書を改版したるものは第二にあげたる *Economic Principles* なり、著者の精勵、勉めて倦まざるは敬服に堪へざる所なり。カーヴァーの書は、之れよりも理論の鋭さに於ては劣れりと雖も、問題の取扱廣汎にして内容も亦豊富にして、所論穩健なり。

シーガーの書は曩に刊行したる *Introduction to Economics* を全部改訂し、書名をも改めたるものにして、材料豊富、論述要を得たり、教科書として第一位に推して可なり。右書を更に節略したるものに *Briefer course* と云ふ千九百九年の出版にかゝるものあり。佛書によるものに對しては、左の數書あり。

Ansiaux, *Traité d'économie politique*. (Bibliothèque internationale d'économie politique) 2 vols. 1920-1923.

- Antoine, Cours d'économie sociale. 1921.
- Beauregard, Elements d'économie politique. 9. ed. 1906.
- Cauwès, Cours d'économie politique. 8. ed. 1893.
- Colson, Cours d'économie politique professé a l'école polytechnique et a l'école nationale des ponts et chaussées. 6. livres avec supplément aux livres IV, V et VI. Liv.-I édition définitive revue et considérablement augmentée. 1916.—Liv. 2 édition définitive 1917.—Liv. 3 édition définitive 1918.—Liv. 4. édition définitive 1920.—Liv. 5. 2 édition 1909.—Liv. 6. 2 édition 1910.—Supplément aux livres IV, V et VI. 1918.
- Gide, Principes d'économie politique. 24. éd. 1923.
- Gide, Cours d'économie politique. 7—8. éditions. 1923. 2 Vols.
- Gide, Premiers notions d'économie politique (Petite bibliothèque de culture générale).
- Journe, Précis d'économie politique.
- Leroy-Beaulieu, Précis d'économie politique. Nouvelle édition par A. Liesse. 1922.
- Leroy-Beaulieu, Traité théorique et pratique d'économique Politique 6. éd. 1914. Later editions.

Perrau, Cours d'économie politique. 1914. 1916.

Truchy, Cours d'économie politique, ouvrage couronné par l'Académie des sciences morales et politiques. Tome I. 2. éd. 1923. Tome 2. 1921.

右の内、先づ最も薦む可きは、ギードの諸書なり。第一にあげたる Principles は説明巧妙措辭流暢、克く他國學者の研究を網羅して、而かもコンピラション(編集)に陥らず、自家の立場を確定し新奇を衒はず。版を重ねる數次、其度毎に改正を施すに怠らず、讀むに愉快にして、些の難澁を見ず。著者の手腕敬服に堪へたり。されば其の流布すること甚だ廣く英語にも翻譯せらる。初學者獨修の入門として、は餘りに簡潔に過ぎたるやの感あれども、普通の素養あるもの、讀むに甚だ可なり。之を前掲シーガーの通論と併せ讀まば、遺憾なきに庶幾し。千九百九年著者は右書の外更に別著 Cours を公けにせり。舊著よりは稍詳密にして簡潔の點に於ては或は劣る可きも、大體に於ては舊書の長所を兼ね備へ、更に最新の研究を網羅したるものにして甚だ有要の新著と云ふ可きものなり。前者飯島幡司氏の手になる邦譯あり、譯文快達甚だ便なるものなり。第三にあげたるものは、

更らに右書を摘要したるものこそす。

コヴェスはデードと共に、佛國に於ける新派の巨擘にして、右にあげたるは其最傑作と稱せらるゝものなり。内容の豊富なるこそデードの書に勝り、論旨井然新派の手に成りしものにしては本日までに至る最大の權威たり。内容の豊富の點に於て、此れよりも更らに其上に出づるものは、コルソンの書にして、數年に亙りて續々刊行せられ前後六卷之れに附録を添へ尠然たる大冊なり。されど、コルソンは舊派に屬し自由主義を固執し、又た其從事する職の工學方面に在るが爲め、技術的見地に囚はるゝこそ尠からず、従つて、經濟原論の書として必ずしも重きを成さず。されど著者の見識極めて該博實際生活の事實を旁證すると甚だ廣汎而して、其著述の趣意は、工學生に經濟學の一般的知識を與へんとするにあれば、法律政治等の關連事項に就ても、親切に説明を加へたり。故に博く他の書を讀まず、唯一書によりて佛國舊派經濟學の一斑、佛國現下の經濟事情の大體を知らんとする者に取りては、最も適當の讀本なりと云ふ可し。更らに舊派の權威たる書は、ルロア・ポリューの *Traité* にして、其の摘要は *Précis* なり。ポールガールの書は、教科書とし

て廣く行はる。アンシオー、ペロー、トルユシー三氏共に巴里大學の教授にして、其著は何れも同一規模のものなり。之れ其著作の目的が何れも大學生參考書并に文官試験準備用書たるが爲めなり。而して其の學術的價值も兄たり難く弟たり難し。アントアンの書も粗ぼ同性質のものなれども、聊か趣味を異にする所あり。ジュールシの書は最も簡單なるものなり。

伊蘭、露瑞諸國學者の手に成るもの

左の諸書は何れも價值あるものなり。

Cassel, *Theoretische Sozialökonomie*. (Lehrbuch der allgemeinen Volkswirtschaftslehre in 2 selbständigen Abteilungen. II. Abteilung) 2. Auflage 1921.

—Cassel, *The theory of social economy*. Translated by J. N. McCabe. 1923.

Gelesnoff, *Grundzüge der Volkswirtschaftslehre*. Nach einer vom Verfasser für die deutsche Ausgabe vorgenommenen Neubearbeitung des russischen Originals übersetzt von E. Altschul. 1918.

Graziani, *Istituzione di economia politica*. 1904. 3za edizione riveduta ed accresciuta. 1917.

Greef, *L'économie sociale d'après la méthode historique et au point de vue sociologique*. *Théorie et*

- applications. 1921.
- Pantaleoni, Pure economics. 1898.
- Pareto, Manuale di economia politica con una introduzione alla scienza sociale (Piccola biblioteca scientifica 13.) 1909.
- Pareto, Manuel d'économie politique. Traduction française. 1909.
- Pareto, Lezioni di scienza economica razionale e sperimentale. 1921.
- Pierson, Leerboek der Staathuishoudkunde. 1896-1897.
- Pierson, Grondbedingsehn der Staathuishoudkunde. 4. Druk. 1896.
- Pierson, Principles of economics. English translation by Woizel. 1902 & 1912.
- Pinsérò, Economia sociale; esposizione critica delle dottrine socialiste. 1921.
- Supino, Principi di economia politica. 2 edizione. 1905.
- Wicksell, Vorlesungen über Nationalökonomie auf Grundlage des Marginalprinzips. 1913 & 1922.
- Witte, Vorlesungen über Volks- und Staatswirtschaft. 1910.
- パレットは現代伊國學者の雄にして原論の著あり、其の名外國に聞ゆ。此通論は袖珍本

にして一見些々たるもの、如くなれども同じ體裁の獨逸書フックスの經濟學 (Fuchs, Volkswirtschaftslehre. Göschen'sche Sammlung) の同一視す可からず、殊に現今に於ける數學的經濟學最新の立場を代表するものにして甚だ歓迎す可きものなり、千九百九年此の書の佛譯出でたり。國際經濟學文庫の一冊として Alfred Bonnet の譯出せるものにして、間々著者自ら筆を加へたり。第二にあげるものは、簡單なる節約書なり。之れ亦見るに堪ふるものなり。

スピーノの著は小形五百餘頁の小著なれども、文章簡潔、説明穩當なり。著者は伊太利少壯學者中の白眉にして、獨逸の最新研究に精通す。コツサの同種類の著 *Economia sociale* (邦譯あり) に比して遙かに勝れり。最も初學者に適す。

瑞典のカツセル及びウキツクセル、和蘭のピエルソン、露のゲレアスノフ及ウキツテ、伊のバンタレオニの數氏は何れも其國第一流の學者たるのみならず、世界有數の巨宿なり。カツセルの書最も新しく、英譯も亦近く刊行せられたり。理論に強く、或部分に於いては、マーシアルの上に出づるものあり。學者必ず一度は精讀せざる可からざるものとす。

ゲレアスノフの書は、内容極めて豊富にして叙述亦甚だ適切なり。元々著者の講義を筆録したもにして、行文甚だ明暢一讀快を覺ゆ。著者の力倆凡ならざるを窺見するに足れり。グラチアニ、グレーフ兩氏の書は、平易にして、難解の恨なし。パンタレオニの書は、著者獨得の見解を述べて甚だ暢達なり、但し其論必ずしも學界の定論を代表するものにあらず、初學者の讀むに適したるものにあらず。ピエルソンの書は其一部『價值論』嘗つて、河上、河田兩博士によつて邦語に譯出せられたるこゝあり、其は英譯の重譯なり。著者は和蘭第一の經濟學者たるのみならず、有數の政治家にして、再度藏相に歴任し、又た首相たりしこゝもあり、和蘭自由黨の總裁として、永く政界に馳驅せり、而して、其の書たる尋常教科書の類にあらず、理論の方面に専ら力を注ぎたるものにして、此點に於て、埃國のボエム、バヴェルク（同じく藏相たりしこゝあり）と其出處甚だ相似たり。露のウキツテは普く人の知る有名の政治家にして、而して經濟學の造詣亦淺からず、但し氏の著は、理論の方面甚だ弱し。ウキツクセルの書は、限界原則の上に立ちて理論を述べたるもの、力作を以て目す可きものこす。ピンセロの書は主として社會主義の經濟理論を評論するを趣

意こしたるものなれども、慥かに一讀に値せり。

\* \* \* \* \*

さて一通り經濟學現在の研究に通曉したる後は、直ちに古へに溯つて斯學の大作名著を涉獵せざる可からず。先づ必ず第一に讀む可きは、言ふ迄もなく、

アダム・スミス『諸國民の富』（略して國富論と言ふ原名前に出づ）

此書には版本數多あり。日本にて廣く行はるゝはルートレッヂ版ミポーン版なり、次ではラボツクの『百良書』の版本ならん。皆な價の安きを主としたるものにして、缺點多きものなり。或學者はラボツクの『百良書』は『百惡書』Hundred bad booksの謂ならんこ苦言したるこゝあり、其は惡版の意なり。稍古く我邦に舶載したるはマカロツク版にして此は稍々良し。其他ビユカナン版あり、モーレー版あり、ロージアース版あり、ニコルソン版あり、ホエートレー版あり、ウエーキフキールド版あり、其他類本少からず、雖も、其最も汎く行はれたるはマカロツク版なり。然るに近年英國の學者キアナン(Cannan)諸種の版本を對照校訂し二冊として出版せるもの（倫敦千九百四年刊行）ありて始めて學者に

依る所を知らしめたり。此書の邦譯本は、曩きに石川昭氏のものあり、近くは竹内謙二氏の手に成るものあり、此譯本忠實親切、若干點を除ては甚だ推稱するに足るものなり。支那譯は『原富』を題して刊行せられたるものあり、忠實なるものは云ひ難し。次にはマルサス人口論 *Malthus, An Essay on the Principle of Population*. London 1798. なり。是れも屢々版を改め、殊に第一版と第二版とは非常に相違あれば、専門に研究せんには少くとも、第一版第二版は最後版と共に参照せざる可からず。近頃アシユレー經濟名著集 *Economic classics* 中に兩版の要領を抜萃して

*Parallel chapters from the 1st and 2nd editions of an Essay on the Principle of Population 1798. and 1893. New York 1895.*

を題して袖珍本を出せり。甚だ便利、有益の擧として感謝す可し。人口論の最終の版は千八百七十八年に出でたる第八版なり。然れども著者生存中に公けにしたる最終版は千八百二十六年に出でたる第六版にして第八版は其再刷に過ぎず。我邦に舶載せるもの種々あれども、倫敦のウアード・ロツク商會出版の版本は、第六版の再刷にして、價最も廉

なり。此書石川氏の邦譯（但しアシユレー節約本の）あり、完譯も近く市に上れりと聞く。リカルド經濟及租稅原論。同論文集

*Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation. I. E. 1817...2. E. 1819...3. E. 1821...*

*The same edited, with introductory essay, notes and appendices, by E. C. K. Gonner. London 1924...*

*Ricardo, Economic Essays, edited with introductory essay and notes by Gonner. London 1923.....*

*The Works of David Ricardo with a notice of the life and writings of the Author, by J. R.*

*McCulloch. New edition with a portrait. London 1888.*

原論の版本種々あれども、右に掲げたるもの最も信憑するに足れり、但し第一二二三の原論は容易に得難し。從來は、マカロツクの全集版は著者生時の最終版たる第三版の原論と、諸論文を集成し、別に其の傳記と著述解題とを添へ最可版として知られたり。（倫敦ジヨン・モーリー書店發行）。原論は斷片的にして、系統整はず、故にリカルドの學說を知るには、必ず其の諸論文殊に『農業保護論』と『通貨論』とを參酌するを要す。マカロツクの全集は此等を皆収録せり。殘る所はホランダー編刊の新聞投書類のみなり。然るに

近來ゴンナー教授姉妹篇として原論第三版を論文集を二冊の書として編纂刊行し、綿密なる解題索引参考書目等を添へたれば、恰もキアナン版のスマス、アシュレー版のミルに於けるが如く、最良の形に於けるリカルドを何れも廉價に入手し得ること、なれり。又近來フライブルグ大學のデール教授右原論の獨逸譯に添ふるに詳き校訂註釋の一書を以てせり。題して *Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu David Ricardo's Grundsätze der Volkswirtschaft u. Besteuerung* 2. A. 1905. 711頁。

ミル經濟原論 Mill, Principles of Political Economy with some of their applications to Social Philosophy. London 1848.

此書はアダム・スマスの著に次で最も廣く行はれたれば、版本の多きこと彼れに譲らず、悪版また多し。最悪版は同じくラボック百良書版なり。千九百六年の英國經濟學協會の雜誌中に詳しき考證論を試みたるものあり。其最も汎く行はるゝは *People's Edition* 稱する略版なり。此版は處々に改竄を試み字句までをも改めたる處あれども、大體に於て第六版に基くものなり。第六版はビーブルス・エヂシヨンと同時に千八百六十五年に出

で、最終版なれども或は第六版を以て第二版(千八百四十九年)に若かずと云ふものあり。パーミンガム大學のアシュレー教授近く諸版を校訂し註釋を加へ、又書尾に参考書解題を附して此書の新版を公けにせり。爾今以後キアナンのアダム・スマス本と同じくアシュレーの此本を藍本と見て可なり。而して其價の甚廉なる(五志)殊に喜ぶ可し。出版は千九百九年、出版書肆は倫敦のロングマンズ商會なり。初學者の爲めに、此書の要領を摘録し、學習用の設問を附したるものに左の一書あり。

Oldershaw, Analysis of Mill's Principles of Political Economy. Oxford 1915.

ジェヴォンス經濟學理論 Jevons, Theory of Political Economy. London 1. E. 1871. 3. E. 1888. 此は版本一種あるのみ、此書を近頃或人の編集して出したる *Principles of Economics* (千九百年倫敦にて出版)と混同す可からず。今日に於ても純理論の書として此書の右に出づるもの多からず、學者潜心研究に値す。小泉教授の邦譯あり。『經濟學純理』と題す。

ヘルマン國家經濟學研究 Hermann, Staatswirtschaftliche Untersuchungen. 1. A. 1830. 2. A. 1870.

第二版は第一版とは遙かに面目を改めたり。但し第二版は著者自ら出せるにあらず、著



者の駙馬にして現時統計學の泰斗たるゲオルヒフオン・マイアが著者の高弟兼同僚たりしヘルフェリヒ共々に遺稿を編集校訂して出せるものなり。此書現在本甚だ少く殊に第一版に至りては有名なる圖書館に缺く所さへあり。

ロシア經濟原論 原名前  
に出づ。

經濟全書の第一巻版を重ねるこゝ二十二年最新版はボエルマンの増訂せるものなり。流布の汎きスミス、ミルを除いては、經濟書中の第一位にあり。各國語の翻譯あり、英譯はLalorの手になり二冊に分つ。日本譯は全書の第二巻第三巻はあれども（非常なる惡譯にして、且甚だ不親切なり）原論の卷にはなし。翻案には駒井重格氏經濟考徴（專修學校講義録中にありしと記憶す）其他あり。

ワルラスの諸著

Walras, Elements d'économie politique pure ou théorie de la richesse sociale. 4. ed. 1900.

Walras, Etudes d'économie politique appliquée (Théorie de la production de la richesse sociale) 1893.

Walras, Etudes d'économie sociale. (Théorie de la répartition de la richesse sociale) 1896.

ワルラスは、クールノ、ゴッセンと相並んで、数理經濟學の明星にして、右諸著は、何れも初學者の繙讀には適せざるこゝ勿論なり。雖も、少しく進んで經濟學を研究せんとする者は、必ず節を屈して、熟讀玩味せざる可からざるものなり。近來予の研究室に於ける手塚壽郎教授の『ゴッセン研究』の後を承けて、ワルラス、パレット等の研究に従事する中山伊知郎君あり。予は多大の期待を以て同君研究の大成を祈りつゝあるものなり。

數理的傾向を帶び、而して、マーシアルの後を承けて、厚生經濟學の見地より、若干問題を取扱ひたる左の一書は、或る意味にては、現在經濟學の最高點を代表するもの云ふことを得可し。其書必ずしも難解にあらず、元より今日遽かに完備を求む可きものにあらず。雖も、著者の將來は實に刮目して期待す可きものなり。此意味に於て、予は、最も熱心に此書の一讀を薦めんことを欲するものなり。

Pigou, The Economics of Welfare. 1920.

最後に、以上諸書は、其系統を著しく異にするものにして、學者の往見を切望す可きものあり。但し、其書今存するもの極めて稀にして、之を入手するこゝ、殆んど不可能なるは、

吳々も遺憾の極なり。同著者の『佛國社會主義史』近來重刷本出でたれば其も同様の企左の書に就ても望ましきものなれども其は恐らく實現せらるゝの日はなかる可きか。

Stein, *Lehrbuch der Nationalökonomie*. 3. umgearbeitete Auflage. Wien 1887.

經濟學研究者の座右に置く可き辭書・叢書及雜誌類の主なるもの左の如し。

### 一、辭書

Elster, *Wörterbuch der Volkswirtschaft*.

Conrad, *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*.

Palgrave, *Dictionary of Political Economy*. 1890. The new edition edited by Henry Higgs. Vol. 2.

F—M. 1923.

Say & Chailley, *Nouveau dictionnaire d'économie politique*. Paris 1832.

エルスターの經濟辭書は編纂の體裁甚だ宜しきを得價も亦割合に廉なり。最新版は、千九百十一年刊行の第三版なり。

コンラッド辭典は、目下第四版刊行中、AよりHに至る諸分冊但し必ずしも順を追はず既に出でたり。

此書浩瀚雄大、斯學第一の重寶なり。専門學者は勿論、一般に經濟學を研究せんとする人は、エルスター、コンラッドの何れか一を備へ置かば、其便甚だ大なる可し。バルグレーヴ、セー等は場合によりては缺くとも、以上二書の一は必ず坐右に置く可きものこす。

バルグレーヴ經濟辭書は右兩書に較べては甚だ劣れり、雖も獨逸語に通ぜざるものは此書を以て、補ひと爲さざる可からず。編纂必ずしも統一せず、執筆者必ずしも感服す可き人のみにあらず、殊に參考書の引掲甚だ區々且つ穩當を缺くもの尠からざるは、英國學界の爲めに甚だ惜む可き所なり。近來附録を添へたる新版の企ありて、目下第二卷丈け刊行せり。但し本文は舊版寸毫も異なる所なし。戦後の疲弊を闘ひつゝ、第三版を全部改訂して、第四版を發行しつゝ、あるコンラッド辭典に比して此點に於ても亦甚だしく劣れり、云はざる可からず。英獨勤怠の相違偶々此事を以て想見し得可きか。

セー經濟學新字書は以上三書の中其一にても具ふるものは此書を缺きて可なり、佛國の學問の英國にも獨逸にも遙かに劣るここの有力なる招牌として興味あり。同じく佛國に商工銀行字書あれども、是れは又た更らに劣れり。邦書にては、同文館發行の『經

『大辭書』あり、故内田博士其の東洋の部を、予は其の西洋の部を監修したるものなれども、予自ら決して満足し居るものにあらず、唯目下の我邦の事情を以ては、此以上のものを編纂せんこと甚だ困難なり。補遺文又は改訂によりて若干の補缺を爲さんことを希つて已まざるものなり。

二、叢書

叢書の類、其重なるものを記せば、左の如し

1. Bibliothek der Volkswirtschaftslehre und Gesellschaftswissenschaft. 20 Bde.
2. Collections des économistes français et étrangers. 16 Vols.
3. Custodi, Scritti classici italiani di economia politica. 50 volumi.
4. Diehl und Mombert, Ausgewählte Lesestücke zum Studium der Politischen Oekonomie. 16 Bde. 1912-1923.
5. Grundriss der Sozialökonomik.—Abteilung I. Wirtschaft und Wirtschaftswissenschaft.— 2 Die natürlichen und technischen Beziehungen der Wirtschaft.— 3. Wirtschaft und Gesellschaft.—  
 „ 5. Die einzelnen Erwerbsgebiete in der kapitalistischen Binnenpolitik im modernen Staate.

1. Teil: Handel. 2. Teil: Bankwesen.— „ 6. Industrie, Bergwesen, Bauwesen.— „ 7. Land- und forstwirtschaftliche Produktion, Versicherungswesen.
  6. Hand- und Lehrbuch der Staatswissenschaften in selbständigen Bänden.
  7. Jastrow, Textbücher zu Studien über Wirtschaft und Staat. 6. Bde.
  8. Schönberg, Handbuch der Politischen Oekonomie. 1882. 4 Bde. 4. Auflage 1896-1898.
  9. Sammlung älterer und neuerer staatswissenschaftlicher Schriften des In- und Auslandes. Herausgegeben von L. Brentano und E. Leser.
  10. Collection des Economistes et des Reformateurs sociaux de la France. 12 Vols.
  11. Sammlung sozialwissenschaftlicher Meister. Herausgegeben von H. Wäntig.
- (2)(3)は斯學名著の大集成にして、斯學の寶典なり。(4)は大學研究練習用として問題に於て、主要なる學者の關係の所説を摘録論集したるものにして、其の編纂間々當を缺くも大體に於て、便利調法、價廉にして、初學者の講讀に適す。(5)は、獨逸經濟學者多數の合著にかゝる『社會經濟學大系』にして、現今最も進歩せる立場に於ける諸學者の研究を集大成したるもの、未だ全部の刊行を見ず、雖も、コンラッド辭典と相待つて、世界經濟學の寶

典云ふ可し。(8)は其の前驅とも見る可きものにして、當時の學問の立場を知るには、要のものなれども、今日に於ては、既に時代後れこなれるものも尠からず。(6)も今日に於ては、學問の進運に取殘されたる觀ある部分尠からず、而して、第一流學者の執筆にかゝるもの多からず。(7)は(4)と同様の趣意を以て、而して異なる結構に成り、學生練習用として有用なり。英國にては、アシユレーの編にかゝる *Economic Classics* あり、米國には *スミス* の編にかゝる *Readings in Economics* あり、何れも(4)(7)同様の目的に出で、初學者の便を得ること多きものなり。(9)は稀觀書を多く集め有益なる解題を附す。(10)も全く佛國書の稀書集なり。(11)は通俗向にして、外國書の獨譯多し。(1)は之れに類せり。其他ホランダの稀書重刷集 *Hollander's Reprint of Economic Tracts* ありて、今日までに八部を刊行し、爾來計劃を發表したる儘中止し居れるは惜む可きことなり。

我邦にては、神戸博士主宰『經濟全書』ありて、諸學者の新研究を集大成せんことを企てたり。雖も、今日の立場より云へば、最早時代後れの感なきにあらず。慶應義塾同人の計劃に成る『名著邦譯集』は、未だ其企あるを聞くのみにして、今日迄には刊行の運に至らず。

同文館の『世界經濟叢書』も亦今や多くの人の忘るゝ所となり了れるが如し。

### 三、雜誌

斯學の進運に後れざらんには、一二の雜誌を時々參考するを要す可し。其類甚だ多し。雖も、英國にては、

*Economic Journal* (三月六月九月十二月年四冊刊行)

は英國經濟學協會の機關として第一位にあり。米國にては年四回發行の

*Quarterly Journal of Economics*

はハーヴァード大學の機關にして、或點にては *エコノミク・ジヨルナル* に勝れるものなりしも、次記のもの改造して面目を改めたる以來、學者多く彼に赴き、此誌甚だ不振の狀に陥りしは惜む可し。

*American Economic Review*

は米國經濟學協會の機關にして、同じく年四回發行のもの、一八九〇年改造改題以來、頓に面目を改め、現今にては米國經濟學雜誌中の白眉たり。

獨逸にてはシュモラー主幹の

Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik  
は月刊にしてシュモラーの編集する

Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft.

は不定期なれども一年間に四冊を出す。前者は断片的の雜録と經濟事情録取る可く、論説には近來格別のもの顯れず、新刊書の批評亦た人を服する程のものなく、要するに整頓せる編纂事業としては敬す可きも、學術上の價值は遙かに後者に劣れり。後者は經濟學雜誌中の王として可ならん。其他獨逸には良好なる雜誌類少からず。例せば、ペローの主幹する社會經濟史雜誌(年四回)は經濟史専門唯一の雜誌にして、又ゾムバルト等編輯の社會學社會政策雜誌(年四回)

Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik

は、社會主義社會政策に就ては絶好の雜誌にして、近來は經濟學の理論方面に關し、有力なる論文を集載すること多く、優にシュモラー年報の壘を摩するの觀あり。

佛國の雜誌は、英獨何れに比するも學術的價值も、編纂の整備も共に著しく劣れり。他の語を知らざるもの已むを得ずして讀む可く、之れに多くの費と勞を抛つは惜む可し。其重なるものは舊派の Journal des Economistes 新派の Revue d'Economie Politique なり、又白耳義にて近頃出す Revue Economique internationale あり。伊太利には Giornale degli Economisti あり。或は佛國の類名のものに勝らん。

邦文の經濟學雜誌には『國民經濟雜誌』は稍々古く、其の近刊書一覽は學者の便利とする所なり。『經濟論叢』は右よりは新しけれども、有益の研究を載すること尠からず。最も古きものは恐らく『國家學會雜誌』なる可し、雖も古きこと必ずしも價值多きことと一致せず。經濟事實を報じ兼ねて經濟論説を併載するものに『東洋經濟新報』あり、『ダイヤモンド』あり、『經濟財政時報』あり、『エコノミスト』あり、中に就て、『東洋經濟新報』は體裁最も整へり。『東京經濟雜誌』は故田口先生の創刊にかゝり、我邦雜誌中の長老なれども、近來は其存在すら忘れられたり。田口先生の遺憾察するに堪へたり。

我邦の經濟書にては福澤諭吉氏『民間經濟錄』田口卯吉氏『日本經濟論』天野爲之氏『經濟原論』の三者は最も古く又最も流布したるものにして、我邦に經濟學の思想を普及したる功没す可からず。神田孝平氏に『經濟小學』あり、翻案書の嚆矢とも稱す可し。

最近の研究を備へたるものにては金井延博士『社會經濟學』最も廣く行はる。其他には田島錦治博士に『經濟原論』あり、小林丑三郎博士に『經濟學通論』あり、河上肇博士に『經濟學原論』あり、前者最も古く後者最も新し。田島博士の書は簡明直截而して間々著者獨特の見識を吐露せるものあり、小林博士の書も亦苦心の作と云ふ可し。河上博士の經濟學原論は上卷序論の部に止まれども、之を我邦從來の經濟書の多數と比較するに、確かに一段の進境を示し、斯學の新潮流を紹介するに忠實ならんを期するもの、如し。唯引照交渉甚だ煩雜にして、初學者をして適從に苦ましむるものあるは惜む可く、其引照も交渉も間々權衡を缺き、クラインヴェヒターの如き中流の爲めに、廣き座席を設け乍ら、第一流學者の第一流の論を盡さざるは穩當と云ひ難かる可し。其他經濟原論概論通論教科書要義綱要等の名稱を附して顯れ出でたるもの十を以て算す可し、雖も、皆大同小異

なり。其中に就て、津村秀松博士に『國民經濟學原論』あり、卷帙浩瀚、材料豊富、行文亦流暢、初學者の先づ讀むものとしては適當ならん。但し純理論の上に於ては獨創の見多からず、諸般の記述又た必しも肯綮に中れり、と云ふ可からず。如何にやと思はる、節なきにしもあらず。此點に於ては、金井、河上兩博士の著或は勝れり。されば此書と金井博士の舊書を併せ讀まば、先以て要を得るに庶幾からんか。更に新しきものに、山崎覺次郎博士の『經濟原論』河田嗣郎博士の『經濟學要義』あり。山崎博士の著は極めて簡潔なるものにして、所説穩健、貨幣利息等に關しては、卓越なる見識を述べたり。河田博士の著は、稍々詳細に互りて論述しあり。兩者共に津村博士の書よりは、簡略のものなれども、學者安心して讀み得るの點に於ては、彼是甲乙なし。

猶各特殊の問題に關する參考書は各章中并に補論に於て論評を加へて掲げ置きたれば、茲に擧げず。

## 第二編 經濟學の根本概念

### 第一章 緒論

抑も經濟學を説起すに種々の組立法ある可し。雖も多くは之を説く者の個人的嗜好によりて其趣を異にするに過ぎず。必ずしも一定不動の範疇存する次第にあらず。今小異を捨て、大同に付き各種の異説を大別するときは、從來の所説何れも左の三者其一を出でざるもの云ふて可なり。

- 一 經濟行爲の原因たる人間の動機に論を起すもの、(欲望本位論)
- 二 經濟行爲の結果にして人間動機の對象たるものに論を起すもの、(財又は富本位論)
- 三 經濟行爲其物に論を起すもの、(經濟行爲本位論)

前編に於て經濟學は富と人との關係を考究の主題なりとするマーシャルの説を演べ

たり。今其意を更らに詳かにせんに、人間の欲望を其れを充たさんとする人間努力の中、貨幣額に見積られ得可き限りを對象として研究する學問を經濟學と云ふなり。されば經濟學の取扱ふ可き題目は、

- 一 欲望—努力—富 (又は財)
- 二 富 (又は財) — 努力—欲望
- 三 努力—富 (又は財) — 欲望

の三形式の何れか一に居らざる可からず。第一の形式は先づ欲望の存在を論定し、此欲望を充さんが爲めに努力を生じ、努力の結果富の發生を招くに論じ、第二の形式は茲に富あり、之を得んとして人間の努力起り、此富を得て欲望を充足すに論じ、第三の形式は人間の努力ありて富生じ、以て欲望を充足すに論ずるものなり。今此三形式をマルクス流に換言すれば左の如くならん。

- (1) B—S—W (2) W—S—B (3) S—W—B

Bは欲望。Sは努力。Wは富 (又は財) を表はす。

然るに右三形式の第三は仔細に之れを檢すれば、實は第二の形式の一種に過ぎざるを發見す可し。蓋し第二の形式は其實

$$W—S—W—B$$

を爲す可きものなり。富(W)ありて努力(S)を生じ、其結果富(W)を生産して、欲望(B)を充足するものなれば、第三の形式は論を半途より起せる第二の形式と見得可きものなり。今右の三形式に加ふるに、交換の現象の形式として、マルクスの説きたる

$$\begin{array}{l} W—G—W \quad \text{貨物—貨幣—貨物} \\ G—W—G \quad \text{貨幣—貨物—貨幣} \end{array}$$

を以てするときは左の新形式を得可し。

- (1) B—S—W<sup>2</sup>—G—W<sup>1</sup>
- (2) W<sup>1</sup>—S—G—W<sup>1</sup>—B
- (3) S—W<sup>2</sup>—G—W<sup>1</sup>—B

一は欲望ありて、努力起り、其結果富 (財貨物) を生産し、之を賣りて貨幣を得、其貨幣を以



て自己欲望の用に供す可き富（財貨物）を買ふ。二は欲望を充たす可き富ありて之を得んが爲先づ努力し、努力の結果貨幣を得、此貨幣に換へて富を得、此富を以て欲望を充たす。三は努力して富を得、此富を賣りて貨幣を得、之れを以て富を買ひ、欲望を充たすものなり。

今 ( $W_2$ ) なる財は之を名けて交換財(獨語 Tauschgut 英語 exchangeable goods 若くは goods in exchange 之稱す)と云ひ ( $W_1$ ) なる財は消費財(獨語 Verbraugut 英語 consumable goods 又は goods for consumption 之稱す)と云ふ。マルクスが説きたる如く、第一位に在る貨幣 ( $G$ ) と第二位に在る貨幣 ( $G$ ) との間には、如此品質上の差違あるなく、單に數量上の差違あるのみ。今經濟學の主題とする所は、此三形式の行程の研究にあり。而してマーシャルの如く、及び大多數の英國佛國の學者の如く、經濟學を以て専ら力を經濟行爲の研究に集中すべきものなりとする立場に於ては、此等行程中人間の努力(即ち  $W$ ) に屬する部分を中心とするものなり。カーヴァーは其『富の分配』なる書中に其意を明言して云はく、

Prof. Marshall has aptly defined economics as the study of man's actions in the ordinary business

of life. Since the ordinary business of life consists in getting a living, it was easy to modify this definition, so as to read, Economics is the study of man's efforts to get a living. Either of these definitions would imply that the science is concerned more with man's economic activities than with the things towards which those activities are directed; more with the ways of getting and using wealth than with the nature and forms of wealth. As a matter of fact, the student of economics cares only incidentally for a description and classification of the things which constitute wealth, but he wishes primarily to know the methods by which wealth is procured and utilized. In other words, economic activities, rather than economic goods, form the subject-matter of the science.— Carver, Distribution of Wealth, New York 1904, Introduction.

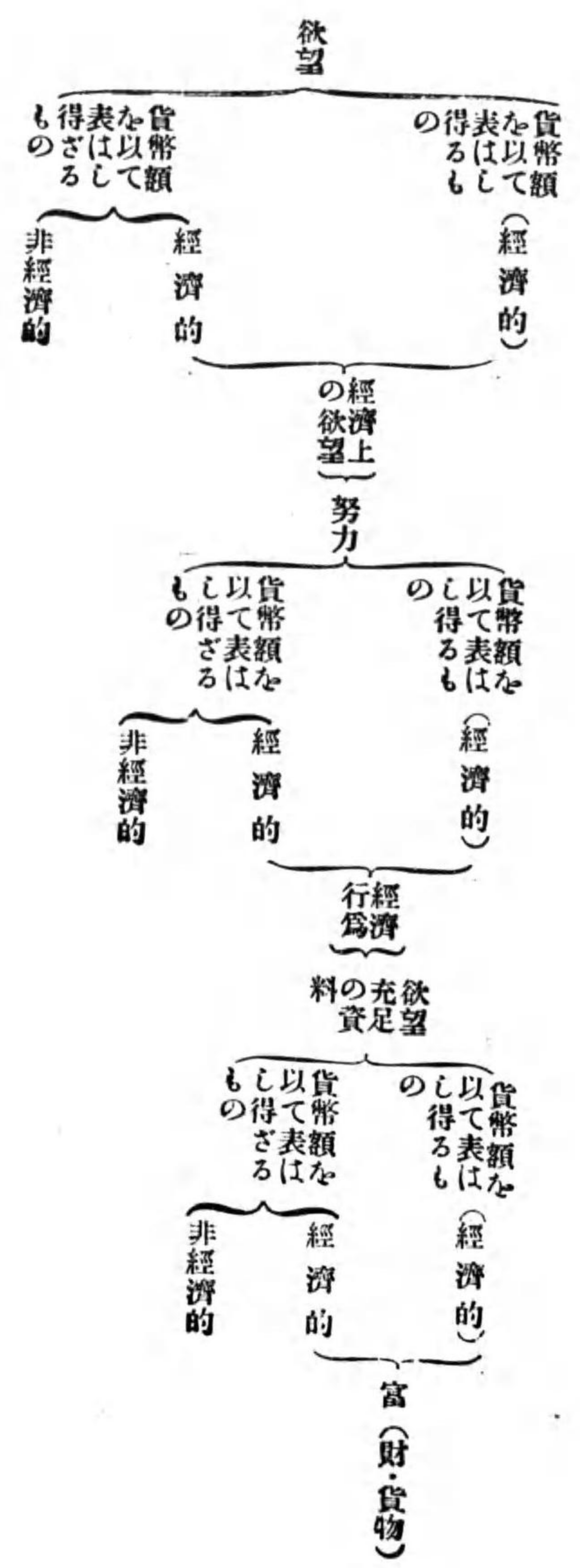
カーヴァー教授が、經濟學を以て人生日常生活の業務に於ける人間の行爲を研究する學問なりとの定義を下せるは誠に當を得たり。而して人生日常生活の業務は生活の資を得るを以て第一と爲すものなるが故に、此定義を言換へて、經濟學とは生活の資を得んとする人間の努力を研究するものなりとも言ひ得可し。此兩定義は共に、經濟學を以て人間の經濟行爲を研究の主題とするものにして、經濟行爲の對象たる貨物(富若くは財

を指す)を主題とするものに非ず、富の性質及び形態の研究よりも、寧ろ富を得並に用ゆる方法を研究せんとするものなる意を含むものなり。勿論經濟學者は富を構成する貨物の記述及分類を試みざるにはあらざれど、其は事の序に論及するに過ぎず、其専ら心を注ぐ所は人間が富を得、之れを使用する方法如何にあり。されば經濟學研究の主題は經濟行為に在りて、經濟財にあらずと言ふ可きなり。(富の分配 千九百四年 緒論)

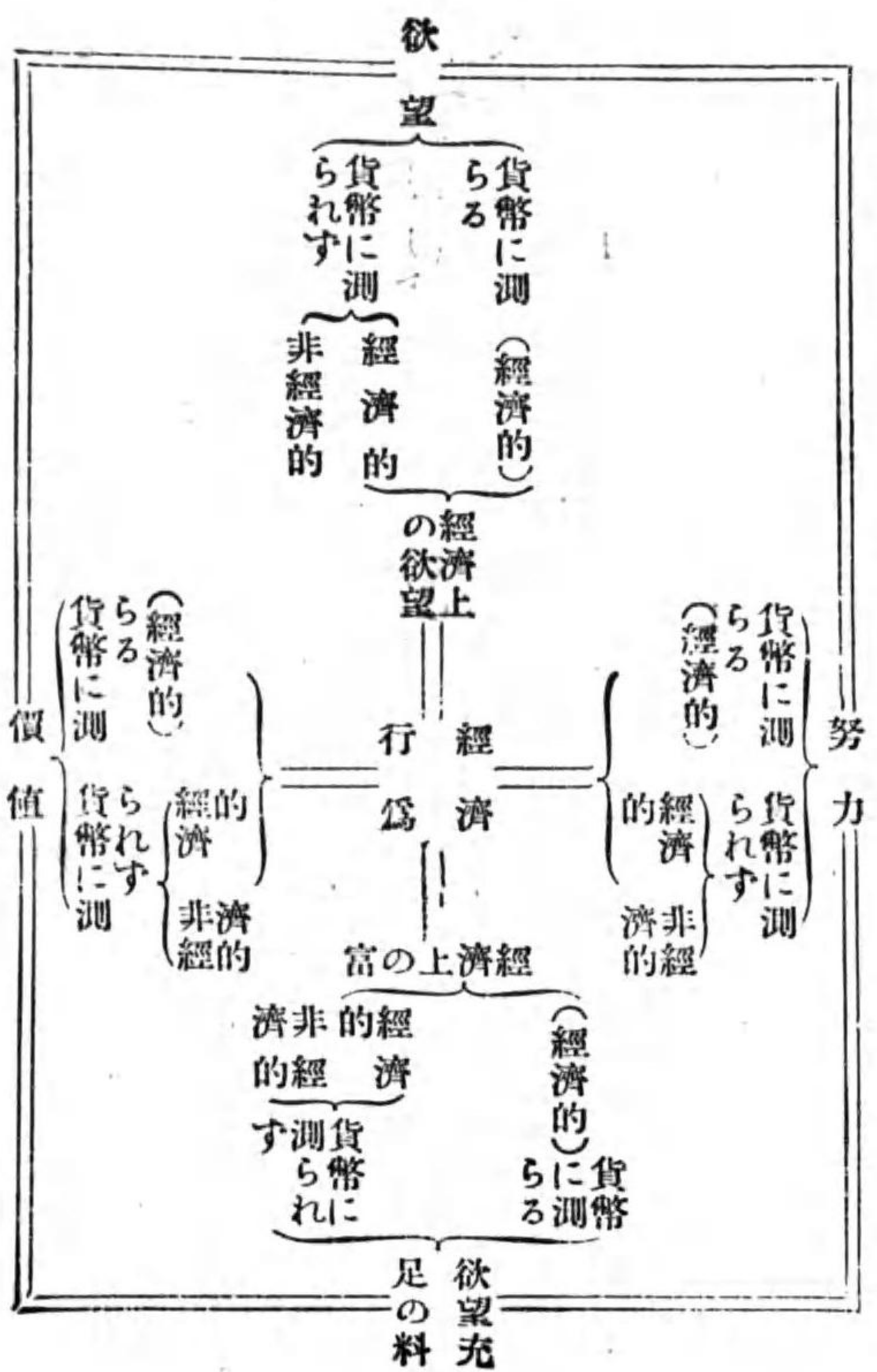
カーヴアの此言は眞に克くマーシャルの眞意を道破したるものにして、同時に英米學者現在の立脚地を明かにして遺憾なきものなり。其立場は即ち前述三個の研究法の中其三の經濟行為本位論に屬するものなり。

左に圖解を以て右説明を補ふ可し。

甲 圖



乙 圖



マイシアルは其書の結構を説いて

We have seen that economics is, on the one side, a science of wealth; and, on the other, that part of the social science of man's action in society, that deals with his efforts to satisfy his wants, in so far as the efforts and wants are capable of being measured in terms of wealth, or its general representative, *i. e.* money. We shall be occupied during the greater part of this volume with these wants and efforts, and the causes by which the prices that measure the wants are brought into equilibrium with those that measure the efforts. For this purpose we shall have to study,

- (1) Bk. III. Wealth in relation to the diversity of man's wants which it has to satisfy,
- (2) Bk. IV. Wealth in relation to the diversity of man's efforts by which it is produced.

吾人は既に經濟學とは一方に於て富の學問たるものにして、他方に於ては人間の社會に於ける行爲の學問たり、人間が欲望を充たさんが爲にする努力の中、富又は其一般代表物たる貨幣の稱呼に於て測られ得る限りを論究するものなるを論ぜり。吾人は本書の大部分に於て専ら此等の欲望と努力とを論題とす可く、並に欲望を測る物價が努力を測る物價と均衡を得る原因に就て研究す可し。今此目的を達する爲めに、吾人は

- (一) 第三編に於ては富と富に依りて充たす可き人間欲望の種々相との關係を論ず可く、  
 (二) 第四編に於ては富と富を生ずる人間努力の種々相との關係を論ず可し。  
 と云へり。今此意を表にて示せば左の如し。

富  
 欲望を充す ————— 需要論 (第三編)  
 努力に依つて生産せらる ————— 供給論 (第四編)

即ち共に第二の形式により經濟行爲の結果にして欲望の對象たるもの即ち富に論を起す富本位論にして而して其中心は經濟行爲其物にあるが故に、第二形式の一種たる第三形式の經濟行爲本位論も認む可し。而して第三編は第一形式の態を取りて、

B—S—W

の行程を究め、第四編に至りて

W—S—B    W    B—W—B

の行程を尋ねんごするものなり。而して第三第四兩編の準備として、此第二編根本概念論は、先づ欲望の對象にして努力の結果(欲望を充し、努力によりて生産せらるることたる富

其物の性質を定めんごす。されば一見する所、カーヴァーが經濟學は富の研究に非ず、富を得んごする努力の研究なりご云ふに反對の立論法を取るが如く見ゆ可し。然れども是れマーシアルの眞意にあらざるごことは、既に第一編に於て縷述したり。然らば何故マーシアルは其眞意を反對に解せらる可き説明法を用ひたりやご云ふに、一は氏が思想の明瞭を缺くに依るごご疑なし。此點より云へば氏の立論の結構は決して巧なりご云ふ能はず。然れごも其理由は更らに深きものあり。他なし、第三の形式が到底獨立の地位を占む可き價值なく、單に第二形式の一種に過ぎざるが爲めのみ。蓋し經濟行爲本位論は到底富本位論の範疇を脱する能はざるごご前提の形式に顯はる、所の如し。されば經濟行爲中心論を執るマーシアルも詳細の説明を下さんごするに方りては圖らず力を富本位論に藉らざるを得ざるに至れるなり。予が從來經濟學立論の趣は千差萬別なりしごも、畢竟は第一第二兩形式の外に出でざりきご斷言するは茲に基くなり。

B—S—W,    W—S—B

の二形式以外何の形式ある可からざるごご、交換の形式の

W—G—W, G—W—G

の二者を措て他にあらざるに均しむ可し。

マールシアは第二編の結構を叙して云ふ、

We have to inquire which of all the thing that are the result of man's efforts, and are capable of satisfying man's wants, are to be counted as wealth (I), and into what groups or classes they are to be divided. (2)

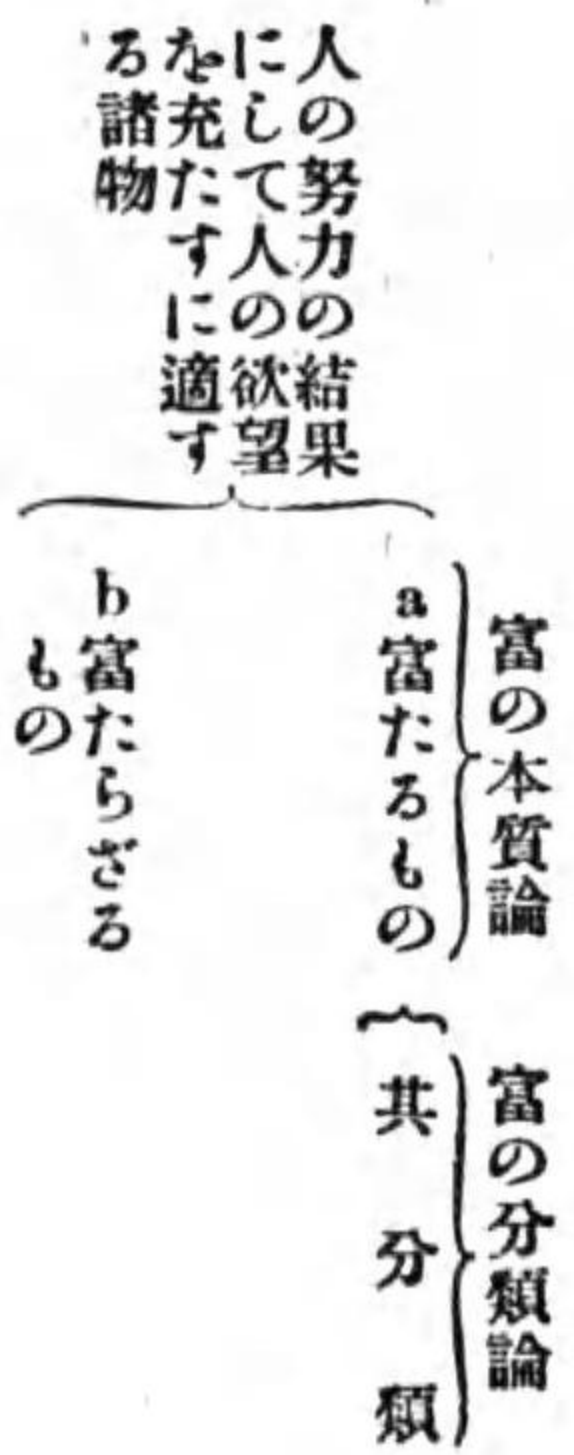
右邦譯

吾人の研究す可きは次の如し

一 人間努力の結果にして、人間の欲望を充たすに適する凡ての物の中、富を認む可きものは何なりや。(即ち富の本質論)

二 而して此富は如何なる部類又は階級に分別せらる可きや。(即ち富の分類論)  
是れを表示すれば、

甲 表



乙 表



マールシアは此くの如く先づ其論を富より起すに付て多少不安の念ありしものと見え其理由を辯明して云ふ。

For there is a compact group of terms connected with *Wealth* itself, and with *Capital*, the study of each of which throws light on the others.....while the study of the whole together is a direct continuation, and in some respects a completion, of that inquiry as to the scope and methods of economics on which we have just been engaged.

吾人が此くする理由は、富其物並に資本と関連する一括の術語の部類あり、されば富及資本を先づ論ずるは此等諸概念を明かならしむる效あり……而して此種の研究は第一

編に於て斯學の範圍及研究法を論じたる部分の續論を見る可く、又之れに結論を與ふるものと見る可きが爲なり

而して論を欲望に起さざる理由として

And, therefore, instead of taking what may seem the more natural course of starting with an analysis of wants, and of wealth in direct relation to them, it seems on the whole best to deal with this group of terms at once.

故に一見寧ろ自然的立論法なるが如き、欲望並に之れと直ちに關連して富より説明を始むるよりは、此種概念（富及資本並に之れに關連する諸概念）に關する論を初めに置く方大體に於て勝れり云ふ可し

と云へり。即ち氏も雖も欲望本位論の立論法の方より、自然的なるが如き感を人に與ふるものなることを思はざるに非ざるを知る。氏の立場稍々透徹を缺くの狀以て見る可きなり。予自身の立場に關しては補論に述べたり、就て見よ。

故に氏は直ちに右順序を多少變更することある可しとて曰く

吾人は本編に於ても欲望及び努力の種類に就て、多少前提する所なかる可からず……然れども一見明瞭にして常識を以て知り得可き範圍に止め、其以上何等の推定をも要求せざる可し

と其常識と云ひ、一見明瞭と云ふもの、果して真に然りや否や、既に多少なりとも前提を設くる以上は、何故進んで學術的に欲望と努力とを説くを爲さざるや。全然富を發足點として論を立つる、亦一見識たるを失はず、然るにマ氏は富を發足點とすこ明言し乍ら、猶右顧左眄欲望及努力に就ても多少の前提を要す等と打消的態度を執るは、予輩の感服し難き所なり。以下氏の論述常に此筆法を免れず、學者をして適從に苦ましむるものあり。氏の爲めに惜みても猶餘あり。

The real difficulty of our task lies in another direction; being the result of the need under which economics, alone among sciences, lies of making shift with a few terms in common use to express a great number of subtle distinctions.

吾人の事業の眞の困難は此に在らずして他にあり、即ち他の凡ての科學と異り、經濟學のみは、日常生活に用ひらるゝ、僅少の用語を以て精緻なる區別を言表はす可き必要を有するが爲なり。

こ。然らば猶更以て始より精確嚴密の用語例を開く可きにあらずや。且つ亦た日常生活の用語を學術語として用ひるが爲め、經濟學は人の誤解を受くてふ苦情は、マ氏以前多くの經濟學者の繰返へしたる所なれども、吾人を以て之れを見るに如此苦訴は一向其理由なきものなり。日常生活の學問たる經濟學が、日常の用語を其儘襲踏するは理の當然にして、若し架空に新造語を使用するときは、經濟學は其存在の理由の一部を失ふの外なからんのみ。

マ氏は此點に於ては、經濟學は教を生物學に仰ぐ可きものなりとし、ダルウケンが各生物の生活の習慣、並に自然界に於ける其一般の地位を定む可き構造の部分は、其由來に關し最多の光明を與ふるものにあらず、却て最少の光明を與ふるものなりと云ひ、各生物が其包圍に順應するに最も適せる性質は、多くは比較的近時に發展したるものなりと云へ

るは、亦た經濟現象にも適用するを得可き至言にして、現時に於て其職分に應じて最も肝要なる地位を占むる經濟制度は、多くは最近の發生に係るものにして、雇主と労働者との關係、仲間商人と生産者との關係、銀行と其貸主及び借主との關係の如き皆然り。利子の如き、労働者間の分業の如き、地代の意義の如き亦皆然らざるはなしと云ひ、而して又同時に吾人は其用語の沿革を研究するを忘る可からず、假令目前の用の爲めに經濟學を研究するにしても、成る可く用語を過去の慣用と背馳せざらしめ、之に依つて吾人の祖先が爲したる經驗を教訓とするを得るを勉めざる可からずと云ふ。其他氏のミルを引照しバヂオットを擧ぐる別段紹介の用を見ず、多くは氏が彼に偏せず、是れに黨せず、英國流の客觀主義も可なり、獨逸流の主觀主義も不可なし、行爲論も執る可し、動機論も捨つ可からず、専ら現在生活を對象とするも、亦歴史的研究法も加味す可して、折衷主義の立場を反覆するものを見て大過なし。行論の行程に別段の加ふる所あるを見ざるなり。吾人の切に氏より聞かんを欲するは、如此常識談にあらず、嚴正なる科學的立場より見たる經濟學講究の順序如何に關する氏の見解是れなり。然るに本章に於て氏の論ずる所は、到底吾

人の望に副ふものにあらず。されば以下第二章以降に於て氏が富其他の根本概念を論ずる條に就て、更らに仔細に氏の所懐を窺ふの外なし。」

## 第一章 補論

經濟學の立場は何を以て始む可きやは、古來學者間に種々の論あり。其重なるものを學ぐれば、

- 一 ラウ其他舊派の學者は多くは財の概念より始む、ロツシアも原論第四版迄は財より始め、第五版以後は人間其物より始む可しと改め
- 二 ワグナーは人類の經濟的本性より始め
- 三 シエフレは人間其物より始め
- 四 リンドヴルム及シユモラーは經濟の概念より始め

五 ゴーツェル及半ば舊派の學者は多く經濟行爲の概念より始め

六 フックスは經濟と經濟行爲を併立して始む

るが如き是れなり。之に對して予は嘗て欲望より始む可きを主張せり。曰く

『此等の説明の方法は所謂循環法になつて其何れから始めても、つまり最後に何か説明を要せないで分つたさとしてある前提が一つ残つて仕舞ふ。例へば財を以て出立點として經濟行爲とは財を得るものである、經濟とは如此經濟行爲の總稱であると云ふときは、然らば財とは何であるかとの間に答へなければ充分の解答でない。然るに財とは人間の欲望を充たすものであると答へる。さうするに欲望とは何であるかとの反問が起らざるを得ない、又人類の經濟的本性を以て出立點としても其通である。經濟的本性に驅られてする行爲が經濟行爲であるを説明した丈で、經濟的本性なるもの、何であるか分らない間は、悉く半成の説明に止るのである。然るに經濟的本性とは何であるかと詰めて見れば、人類の欲望を充たさんとする衝動と同意義になつて仕舞ふ。其他人間其者、經濟其者を以て出立點とするときは、分らないものを以て分らないものに答へるこゝ



となる。即ち一の未知數の値は他の未知數であること云ふことになる。殊に人間其物と云ふは極めて幼稚な説明の仕方、經濟學は人間に關する學問たるは元より言ふ迄もないことを忘れたものである。經濟學は人間の總ての方面を研究するのでなく、唯其經濟生活に發現して居る處を研究するのである。換言すれば、經濟學は人間の經濟的方面を研究するのである。されば此經濟的方面とは如何なる方面を云ふやと問ふことを要する。處が經濟的方面は即ち經濟行爲なり、經濟なりとして、此等を以て説明の出立點とするときは、人間百般の行爲中特に經濟行爲となるものと其然らざるものととは、何に依て判別するかの問が出て来る。經濟行爲とは人類の經濟を營む行爲なりと答へれば、然らば經濟とは何ぞやとの問が出て来て、つまり段々堂々巡りをして元の處へ戻つて来るの外は無くなる。然るに此經濟とは何ぞやとの間に答へるには、經濟の依て起り、經濟行爲なるもの、依て發動し来る淵源がなければならぬ。そこで之れを名けて人類の欲望と云つて居る。即ち其何れから説明を始めるにしても經濟の概念の出立點であり、到達點たる可きものは唯一つ、此欲望である。經濟行爲と云ふ概念は之から出立して歸納的に進んで始めて始めて解答し得るのである。(國民經濟原論第一卷本集後段に収録す)

故瀧本美夫教授は克く予輩の眞意を諒解せられて「福田君は津村君や、河上君や予なきは、經濟學の基礎觀念を論ずる、其説明の仕方が違つて居るのであつて、吾々は欲望の次に財を説き、其次に經濟行爲を説くのであるが、福田君は欲望の次に、經濟行爲を説き、其次に財を説く」云々云へり一橋會雜誌四十  
九號百十七頁此れ實に予が立論法の用意なり。即ち予が執る所の形式は第一の  $B \rightarrow S \rightarrow W$  にして、瀧本津村、河上諸君の執る形式は  $B \rightarrow W \rightarrow S$  即ち第三の形式たる  $S \rightarrow W \rightarrow B$  を前後したるものにして、經濟行爲本位論を逆に欲望本位論としたる一形式なり。予の見る所にては此形式は第三形式に勝らず、却て其缺點を共通に有するものなり。欲望ありとも直ちに財を生ぜず、先づ其道行として努力(經濟行爲)を喚起して後財を生じ若くは贏得するなり、努力なくして直ちに財生ずるの理は予に於て解すること能はず。予は三氏之説を異にするは遺憾とすれども、遽かに舊説を改む可き理由を見ざるものなり。

近來ワグナーは其『理論的社會經濟學』なる新著に於て此の問題を論じ、經濟學出立點に關する論争は、要するに、

一 個人を以て始むるもの、社會を以て始むるもの  
 二 欲望を以て始むるもの、財を以て始むるもの、人間を以て始むるもの

の二點に歸着す可し云へり。右書二  
十二頁 而して氏自らは個人を以て始る者に與し、個人の經濟的本性なるものに論を起す可しこの舊説を維持せり。昨年出版の『精確科學としての經濟學』なる書に於てヴォルフは欲求 *Begehrung* を以て説明を始む可しとして曰く、

*Motiv (nicht Kraftquelle) wie aller bewussten Menschentätigkeit so auch der Wirtschaft sind "Begehungen" des Menschen, seine Bedürfnisse, Ansprüche und Wünsche. S. 4.*

凡ての意識的人間行動並に經濟の動機 (力源に非ず) は人間の欲求即ち其欲望・要望及願望是れなり。右書第四頁

而して欲求を分て

- 一 動物的植物的欲求
- 二 官能的欲求
- 三 想像及理性的欲求 (アレンタノ教授も亦無限の欲望は想像の欲望あるのみとす)

の三ミなして立論せり。此論稍々予が意を得たり。

\* \* \* \* \*

以上は、本書舊版に於て、記し置きたる所を若干字句を修正したるものなり。然るに、此の欲望本位論は、端くも其後數年にして、獨逸より歸朝せられたる左右田博士によつて、いさも痛激に駁撃せられたり。其論載せて博士の『經濟哲學の諸問題』にあり。而して予自らも、欲望本位論の舊説は、よし博士の言はるゝが如き謬説たらずも、亦た決して妥當の見解ならざるを知り、既に『國民經濟講話』に於ては、博士の説を待つまでもなく、稍々異りたる説明を用ひたり。詳しくは、讀者の同書に往き見られんことを切望せざるを得ず。但し其の書の説明を以てするも、左右田博士の贊同を見出すことは不可能なる可し。何ミなれば、博士の非難せらるゝは、單に、欲望を以て、本位ミする、こと其事にのみ止るにはあらず、ア・プ・リ・オ・リに出立せざる立論一切を斥けらるゝものなればなり。此點に於て、予は、如何に考ふるも、未だ博士の説に服従すること能はず。殊に、博士は、經濟學てふ特殊科學ものに就て、何が其のア・プ・リ・オ・リたる可きやを、判然と説示せられざるが故に、予

等は適從する所を見出すを得ず。單にアプリアリを以て出立す可しと丈けにては、經濟學を他の科學と分別す可き標準は與へられず。博士の論は、經濟學にも、法律學にも、政治學にも、將た亦た社會諸科學の一切に共通の點のみを説かれたるものにして、其特に『經濟哲學』と標榜せらる可きものは、終に發見し能はざるなり。博士は、貨幣の概念を以て、經濟學にての文化價值とするも可ならんとの一の假定説を提出せらる。此くの如きは、本書に於て、予が既に力説したる所なること、讀者自ら之を知らん。マーシアルも亦貨幣秤量の標準てふことには、大に力を用ひて説明し居れり。左右田博士説は、古き商品に新しき商標を貼付したるに類せざるか、疑なき能はず。概念と其形式に全力を傾倒すること、予の斷じて服し難き所なり。

\* \* \* \* \*

本章参考書は、右國民經濟原論に掲げたるもの、外總ての經濟原論の首部を見る可し。ワグナーの書の原名は、

Wagner, Theoretische Sozialökonomik. Leipzig 1907.

ヴォルフのは

Wolf, Nationalökonomie als exakte Wissenschaft. Leipzig 1908.

新刊書にては

Schumpeter, Das Wesen und Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie. Jena 1909.

あり、併せ見る可し。

## 第二章 富

英米の學者が Wealth と云ひ、佛國の學者が Richesses と云ひ、伊國の學者が ricchezza (或ひは patrimonio) 但し此語は寧ろ獨語の Vermögen 即ち財産に該當す) と云ふは皆之を邦語に譯して富とす可し。獨逸語にて富を言表はす語は Reichtum なれども其用法は英佛伊語に於けるに異り、富有なる状態の意に用ゆること多く、從て英米佛伊の學者が富なる語を用

ゆる處には概ね *Out* 即ち財なる語を用ゆ。英米佛伊の學者も稀には財なる意の語 (*英 goods 佛 biens 伊 beni*) を用ゆることなきにあらざれども多くは富なる語を採る。されば富なる語と財なる語とは全く同義なりやと云ふに然らず。而して兩語の異同も亦必ずしも一定せず。近來英米の學者も獨逸流に倣ひて財なる語を用ゆること稍々多く、殊にマーシアルは屢々此語を用ゆ。普通の解釋に従へば、多くは富なる概念は總括的にして、財なる概念は特定語なりとし、一は廣く、一は狭き意義を有すこと倣すもの、如し。殊に獨逸語の富は一の狀態(富有なる狀態)を言表はすものにして、其内容は甚だ廣汎なるに、財なる語は特に指名し得可きもの、殊に實體的存在を意味するもの、如し。然るにマ氏が説は其反對に出で、財なる語は汎く富なる語は狭く解釋す可きものと爲せり。即ち前章に於て單に欲望の對象にして努力の結果たる物と言ひしものを以て財と爲し、其中富たるものご然らざるものごありと論ず。曰く

*In the absence of any short term in common use to represent all desirable things, or things that satisfy human wants, we may use the term Goods for that purpose.*

汎く願望の目的たるもの、若くは人間の欲望を充たす物を言顯はす可き常用語なきに依り吾人は財なる語を此義に充て用ゆ可し

ご。而して氏は謂へらく、富ごは直接又は間接に欲望を充たす物より成り、從て富は汎く願望の目的たるもの又は人慾を充たすものより成るものなれども、願望の目的たるもの全部が富たるにあらず。友人の愛情の如きは人生の幸福に肝要なる要素なりご雖も、之を目して富ご云ふ能はず。されば先づ汎く願望の目的物たる財の概念を正し、次で財の中富たる可きもの、何なりやを究めざる可からずと。

氏は先づ財に有形財と人的財又は無形財との二種あるを云ふ。有形財ごは有形物は勿論此有形物を保持使用し、又は収益し并に將來に於て有形物を得る總ての權利を言ふ者にして、自然の物質的賜物、即ち土地河海空氣氣候農業鑛業漁業製造業の產物、建物、機械、器具、抵當權、其他債權、公私會社の株式、獨占專賣權、版權及び地役權、其他の習慣に基く權利等を含み、旅行の機會、好風景を楽しむの便、博物館に入るの便宜等も亦嚴密に云へば此中に入る可きものとせり。此の列舉は極めて雜駁にして一定の系統なきは、マ氏の常套に